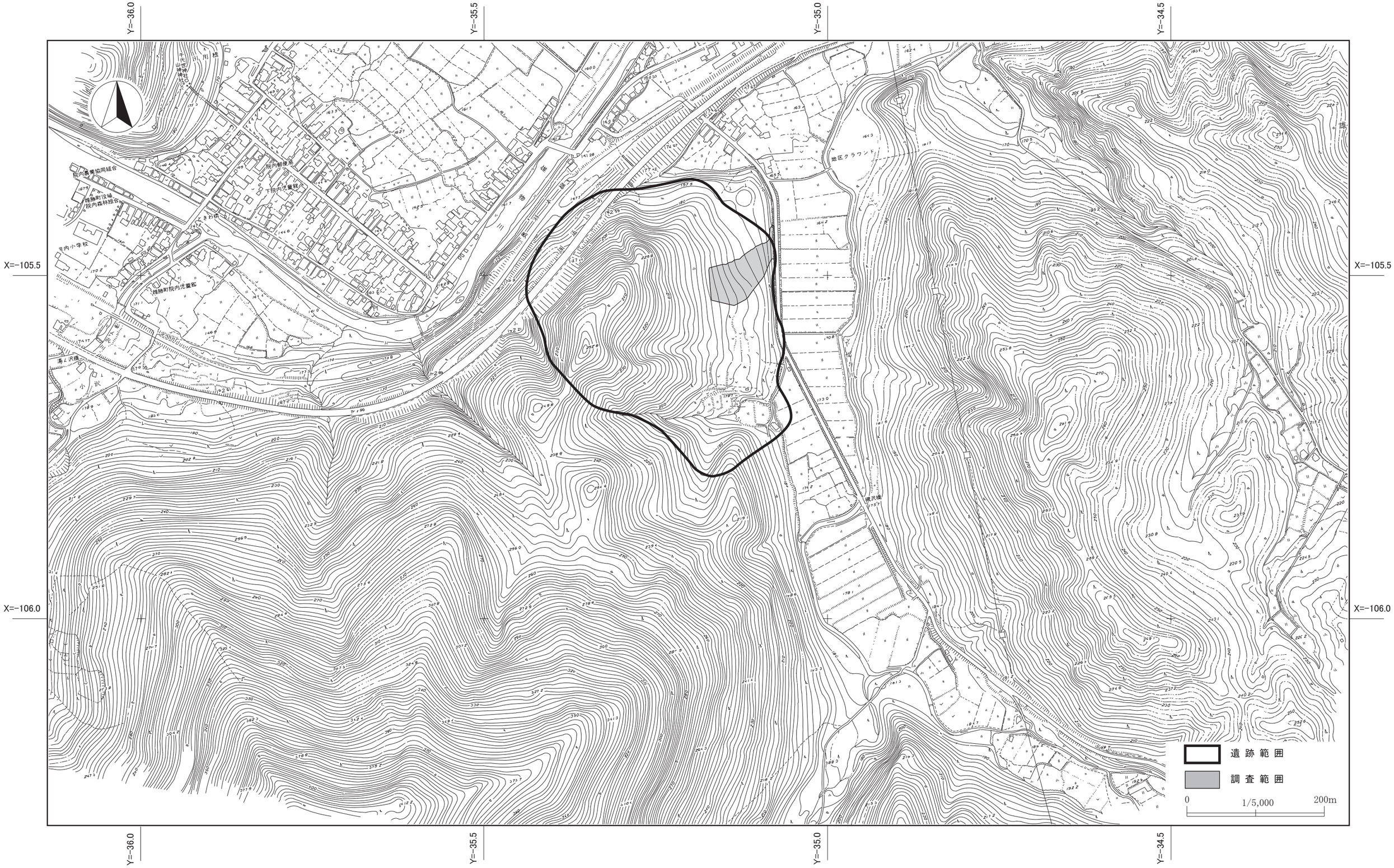


第6図　臼館跡周辺地形図

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

臼館跡はＪＲ院内駅から東約１㎞の下院内地区の、雄物川とその支流大槻沢川（おおつきさわがわ）の合流点近くに所在する。ここは標高約180 ～ 250mの出羽山地を形成する鳥帽子内山地の北端で、表層地質が酸性軽石凝灰岩の丘陵地に立地している。丘陵の頂上には南北に連なる曲輪が現況の地形でも確認できることから、これまで中世の城跡と考えられてきた。今回の調査区は遺跡の東端、標高176 ～ 193mの丘陵裾部に当たる。調査の結果、中世の遺構は見つからなかったが、縄文時代前期・後期・晩期の遺物とともに、竪穴建物跡・掘立柱建物跡・土坑・フラスコ状土坑などの遺構が見つかった。

調査区の地形はその大部分が東に向かって下る急な斜面となっているが、中央部には沢が入り込み、沢に沿って幅の狭い平坦面が北東に延びている。この狭い平坦面で、縄文時代前期と考えられる竪穴建物跡が１棟見つかった。後世に半分ほど削られているが、本来は直径６ｍほどの円形であったと推定される。竪穴建物跡の中に炉は見つかっていないが、屋根を支えるための柱を据えた柱穴を確認した。平坦面から斜面にかけては、食料などを蓄えるための貯蔵穴と考えられている、底が広く口のすぼまったフラスコ状土坑が見つかっている。

平坦面沿いの沢では縄文時代の土器や石器が多量に出土している。出土した土器の大半は縄文時代前期のもので、この時期に遺跡が活発に利用されていたことを示している。遺物の中で特に注目されるのが磨製石斧の未製品である。磨製石斧の完成品は少なく、上手く出来たものは遺跡の外に持ち出されたと考えられる。その他、石鏃や石匙などの材料となる剥片とその原石が集中していた土坑も１基（ＳＫ100）見つかっている。 臼館跡の縄文人たちが石器作りと深く関わりながら暮らしていたことが窺われる。

平坦面では、縄文時代前期の他に後・晩期の遺構と遺物も僅かに確認されている。掘立柱建物跡は６本の柱が亀甲形に並んだもので、１棟のみ見つかっている。詳しい時期は分からないが、秋田県内の縄文時代後・晩期の遺跡で発見される建物と柱の並びが似ている。掘立柱建物跡と同じ場所にある土坑の中からは、完形に近い後期中頃の土器が出土したことから土坑墓と考えられる。

今回の調査地点は、縄文時代前期・中期・後期・晩期に亘って利用されていたことが分かった。

第２節　調査の方法

遺構精査や表土以下の掘り下げは移植箆・スコップなどを使用して人力で作業を行った。調査方法は、計画的な調査計画立案と遺構・遺物の検出地点を把握するため、グリッド法を採用した。設定方法は、調査区付近に設置されていた測量基準点から国家座標第Ｘ系（世界測地系）に整合する任意の点（Ｘ＝－105.50、Ｙ＝－35.10）を導き出し、これをグリッド原点ＭＡ50とし、これを通る第Ｘ系座標北を求め、このラインを南北基線、これに直交するラインを東西基線とした。この東西南北に沿って４×４ｍのグリッドを設定し、東西方向には東から西へ４ｍごとに「ＬＦ・ＬＧ・・・ＬＴ・

ＭＡ・ＭＢ・・・ＭＳ・ＭＴ」という２文字のアルファベットを、南北方向には南から北へ４ｍごとに「39・40・・・48・49・50・・・69・70」という２桁の数字を与え、このアルファベットと数字の組み合わせからなる記号を各グリッドの名称とした。なお、グリッド杭は４ｍ間隔の東西基線と南北基線の交点全てに打設し、前記のグリッド名称を南東隅の杭に記入した。

調査の記録は、平面図・断面図及び写真で行った。平面図・断面図の縮尺は１/20を原則としたが、遺構細部の図面を必要とする際には１/10で作図した。写真撮影は、35㎜のモノクロ、リバーサル、カラーフィルム及び、デジタルカメラを使用した。遺物は、遺構内出土のものは出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。遺構内出土のものは、適宜出土地点の位置を記録した。

第３節　調査の経過

調査は６月15日から10月30日まで行った。

・第１週　　６月15日（火）～６月18日（金）資材搬入とコンテナハウス周辺の環境整備を行った後、調査区内の環境整備を行い、調査を開始した。調査区内の環境整備は草刈りと枝葉の除去で、完了後に調査区現況の写真撮影を行った。調査は先ず埋め戻された調査確認トレンチを掘り上げ、他にもトレンチを追加設定して掘り下げ、調査区内全体の堆積状況の把握に努めた。調査区全域にわたって人工改変による段状地形が認められるため、簡易な現況地形図の作成も併せて行った。

・第２週　　６月21日（月）～６月25日（金）

週前半にベルトコンベアーの搬入及び設置を完了し、先週に引き続いて確認調査トレンチと追加トレンチの掘り下げを行い、トレンチ排土を搬出した。調査区東側ではトレンチ掘削により堆積状況を確認できたため、調査区東側境界から西に向かって表土除去を開始した。

・第３週　　６月28日（月）～７月２日（金）

先週、調査区東側境界から西に向かって表土除去を開始したが、今週から南東方向にも向かって表土除去を行った。

人工的な段状地形簡易作図のレベリングを終了した。

東側斜面の基本土層断面図作成を行った。

・第４週　　７月５日（月）～７月９日（金）

調査区北東側から南西側に向かって表土除去を行った。

表土除去が終了した所は、ほどなく遺物包含層（Ⅲ層）や地山面まで掘り下げ、遺構検出と遺構精査に入った。

南東側斜面の基本土層断面図作成は終了した。

・第５週　　７月12日（月）～７月16日（金）

調査区北東側から南西側に向かって表土除去を行っている。遺構確認調査で遺構・遺物が多いと報告されている、中央部付近の最も低くなっている部分にも一部入った。

表土除去が終了した所は、ほどなく遺物包含層（Ⅲ層）や地山面まで掘り下げ、遺構検出と遺構精査を行った。

・第６週　　７月20日（火）～７月23日（金）

調査区北東側から南西側に向かって粗掘を進めている。遺構・遺物が多いと予想されている、最も低い中央部付近の粗掘にも先週から一部入った。ここは表土～地山まで1.5mほどもある所が多く、第Ⅲ層の遺物包含層がよく残った。

遺構精査は北東側～東側で全面的に進めた。

・第７週　　７月26日（月）～７月30日（金）

今週は粗掘りと遺構精査を併行して行った。

粗掘り調査区南側平坦面については完了し、中央部沢地付近を先週から継続して進めた。

遺構精査は北東側の急斜面で検出したフラスコ状土坑群、南東側平坦面で検出した土坑群及び柱穴様ピット群を中心に進めた。

・第８週　　８月２日（月）～８月６日（金）

中央部沢地付近の粗掘りと遺物包含層の掘り下げ、南側平坦面の遺構精査を併行して行った。

中央部沢地付近では遺物包含層の掘り下げを進め、良好な出土状況を示す遺物のみ、写真撮影と実測を行った。

遺構精査は、北東側の急斜面で検出したフラスコ状土坑群、南側平坦面で検出した土坑群及び柱穴様ピット群を中心に進めた。

・第９週　　８月９日（月）・８月10日（火）

中央部沢地付近の粗掘りと遺物包含層の掘り下げ、南側平坦面の遺構精査を併行して行った。

中央部沢地ではＭＫ46区付近の沢頭部で遺物包含層が良好に残存していることを確認した。また他の部分では遺物包含層の掘り下げを継続して進めた。

遺構精査は北東側の急斜面で検出したフラスコ状土坑群と南側平坦面で検出した土坑群及び柱穴ピット群について完了し、中央部沢地付近で新たに検出した遺構の精査を進めた。

・第10週　　８月18日（水）～８月20日（金）

中央部沢地付近の遺物包含層の掘り下げと、南側平坦面の遺構精査を併行して行った。

中央部沢地では粗掘りをほぼ終了し、土層断面図の作成と遺物包含層の掘り下げ、遺物の取り上げを継続した。

遺構精査は南側平坦面及び中央部沢地で新たに検出したものについて、作業を継続して進めた。

・第11週　　８月23日（月）～８月27日（金）

中央部沢地付近の遺物包含層の掘り下げと、南側平坦面の遺構精査、西側斜面で粗掘りと遺構検出を併行して行った。

中央部沢地では、遺物包含層残存部の土層断面図作成をほぼ終了し、土層ベルトの取り外しと遺物包含層の掘り下げを進めた。

遺構精査は中央部沢地検出分については完了し、南側平坦面において作業を継続した。

西側斜面では新たに土坑２基を検出し、精査を進めた。

・第12週　　８月30日（月）～９月３日（金）

中央部沢地付近の遺物包含層の掘り下げと、西側斜面の遺構精査、西側斜面で粗掘りと遺構検出を併行した。中央部沢地では、遺物包含層残存部の土層断面図作成を終了した土層ベルトの取り外しと

遺物包含層の掘り下げを進めた。

遺構精査は南側平坦面において作業を継続している。西側斜面では土坑２基の精査を継続した。

２日、空中写真撮影を行う。

・第13週　　９月６日（月）～９月11日（土）

西側斜面ではベルトコンベアーを再設置して粗掘りを進め、同時に遺構確認作業を行った。今のところ遺構は確認されておらず、出土遺物も非常に少ない。

遺構精査は、南側平坦面で検出したＳＩ95竪穴建物跡及び西側斜面で検出したＳＫ100土坑を除き、精査を完了した。

11日には遺跡見学会を行い、雨天の中116名の参加者を得た。

・第14週　　９月13日（月）～９月17日（金）

西側斜面において粗掘りと遺構確認作業を行い、全て終了した。西側斜面で新たに確認した遺構は土坑１基のみである。

その他、遺構が集中する南側平坦面周辺を中心に、再度遺構確認を行い、新たに土坑３基、フラスコ状土坑１基を検出した。残りの遺構と併せて精査を進めた。

・第15週　　９月21日（月）～９月24日（月）

現場及び事務所周辺の後片付けを行い、大方の作業は終了した。この他、残りの遺構精査と地形測量を継続して進めた。

・第16週　　９月27日（月）～９月30日（木）

先週南西側平坦面で新たに検出した焼土遺構群と西側斜面及び中央沢部で継続していた遺構精査、調査区全体の地形測量を完了し、調査を終了した。

９月29日には現場引き渡しを行い、30日には資材運搬などの撤収作業を行った。

第４節　整理作業の経過と方法

遺構関係の整理作業では、遺構調査段階で作製した原図をもとに、平面図・断面図を組み合わせて製図、レイアウトを行い、遺構図は縮尺を１/40、焼土遺構は縮尺を１/20で図示した。版面に収まらないものは、例外的に別縮尺で図示している。また、遺構内出土遺物については、出土遺構との関連性を重視する意味で極力図示した。遺物関係では、遺物の分類に当たって、各遺物全点観察を行い、種別や器種に漏れが生じないように注意した。土器については、可能な限り推定口径を復元して実測を行った。また、土器破片の分類では、胎土・焼成・原体・調整の種類などからできるだけ同一個体を抜き出し、別個体と思われる資料を報告書掲載資料として抽出した。

第４章　調査の記録

第１節　基本層序

今回の調査区は遺跡の東端、標高176 ～ 193mの丘陵裾部に当たる。

調査区の地形はその大部分が北東に向かって下る急な斜面となっているが、中央部には沢が入り込み、沢に沿って幅の狭い平坦面が北東に延びている。調査当時の状況は植栽された杉が伐採されて根が多く残っていた。現代には畑地として利用されていたようである。斜面上部には段状地形が残っており、当初は館跡に伴うものかと想定したが、出土遺物などから近・現代の盛土と判明した。

基本土層図作成用のトレンチは、遺跡確認調査時のトレンチ調査部分、地形や測量用グリッドの方向も勘案しながら、「基本土層Ａ」ラインから「基本土層Ｊ」ラインまで設定し、観察･図化した（第８図)。今回の報告では紙数の関係もあり部分的に限定して、遺跡の基本土層全体が分かる平坦面沿いの沢中央付近の一部について、挿図・土層注記表を掲載した（第９・10図)。

沢では縄文時代の土器や石器類が多量に出土している。出土した土器の大半は縄文時代前期のものである。その他、沢上面では石鏃や石匙などの材料となる剥片とその原石が集中して見つかった土坑も1基（ＳＫ100）見つかっている。以下、沢や平坦面の層名、土色、層厚、主な特徴について順番に記述し、詳細は挿図・土層注記表にゆずる。

「基本土層Ｃ・Ｈ」ラインのⅠａ層は暗褐色土で、層厚は３～ 40㎝の表土である。Ⅰｂ層は地山由来のにぶい黄褐色土で、層厚は２～ 80㎝である。段状地形の肩部ほど厚い事から、比較的新しい時期の盛り土の可能性もある。Ⅱａ層は黒褐色土で、層厚は２～ 10㎝、Ⅱｂ層は黒褐色土で、層厚は２～ 24㎝である。Ⅱａ・Ⅱｂ層からは近世以降の陶磁器が出土している。

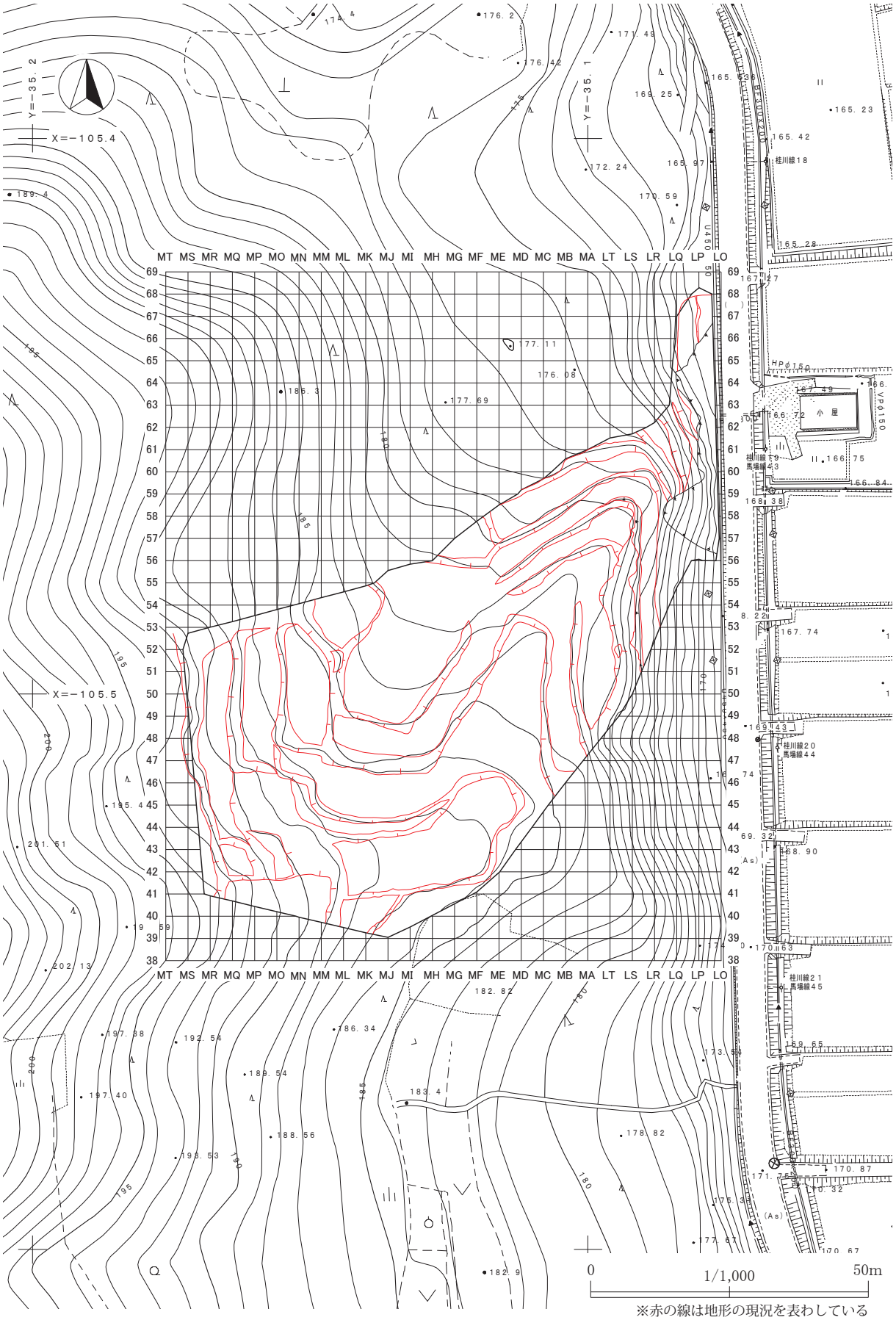
Ⅱｃ層は黒褐色土で、層厚は２～ 14㎝である。この層は科学分析の結果、915年に十和田カルデラから噴出した十和田aテフラ（火山灰－「Ｔo-a」）であることが判明した。

Ⅲａ層は黒褐色土で、層厚は２～ 16㎝である。Ⅲｂ層はここでは見られない。

Ⅲｃ層は黒褐色土で、層厚は２～ 26㎝の縄文時代の遺物包含層である。沢のＭＧ53グリッドやその周辺で縄文時代前期の完形品や完形品に近い土器（第22・23図、図版８）や石器類が多く出土している。Ⅲｄ層は黒褐色土で、層厚４～ 20㎝である。Ⅲｃ層と同じ縄文時代の遺物包含層である。この層でも前期の土器や石器類を含むが、Ⅲｃ層よりは少ない。

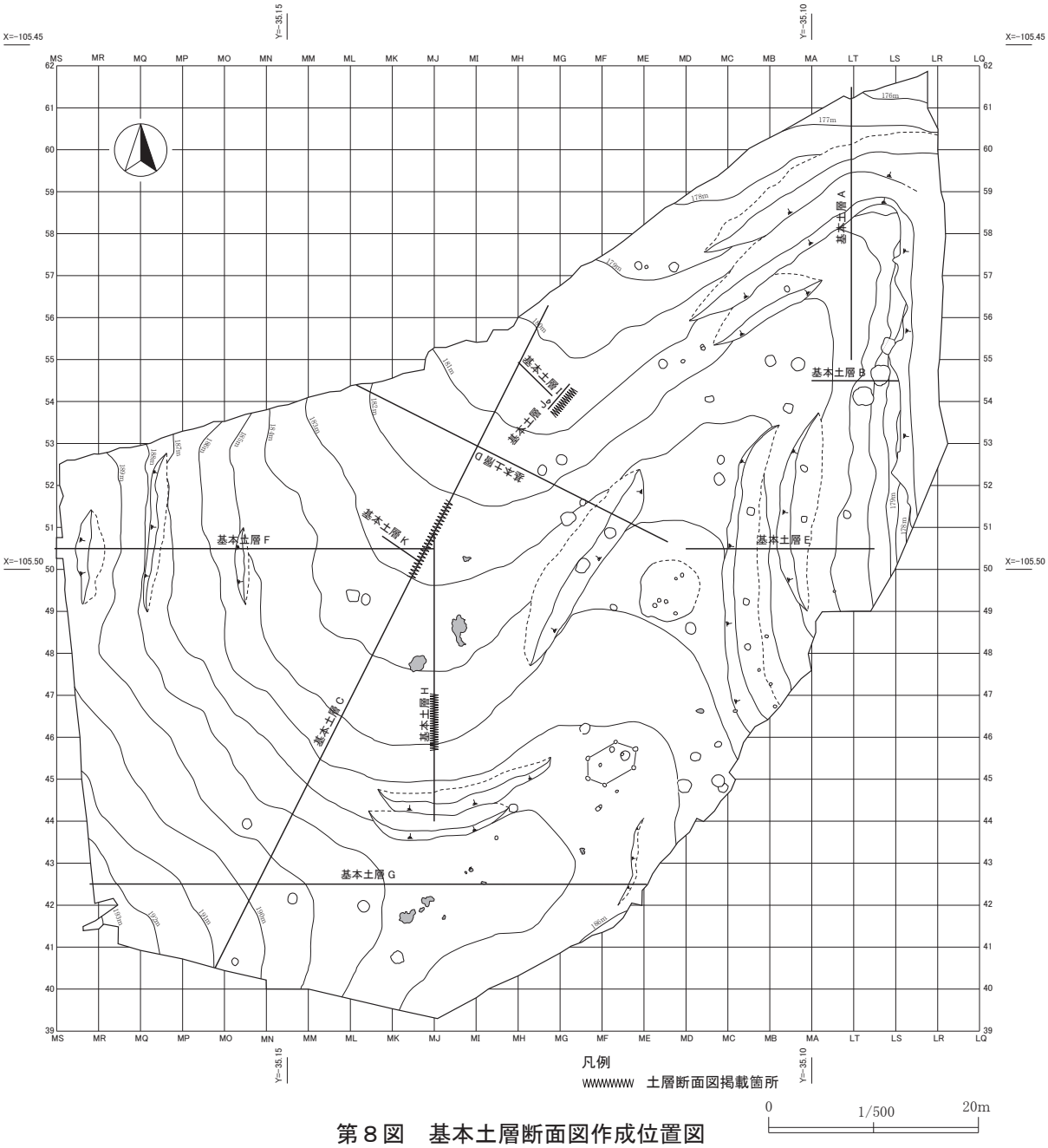
Ⅳａ層は暗黒褐色土で、層厚４～ 16㎝の地山漸移層である。Ⅳｂ層は黄褐色土で地山である。なお、Ⅲｂ層は「基本土層Ｊ」ラインに見られ、褐色土で、層厚は４～ 20㎝である。

平坦面では縄文時代前期と考えられる竪穴建物跡が１軒、他に縄文時代後期と考えられる掘立柱建物跡1棟と遺物もわずかに確認されている。また、この遺構とほぼ同位置にある土坑（ＳＫ01）からは、後期中頃の土器が出土している。ここでは、表土が層厚10 ～ 20㎝前後と薄い区域が目立ち、表土下で直ぐ遺構を検出した所もある。肩部は表土下の途中の基本層位が欠落し、Ⅲｃ層、Ⅲｄ層、Ⅳａ層が残りⅣｂ層へと続く。表土は最大80㎝と大変厚い所が多く、近・現代の盛り土と推定される。

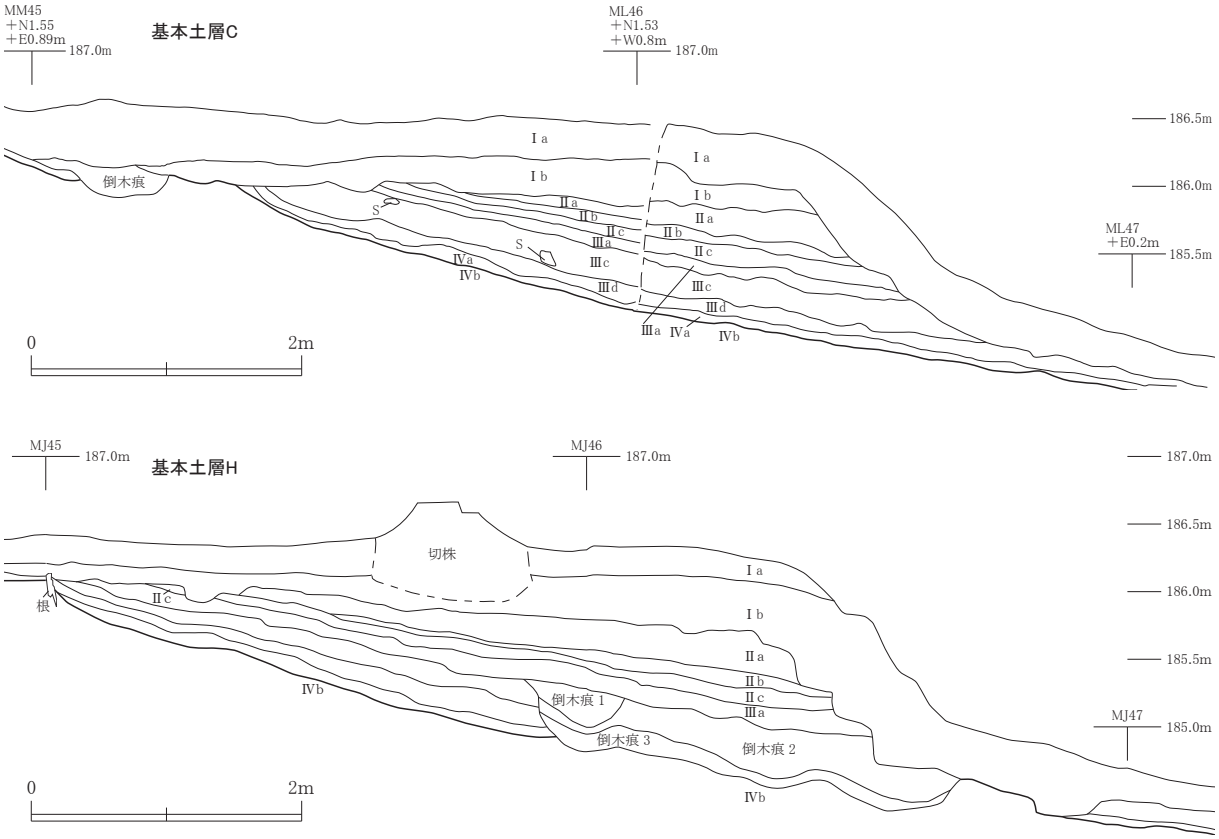


※赤の線は地形の現況を表わしている

第7図　グリッド配置及び現況地形図



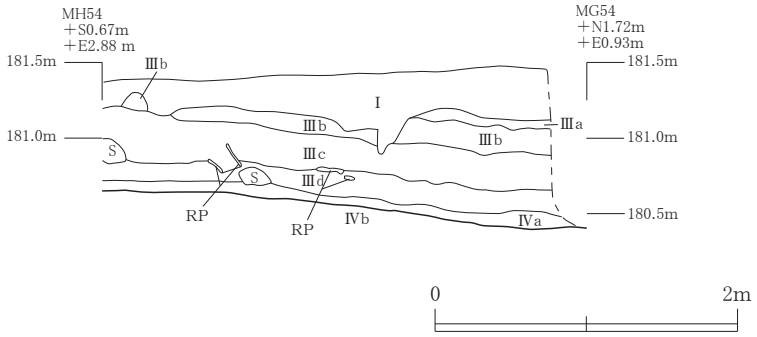
第８図　基本土層断面図作成位置図



略号	層位	土　色	記　号	土性	粘性	締まり	混　入　物
C・H	Ⅰa	暗褐色土	10YR3/4	SiCL	2	4	7.5YR5/8明褐色土粒（φ2～3㎜）１％　10YR7/6明黄褐色地山土粒（φ3～10㎜）５％ 炭化物粒（φ2～10㎜）７％　－表土－
	Ⅰb	にぶい黄褐色土	10YR4/3	SiCL	3	3	10YR7/6明黄褐色地山土粒（φ1～3㎜）１％　炭化物粒（φ1～5㎜）５％
	Ⅱa	黒褐色土	10YR3/2	SiC	4	2	10YR7/4にぶい黄褐色土粒（φ１㎜以下）７％　炭化物粒（φ1～2㎜）１％
	Ⅱb	黒褐色土	10YR3/1.5	SiC	4	2	炭化物粒（φ1～5㎜）３％
	Ⅱc	黒褐色土	7.5YR3/1.5	SiC	4	3	10YR8/6黄橙色土粒（φ1㎜）３％　炭化物粒（φ1～2㎜）３％　－十和田ａ火山灰（Ｔｏ－ａ）－
	Ⅲa	黒褐色土	10YR2/2	SiC	4	4	10YR8/4浅黄橙色土（φ1～3㎜）薄い帯状（火山灰）で部分的に7％ 炭化物粒（φ1㎜以下～1㎜）１％
	Ⅲc	黒褐色土	10YR3/2	SiC	4	3	10YR8/6黄橙色火山灰粒（φ5～20㎜－部分的）１％ 10YR3/4暗褐色土塊（地山由来）（極大）φ１０～５０㎜。部分的に50％以上含む（特に切株の下あたり）
	Ⅲd	黒褐色土	10YR2/2	SiC	4	4	10YR7/8黄橙色地山土粒（φ1～10㎜）７％
	Ⅳa	暗褐色土	10YR3/3	SiC	4	4	10YR6/6明黄褐色地山土粒（φ20㎜）50％　10YR4/3にぶい黄褐色土（φ50㎜）３％　－漸移層－
	Ⅳb	黄褐色土	10YR5/8	SiC	3	5	炭化物粒（φ１㎜以下）５％　－地山－
	倒木痕１	黒褐色土	10YR2/2	SiC	4	4	10YR2/3黒褐色土塊（20㎜～50㎜）３％　10YR8/4浅黄橙色火山灰・帯状に５％　帯幅（５㎜）
	倒木痕２	黒褐色土	10YR3/1	SiC	4	5	10YR8/6黄橙色火山灰帯状に５％　Ⅲ－４層との境。10YR6/6明黄褐色地山土粒（φ1～5㎜）７％ 10YR3/3暗褐色土15％。石器含む。
	倒木痕３	黒色土	10YR2/1	SiCL	4	5	10YR6/6明黄褐色地山土粒（φ1～5㎜）７％　炭化物粒（φ1～10㎜）３％

第９図　基本土層断面図（１）

基本土層J



略号	層位	土　色	記　号	土性	粘性	締まり	混　入　物
J	Ⅰ	暗褐色土	10YR3/3	SiCL	2	5	10YR浅黄橙色軽石（φ3～5㎜）５％　10YR6/8明黄褐色地山土粒（φ1～5㎜）７％ 炭化物粒（φ1～20㎜）３％
	Ⅲa	黒褐色土	10YR2/2	SiCL	2	4	10YR8/4浅黄橙色軽石（φ1～3㎜）３％　10YR6/8明黄褐色地山土粒（φ1～3㎜）１％ 炭化物粒（φ１㎜）１％
	Ⅲb	褐色土	10YR4/4	SiC	3	3	10YR6/6明黄褐色地山土粒（φ1～5㎜）３％　10YR3/3暗褐色土塊（φ20～50㎜）10％ 炭化物粒（φ１～３㎜）５％
	Ⅲc	黒褐色土	10YR3/2	SiC	3	3	10YR7/6明黄褐色土粒（φ1～3㎜）５％　炭化物粒（φ1～5㎜）７％　土器片・石器類を多く含む
	Ⅲd	黒色土	10YR2/1	SiC	4	2	10YR7/6明黄褐色土粒（φ1～3㎜）３％　炭化物粒（φ1㎜）１％　土器片・石器類を含むが、 ４層より少ない
	Ⅳa	褐色土	10YR4/4	SiC	4	4	10YR3/2黒褐色土10％　－漸移層－
	Ⅳb	黄褐色土	10YR5/6	SiC	4	5	混入物なし　－地山－

土層注記凡例

※1 「土色」・「土性」の表記は、新版標準土色帖（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、2003）による。
※2 「粘性」・「締まり」の表記は、度合いの強い方弱い方から１～５の数字を用いて示した。

第10図　基本土層断面図（２）

第２節　検出遺構と出土遺物

今回の調査では縄文時代の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、フラスコ状土坑、焼土遺構、柱穴様ピットを検出した。遺構の土層断面図の土層注記は第３・４表に掲載した。遺物は出土状況・点数や掲載点数を記した。詳細は観察表に明記している。

１　竪穴建物跡

ＳＩ95竪穴建物跡（第11図、図版10・11）

ＭＣ48～50グリッド、ＭＤ48～50グリッド、ＭＥ48・49グリッドに位置する。Ⅰ層を除去後、Ⅲ層面において黒褐色の土が見られた。当初、Ⅲ層と考え掘り下げていたが、途中、楕円形のプランが確認され、竪穴建物跡の埋土と認定した。確認時においては竪穴建物跡内の埋土は４分の１程度しか残存していなかった。そのため、遺構の北東側半分のラインは推定のものである。

規模は長径推定6.40m、短径5.86mの楕円形を呈すると考えられる。確認面からの深さは残存部分では0.44mである。底面は、ほぼ平坦であり南北方向に緩やかに傾斜している。壁は立ち上がりが明瞭で、緩やかで直線的に立ち上がる。埋土は黒褐色土の有無により２層に分層した。２層は炭化物が多く見られ、石皿や磨製石斧の未製品が混入していたことなどから人為的に埋め戻した土である。１層は２層の埋め戻し後の窪んだところに自然堆積したものと考えられる。柱穴は６基検出したが、規則的な配置は見られなかった。Ｐ６以外の５基は床面からの深さが16～18㎝で、平面や形状もまたほぼ同じ規模であった。土層はＰ１・５においては断面の左右で黒褐色の柱痕と埋め戻した明黄色の２層に分かれた。Ｐ２～４は中心に暗褐色の柱痕があって、左右に明黄色の埋め戻し土が入っていた。また、Ｐ６は確認調査段階で完掘していたため土層を確認出来なかった。

遺物は１層から土器片１点・剥片４点・礫１点が出土した。２層からは土器片８点・剥片39点・礫石器１点・石皿５点（図版10・11）・磨製石斧の未製品１点（図版10・11）が出土した。石皿と石皿の破片・磨製石斧の未製品は、建物跡の壁に沿うように並んでいた。土器は２点を図示した（第25図４・５、図版21）。４・５は２層から出土した。いずれも胴部で、焼成は硬質である。４は細く浅い斜位の沈線を、５は撚糸文を施文している土器である。石器は磨製石斧の未製品（Ａ１類）１点（第60図Ｓ61、図版24）、敲磨器類（Ｂ４類）１点（第60図Ｓ62、図版24）、敲磨器類（Ｄ１類）１点（第60図Ｓ63、図版24）、石皿（Ａ類）５点（第61図Ｓ64～67、第62図Ｓ68）を図示した。遺構の構築時期は出土した遺物の年代から縄文前期中葉と考えられる。

２　掘立柱建物跡

ＳＢ91掘立柱建物跡（第12図、図版３・９）

ＭＥ44・45グリッド、ＭＦ44・45グリッドにかけて位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）上面にてＳＫＰ38とＳＫＰ40の円形プランを確認し、柱穴であることが判明した。その後、その柱穴周辺のⅣ層（地山）面を10㎝程度下げたところ、ＳＫＰ60、ＳＫＰ81の円形プランを確認した。さらに周辺のⅣ層（地山）面を数㎝下げたところＳＫＰ82の円形プランとＳＫＰ83の不整楕円形のプランを確認し、亀甲形に６本の柱穴が並んだため、掘立柱建物跡とすることにしたものである。主軸方位は北

から56°東へ偏する。桁行方向の幅は約３ｍ、棟方向の規模は約5.4mである。掘立柱建物跡の内側からは、ＳＫ01・ＳＫ80・ＳＫＰ10・ＳＫＰ45が確認されているが、新旧関係は不明である。

確認された柱穴の規模は、直径（長径）0.34 ～ 0.49m、深さは0.45 ～ 0.82mで、底面標高は185.58 ～ 186.0mであった。ＳＫＰ40とＳＫＰ60では白色の明確な柱当りの痕跡がみられた。底面はどれもほぼ平坦で、壁の立ち上がりは明瞭で直線的に立ち上がっている。埋土は全ての柱穴で埋土の色や土層の粘性、締まり具合、混入物の割合などから２層～４層に分層することができた。また基本的には柱痕の片側または両側に、地山由来の明黄色の埋め戻しと考えられる土が堆積している。ＳＫＰ83においては、柱の抜き取り穴と考えられる掘込みがあった。

遺物はＳＫＰ40から土器片３点、ＳＫＰ82から土器片２点が出土している。このうちＳＫＰ40出土の土器２点を図示（第29図50・51、図版22）した。他は風化が激しく図示できなかった。50は口縁部で無文の土器、51は胴部に地文が縄文で楕円形の磨消縄文を施文する土器である。遺構の構築時期は土器から縄文時代後期と考えられる。

３　土坑

SK01土坑（第13図、図版３）

ＭＥ45グリッドに位置する。Ⅰ層を除去後、Ⅳ層（地山）上面において、黒色の広がりを確認した。当初は倒木痕と考えていたが、黒色土の南側で土器片２点が確認され精査をすると円形のプランが確認されたため、土坑と判断した。ＳＫＰ10と遺構の北西側で重複しており、ＳＫＰ10がＳＫ01より新しい。規模は長径0.95m、短径0.86mの円形を呈する。南西側で下端がやや上端より外側に出ている。確認面からの深さは0.34mである。底面はほぼ平坦で、立ち上がりは明瞭で壁は直線的に立ち上がる。埋土は土層の色・混入物の種類・混入割合から３層に分層した。堆積の状態や遺物の出土状況からみて、土坑を掘り、３層（地山由来の土が少ない）を少し埋め、礫や土器をその上に配置し、それと一緒に２層（炭化物混じりの土）を埋め、最後に２層の土が沈降したところに１層（地山由来の土が多い）が自然堆積したと推測される。

埋土からは２～３層を中心に土器片139点・石皿や凹石などの礫４点が出土した。土器は４点を図示した（第24図１・２、第25図６・７、図版21）。石器は敲磨器類（Ｄ１類）１点（第62図Ｓ69、図版24）、石皿（Ａ類）１点（第62図Ｓ70）を図示した。出土土器の１は３単位の波状口縁をもつ深鉢形土器で、底部から口縁部にかけて、外傾しながら直線的に立ち上がる器形である。口縁の波頂部中央にはそれぞれ円形の「ボタン」状突起を貼付している。胴部文様は口縁部下に斜縄文を施文後、横位に５条の沈線で文様帯を構成し、それぞれの「ボタン」状突起下の文様帯を縦位の「ノ」字状沈線で区画する。文様帯の下は無文である。底部外面は網代底となっている。２は粗製の深鉢形土器である。底部から胴部上半にかけて外傾しながら直線的に立ち上がり、上半から口縁部までは緩く外傾しながらほぼ直線的に立ち上がる。胴部上半に２箇所補修孔が残る。底外面は網代底となっている。６・７は斜縄文を施文した波状口縁の深鉢形土器である。口唇部は平滑で、焼成は良く、硬質で、同一個体である。土器の属する時期は縄文時代後期中葉である。また、潰れた土器の上に大きい石皿などの礫を配置して土を埋め戻している点から考えて、この遺構は土坑墓と考えられる。

ＳＫ03土坑（第14図）

ＭＢ49グリッドに位置する。Ⅰ層を除去後、Ⅳ層（地山）面にて暗褐色土の不整楕円形プランを確認した。規模は長径0.60m、短径0.55mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは0.19mで、底面標高は183.37mである。底面は緩やかに湾曲しており、壁も緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物や地山粒を少量含む単一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から遺物は出土しなかったため、帰属時期は不明である。

ＳＫ05土坑（第14図）

ＭＢ48グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）面にて褐色土の楕円形プランを確認した。規模は長径0.62m、短径0.56mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.10mで、底面標高は183.55mである。底面は西側が一段窪んでおり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物粒を少量含む単一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から遺物は出土しなかったため、帰属時期は不明である。

ＳＫ12土坑（第14図、図版12）

ＭＣ48グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）上面にて、黒褐色の円形プランを確認した。規模は長径1.13m、短径0.97mの円形を呈する。確認面からの深さは0.58mである。底面はほぼ平坦で、立ち上がりは明瞭である。壁は直線的に比較的急角度で立ち上がる。埋土は全体的に黒褐色土ではあるが、Ⅳ層（地山）由来の土の混入割合などから２層に分層した。

遺物は１層から土器片７点・石器剥片２点が出土した。土器は４点を図示した（第25図８～11、図版21）。８は鉢形土器の口縁部で、口縁部内外に３条の沈線を巡らし、口唇部に刻目を施す。地文は斜縄文で、内外にススが厚く残る。縄文時代晩期末葉の土器である。９は口縁部片で、地文、斜縄文である。横位の沈線と縦位の「ノ」字状沈線を施文し、口縁部上端は無文で、折り返し口縁風に肥厚する縄文時代後期中葉の土器である。10は地文、斜縄文で、縦位の「ノ」字状の沈線を施文する土器である。11は縦位、もしくは斜位に大変細く浅い沈線を施す底部付近の土器である。帰属時期は出土土器から縄文時代晩期末葉である。

ＳＫ14土坑（第14図）

ＭＡ51グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）面にてにぶい黄褐色の方形プランを確認した。規模は長径0.56m、短径0.52mの方形を呈する。確認面からの深さは0.06mと極めて浅く、底面標高は181.74mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は地山粒を多量に含む単一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から遺物は出土しなかったため、帰属時期は不明である。

ＳＫ15土坑（第14図）

ＭＡ52グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）面にて黒褐色の楕円形プランを確認した。規模は長径0.73m、短径0.54mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.11mで、底面標高は181.87mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は地山粒を少量含む単一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から石器の剥片１点が出土したので縄文時代と思われるが、時期の判断が出来る遺物が出土しなかったため、詳しい時期は不明である。

ＳＫ22土坑（第14図、図版12）

ＭＣ45グリッドに位置する。Ⅲ層除去後、Ⅳ層（地山）上面にて、暗褐色の楕円形のプランを確認した。規模は長径0.69m、短径0.52mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.17mである。底面は２段底になっており、平坦な底面の中央部のやや北東側が窪んでいる。壁は立ち上がりが明瞭で、南西側では直線的に比較的急角度に立ち上がり、北東側では直線的に緩やかに立ち上がる。埋土は土層の色と炭化物の混入割合により２層に分層した。１層には炭化物が比較的多く混入していた。

埋土中から縄文土器が１点出土した（第25図12、図版21）。細かい縄文を施文し、内外とも黒色で、器厚が５㎜と薄いことから縄文時代晩期に属すると判断される。

ＳＫ33土坑（第14図、図版12・15）

ＭＣ44・45グリッドの境界に位置する。Ⅲ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）上面にて、褐色の円形プランを確認した。当初は柱穴として調査していたが、サブトレンチを設定して掘り下げたところ、プランが広がり２層に分かれることが判明し、土坑であると判断した。ＳＫ78と重複しており、ＳＫ33がＳＫ78より新しい。

規模は長径1.21m、短径1.13mの円形を呈する。確認面からの深さは0.24mである。底面はほぼ平坦で、立ち上がりは明瞭で、壁は比較的急角度に立ち上がる。埋土は土色から２層に分層した。１層は比較的暗い褐色土で、２層は比較的明るい褐色土が主な埋土となっている。分層線が確認面・底面に対して斜めに傾斜して入っていることから、一括埋め戻しと考えられる２層を一度掘り返し、その後に１層を埋め戻したと推測できる。

埋土から土器片12点・石器の剥片17点が出土した。土器は２点を図示した（第25図13・14、図版21）。13は地文が無文で、浅い横位に沈線を格子目状に施文し、口縁部を平滑に仕上げている土器である。縄文時代後期に属すると推定される。14は太めの撚糸文を施文し、色調はにぶい黄橙色で、器厚は10㎜とやや厚いことから、縄文時代中期に属すると推定される。以上のことから本遺構の構築時期は縄文時代後期と推定される。

ＳＫ39土坑（第14図、図版13）

ＭＤ55グリッドに位置する。Ⅲ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）面にて黒褐色の不整円形プランを確認した。規模は長径0.86m、短径0.84mの不整円形を呈する。確認面からの深さは0.23mで、底面標高は181.16mである。底面はほぼ平坦で、壁は北西側がほぼ垂直に、南東側は緩やかに湾曲して立ち上がる。埋土はⅣ層土の混入割合から、２層に分層した。２層はⅣ層土が多く混入している。また、斜堆積になっているため、自然埋土の可能性がある。

埋土から石器の剥片が２点出土した。縄文時代と思われるが、詳しい時期は不明である。

ＳＫ41土坑（第15図、図版13）

ＭＡ54・55グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）にてにぶい黄褐色の円形プランを確認した。規模は長径1.27m、短径1.26mの円形を呈する。確認面からの深さは0.25mで、底面標高は182.22mである。底面はほぼ平坦であるが、石皿（Ｓ２）が置かれていたところのみ少し窪んでいる。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物粒の混入割合から３層に分層した。１層が最も多く混入しており、３層は壁面崩落土と考えられ、自然に埋没した可能性がある。

埋土から石器の剥片１点、礫石器１点（Ｓ１）が出土した。他にＳ２として取り上げた石器は石皿

で、土坑底面から出土した。礫石器は敲磨器類（Ｄ１類）１点（第63図Ｓ72、図版24）、石皿（Ａ類）１点（重さ30㎏－第63図Ｓ71）である。石皿と敲磨器類の出土状況から２種類の石器はセットと考えられることから土坑墓と考えられる。縄文時代と考えられるが、詳細な時期の判断が出来る遺物が出土しなかったため、その帰属時期は不明である。

ＳＫ42土坑（第14図）

ＭＡ53グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）面にて黒褐色と暗褐色の隅丸方形のプランを確認した。規模は長径0.90m、短径0.87mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは0.11mで、底面標高は182.48mである。底面は僅かに湾曲している。壁は東側は極めて緩やかに立ち上がるが、西側は緩やかに立ち上がる。埋土は混入物から２層に分層した。１層は炭化物粒や地山粒を含むが、２層は混入物を含まない。また、堆積状況から自然堆積である可能性がある。

埋土中から遺物は出土しなかったため、帰属時期は不明である。

ＳＫ43土坑（第15図、図版13）

ＭＢ54・55グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）面にて黄褐色の隅丸方形のプランを確認した。規模は長径1.02m、短径0.94mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは0.14mで、底面標高は182.40mである。底面はほぼ平坦であるが、中央部が僅かに窪んでいる。壁は北西側は比較的急角度で立ち上がり、南東側は極めて緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物粒・地山粒を含む単一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から剥片１点、縄文土器１点が出土した。土器を１点を図示した（第26図15、図版21）。橋状把手部分で、口縁直下には口縁に沿って横位に３条の複節縄文の側面圧痕、その下には楕円形の区画をした後、全面に縄文を施文している。色はにぶい黄橙色で、器厚は10㎜前後と厚く、硬質であることから、縄文時代中期後葉と推定される。

ＳＫ51土坑（第14図）

ＭＡ56グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）面にて褐色の楕円形のプランを確認した。規模は長径0.58m、短径0.47mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.16mで、底面標高は181.49mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物粒・地山粒を含む単一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から石器の剥片１点が出土した。縄文時代と考えられるが、詳細な時期の判定が出来る遺物が出土していないため、その帰属時期は不明である。

ＳＫ61土坑（第15図、図版14）

ＭＣ53・54グリッドに位置する。Ⅰ層除去中に土器のまとまりを確認した。その後、土器の周辺を精査したところ、暗褐色の不整楕円形のプランを確認した。規模は長径0.85m、短径0.55mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは0.22mで、底面標高は180.62mである。底面は西側はほぼ平坦であるが、東側が一段窪んでいる。壁はいずれも緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物粒・地山粒を含む単一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から土器21点、石器の剥片１点が出土した。土器を２点図示した（第26図16・18、図版21）。16は細かい縄文を施文する薄い土器である。18は大きめの深鉢形土器で、全面に縄文を施文している。これら土器の特徴から、遺構の構築時期は縄文時代晩期と推定される。

ＳＫ62土坑（第15図）

ＬＴ51グリッドに位置する。Ⅲ層掘り下げ中に石核、石皿が出土した。周辺を精査したところ、にぶい黄褐色の不整楕円形のプランを確認した。規模は長径0.84m、短径0.69mの不整楕円形である。確認面からの深さは0.16mで、底面標高は180.66mである。底面は南側が僅かに窪んでおり、さらに壁が立ち上がる直前でも一段窪んでいる。壁は北側が緩やかに立ち上がるが、南側はやや緩やかに立ち上がっている。埋土は地山粒を含む単一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から、石器の剥片１点、残核１点、礫石器（石皿）１点が出土している。石器は残核（第30図Ｓ１、図版22）、石皿（Ａ類－第63図Ｓ73）を図示した。埋土中に石皿や石核が含まれていることから土坑墓の可能性が考えられる。縄文時代と思われるが、詳しい時期の判断が出来る土器が出土していないので、その詳細な時期は不明である。

ＳＫ63土坑（第16図、図版14）

ＭＥ49グリッドに位置する。Ⅲ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）面にて褐色の楕円形プランを確認した。規模は長径0.68m、短径0.58mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.17mである。底面はほぼ平坦であるが、南から北にかけて緩やかに傾斜し、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物粒を含む単一層で、一括埋め戻し土と考えられる。

埋土中から縄文土器63点と不定形石器を含む剥片３点が出土した。土器は東側に集中して分布している。遺物がまとまって出土していること、埋土が単層であることから一括して埋め戻した土坑墓の可能性が考えられる。剥片石器は削器１点を図示した（第31図Ｓ６、図版23）。土器は２点を図示した（第26図17、第27図20、図版21）。20はやや薄手の深鉢形土器で、胴部上半に斜位の縄文と口縁部に沿って３条の刺突列を施文する土器である。17は底部付近の破片で、20と同一個体と思われる。遺構の構築時期はこれら土器の特徴から縄文時代後期中葉と推定される。

ＳＫ64土坑（第15図）

ＭＦ46グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）上面にて、黄褐色の円形プランを確認した。しかし、南西側は切株の撹乱が入っているため、その部分の遺構の輪郭は推定のものとなっている。規模は長径1.06m、短径0.90mの円形を呈する。確認面からの深さは0.22mである。底面はほぼ平坦であるが、やや西側へ傾斜している。立ち上がりは明瞭で西側は緩やかに直線的に立ち上がり、東側は比較的急角度に湾曲しながら立ち上がっている。埋土は混入物の混入割合によって２層に分層した。２層は炭化物が比較的多く、Ⅳ層（地山）由来の土の埋め戻しと推測される。また１層には僅かではあるが、灰白色の砂質土が混入していた。

埋土からは石器剥片や石器９点が出土した。そのうち箆状石器１点を図示した（第32図Ｓ７、図版23）。遺構の構築時期はこれらの遺物から縄文時代と考えられる。

ＳＫ67土坑（第15図、図版14）

ＭＨ44グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）上面にて、褐色の隅丸方形のプランを確認した。規模は長径0.90m、短径0.82mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは0.24mである。底面はほぼ平坦であるが、南西側でやや傾斜している。壁は明瞭で、西側では直線的に比較的急角度に立ち上がり、東側では湾曲しながらやや急角度で立ちあがる。埋土は地山粒を含む単一層で遺物と一緒に埋め戻されたものと推定される。埋土から土器８点・剥片１点・礫１点（Ｓ１）が出土した。石

器は敲磨器類（Ｃ１類）１点を図示した（第64図Ｓ74、図版24）。土器は１点を図示した（第26図19、図版21）。深鉢形土器で、胴部上半で外反気味に立ち上がり、口縁部が内湾し、波状口縁となる器形である。口縁部には沈線によるクランク文、直線文と竹管状工具による刺突文を、胴部上半には「Ｓ」字状連鎖沈文を施文する土器である。

遺構の構築時期は出土土器から縄文時代前期中葉の大木２ｂ式期と推定される。

ＳＫ69土坑（第15図、図版３・15）

ＬＳ53・54グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）面にて褐色の不整楕円形プランを確認した。規模は長径1.93m、短径1.92mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは1.01mで、底面標高は182.64mである。底面はほぼ平坦であるが、南西側が少し窪んでいる。壁は南西側が半分程の深さまで一度ほぼ垂直に立ち上がり、そこからさらに緩やかに立ち上がる。南東側は上部に撹乱を受けており、不明瞭ではあるが残存部分は緩やかに立ち上がっている。埋土は混入物などから５層に分層した。４・５層に地山塊が多量に混入しており、壁面または天井が崩落して堆積したものと考えられる。１～３層はその後流入した自然堆積土である。フラスコ状土坑であった可能性がある。

埋土から縄文土器９点、削器１点、不定形石器１点を含む剥片10点、礫石器１点が出土した。剥片石器は石鏃の未製品１点（第31図Ｓ２、図版23）、削器１点（第32図Ｓ８、図版23）、大型両面加工石器１点（第32図Ｓ９、図版23）を図示した。礫石器は敲磨器類（Ｄ１類）１点を図示した（第64図Ｓ75、図版24）。土器は３点を図示した（第27図21・22・24、図版21・22）。21・22は細い粘土紐による隆線を貼付している。22は隆線上に刻目を施す。24は細く浅い短沈線を施文する土器である。

遺構の構築時期は出土土器から縄文時代前期中葉と推定される。

ＳＫ74土坑（第15図）

ＭＢ51グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）面にて黒褐色の隅丸方形プランを確認した。規模は長径0.72m、短径0.70mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは0.08mで、底面標高は183.18mである。底面はほぼ平坦であるが、東から西に緩く傾斜している。壁は緩やかに立ち上がるが、東側がやや緩やかである。埋土は炭化物粒・地山粒を含む単一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から礫石器が１点出土している。縄文時代と思われるが、時期の判定が出来る土器が出土していないので、その帰属時期は不明である。

ＳＫ77土坑（第15図）

ＭＧ52グリッドに位置する。Ⅲ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）面にてにぶい黄褐色の楕円形プランを確認した。規模は長径1.0m、短径0.82mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.24mで、底面標高は181.51mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は２層に分層した。１層は黒色土主体に地山粒混入しており、２層は地山類似土主体であり、人為的埋め戻しの可能性がある。

埋土からは遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

ＳＫ78土坑（第14図、図版15）

ＭＣ44グリッドに位置する。Ⅲ層除去後、Ⅳ層（地山）上面にて、ＳＫ33の精査をしていたところ、ＳＫ33に接する形で褐色の円形プランを確認した。僅かに掘り下げたところ、土器片と礫がプラン

内に見えたことから土坑と判断した。ＳＫ33と重複し、ＳＫ78がＳＫ33より古い。規模は長径0.92m、短径0.90mの円形を呈する。確認面からの深さは0.19mである。底面は平坦で、立ち上がりは明瞭で壁は西側は直線的に緩やかに立ち上がる。東側は直線的に比較的急角度に立ち上がる。埋土は炭化物・地山粒を含む単一層で、一括埋め戻しの可能性がある。埋土から土器片１点・石器の剥片４点・磨製石斧の未製品１点（Ｓ１－図版15）が底面の若干上から出土した。磨製石斧の未製品の出土から土坑墓の可能性も考えられる。石器は磨製石斧未製品（Ａ１類）１点を図示した（第64図Ｓ76、図版24）。土器は１点を図示した（第27図23、図版21）。23は撚りの細かい斜縄文を施文している土器で、器厚は５ミリと薄い。土器はその特徴から縄文時代の後期もしくは晩期に属すると考えられるものであるが、後期中葉のＳＫ33と重複し、本遺構が古いことから、後期と推定される。

ＳＫ80土坑（第15図、図版16）

ＭＥ45グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）上面にて、褐色の楕円形プランを確認した。中央に大きい礫（Ｓ１－５kg）を置いている。規模は長径0.55m、短径0.46mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.17mである。底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに湾曲し比較的急角度で立ち上がる。埋土は土色や混入物の割合から２層に分層した。１層は褐色土に地山粒・炭化物粒を僅かに含む層で、２層は地山由来と考えられるにぶい黄褐色土に炭化物・明褐色土が混入している。遺物と堆積状況から考えると、一括埋め戻しした２層の上面中心部を掘り返し、礫を埋め、再び土を埋め戻したと推定される。

埋土中の２層直上（土坑底面よりやや上）から礫１点が出土したことや埋土の状況から土坑墓と考えられる。縄文時代と考えられるが、時期の判断が出来る遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

ＳＫ84土坑（第16図）

ＭＣ52グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）面にて褐色の隅丸方形プランを確認した。規模は長径1.19m、短径0.99mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは0.34mで、底面標高は183.20mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は２層に分層した。ともに地山土を主体とし、１層の方が地山が多く含まれる。層界は不明瞭で一連の埋め戻しによる堆積と考えられる。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

ＳＫ85土坑（第16図）

ＭＣ52グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）面にて褐色の楕円形プランを確認した。規模は長径0.80m、短径0.69mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.15mで、底面標高は183.20mである。底面は極めて緩やかに湾曲している。壁は南側では緩やかに立ち上がるが、北側では緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物を含む単一層であり、地山由来土主体の一括した埋め戻し土である。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

ＳＫ86土坑（第16図）

ＭＥ50グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）面にてにぶい黄褐色の不整楕円形プランとを確認した。規模は長径1.04m、短径1.02mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは0.21mで、底面標高は183.40mである。底面はほぼ平坦であるが、中央が窪んでいる。壁は北東側が緩やかに立ち上がるが、南西側はやや急角度で立ち上がる。埋土は地山粒・炭化粒を含む単一層で、一括埋め戻

し土の可能性が高い。

埋土より縄文土器片１点、剥片１点、礫石器１点が出土しており、いずれも１層上位より出土している。出土遺物から縄文時代に埋没したものと考えられる。

ＳＫ87土坑（第16図）

ＭＦ49・50グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）面にてにぶい黄褐色の不整楕円形プランを確認した。規模は長径1.49m、短径1.10mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは0.28mで、底面標高は183.50mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がるが、深さの半分前後でさらに外側へ開くように立ち上がる。埋土は２層に分層した。いずれも地山粒・炭化粒を少量含んでおり、一括埋め戻し土の可能性がある。

埋土から石器の剥片が１点出土している。縄文時代と思われるが、時期の判断が出来る土器が出土していないため、その帰属時期は不明である。

ＳＫ89土坑（第16図）

ＭＫ49グリッドに位置する。Ⅲ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）面にて暗褐色・黒褐色・明黄褐色の楕円形プランを確認した。規模は長径1.10m、短径0.81mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.26mで、底面標高は183.16mである。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は３層に分層した。２・３層は裏込め土である。

埋土を掘り下げていく段階で、３本の鉄の輪を確認した。一部歪んでいるが、輪はいずれも楕円形で長径0.42m、短径0.32mであった。土層断面の観察から「桶」状の断面形を示す１層と周りの２・３層との境に位置していたため、桶などを締める時に用いられる箍（たが）の可能性がある。２・３層は土坑の中に桶を入れ動かないようにした「裏込め」と想定される。帰属時期は不明であるが、比較的新しい時代のものであると考えられる。

ＳＫ90土坑（第16図）

ＭＫ・ＭＬ49グリッドに位置する。Ⅲ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）面にて黒褐色の不整隅丸方形プランを確認した。規模は長径1.18m、短径1.08mの不整隅丸方形を呈する。確認面からの深さは0.22mで、底面標高は183.16mである。底面はほぼ平坦であるが、西から東にかけて緩く傾斜している。また、北西隅で地山に由来すると思われる礫が確認された。壁は緩やかに立ち上がり、埋土は地山粒を含む単一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

ＳＫ94土坑（第18図）

ＭＦ・ＭＧ52グリッドに位置する。Ⅲ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）面にて黒褐色と暗褐色の楕円形プランを確認した。規模は長径1.0m、短径0.94mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.40mで、底面標高は181.20mである。底面は全体的に北西から南東にかけて傾斜している。中央部がやや盛り上がり、両端が窪んでいる。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は地山粒・塊の混入で２層に分層した。１層は地山粒・塊が多量に、炭化物が少量含まれる。２層は炭化物のみ含まれている。２層が底面一面に堆積していることから、２層堆積後の人為的な埋め戻しの可能性がある。

埋土から鉄製品が５点出土した。１点は板状の鉄を三角形に折り曲げた形をしており、内側には材が付着している。材を束ねるために使用された可能性がある。他の４点は腐蝕が激しく、どのような

ものかははっきりしない。

時期の判断が出来る遺物が出土しておらず、帰属時期は不明である。

ＳＫ96土坑（第16図）

ＭＥ57グリッドに位置する。Ⅲ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）面にて黒褐色の楕円形プランを確認した。規模は長径0.76m、短径0.65mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.24mで、底面標高は178.60mである。底面は平坦で、壁はやや急角度で立ち上がる。埋土は地山粒の混入割合などで２層に分層した。１層より２層の方が地山粒を多く含んでいるため、２層は遺構の壁面崩落土と推定される。

埋土から縄文土器２点、石器の剥片が１点出土している。土器は２点を図示した（第27図25・26、図版22）。25は口縁部片で、器厚が４㎜と薄い無文の土器である。26は斜縄文を施文した土器である。出土の土器から遺構の構築時期は縄文時代晩期と推定される。

ＳＫ97土坑（第18図）

ＭＤ57グリッドに位置する。Ⅲ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）面にて黒褐色と暗褐色の不整楕円形のプランを確認した。規模は長径0.92m、短径0.89mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは0.4mで、底面標高は179.43mである。底面は平坦で、壁は南東側は緩やかに立ち上がるが、北西側は極めて埋土が薄く、地山面とほぼ同一面となる。埋土は地山粒の混入割合などで、２層に分層した。１層より２層の方が地山粒を多く含んでいる。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

ＳＫ100土坑（第17図、図版16・17）

ＭＮ40グリッドに位置する。Ｉ層除去後、Ⅳ層（地山）面にて石器の剥片が集中して出土した。周辺を精査すると、にぶい黄褐色と暗褐色の不整楕円形プランを確認した。規模は長径0.74m、短径0.62mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは0.34mで、底面標高は180.04mである。底面は平坦であるが、西から東にかけて傾斜している。壁は東側がほぼ垂直に近い角度で立ち上がるのに対して、西側は湾曲しながら立ち上がる。埋土は混入物などから３層に分層した。１層は地山粒を、２層は炭化物、多量の遺物を含んでいる。３層に混入物は認められなかった。

埋土中（２層）には剥片石器や母岩を分割後の残核、多量の石器剥片・チップが含まれていた。その他に礫１点が出土している。チップ（大きさ１㎝以下）を除いた総点数は、8,725点である。これらは一括して土坑の中に入れた様相を呈しており、平面的には東側にやや偏りが認められる。その他に礫１点が出土している。剥片石器は尖頭器未製品１点、削器１点、残核13点、接合資料24点を図示した（第34図Ｓ22～第59図Ｓ60、図版22）。礫石器は敲磨器類（Ｄ３類）１点（第64図Ｓ77、図版24）を図示した。接合の結果、母岩は20個体と判明した。

遺構の構築時期は土器が出土していないため明確ではないが、今回の調査では遺跡全体で、縄文時代前期中葉の遺物が主体を占め、この中には磨製石斧の未製品が多く出土し本遺跡が石器製作と深く関わる場所であったと考えられる。上記のように本遺構からは残核や多量の石器剥片などが出土している。ちなみに放射性炭素年代測定では縄文時代前期中葉という結果が得られている。これらの事を考え合わせると時期は縄文時代前期中葉と想定される。

ＳＫ101土坑（第18図）

ＭＭ42グリッドに位置する。Ｉ層除去後、Ⅳ層（地山面）にて黒褐色と暗褐色の楕円形プランを

確認した。規模は長径1.03m、短径0.88mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.39mで、底面標高は188.6mである。底面は中央部が一段高くなっている。また、壁はほぼ垂直に近い角度で立ち上がるが、南側は緩く湾曲しながら立ち上がる。埋土は地山粒の混入割合などから２層に分層した。２層は裏込め土であり、人為的な埋め戻し土である。

埋土を掘り下げていく段階で、３本の鉄の輪を確認した。欠損している部分もあるが、輪はいずれも楕円形で長径0.83m、短径0.58mであった。土層断面の観察から「桶」状の断面を示す１層と周りの２層との境に位置していたため、桶などを締める時に用いられる箍（たが）の可能性がある。また、１層中からおはじきとビー玉の２点、礫１点が出土した。２層は土坑の中に桶を入れ動かないようにした「裏込め」と想定される。帰属時期は不明であるが、比較的新しい時代のものであると考えられる。

ＳＫ103土坑（第18図、図版18）

ＭＦ51グリッドに位置する。Ⅲ層除去中に土器片のまとまりを確認し、Ⅲ層の黒色土を取り去ったところ、Ⅳ層（地山）上面に土器を中心にした円形の褐色のプランを確認した。規模は長径0.66m、短径0.57mの円形を呈す。確認面からの深さは0.10mである。底面は中央部を中心に緩やかに弧を描くように西側に傾斜している。壁は、西側では極めて緩やかに湾曲しながら立ち上がる。東側は立ち上がりが明瞭で直線的に緩やかに上端へ向かう。また、遺構の西側を確認時にやや掘り下げてしまった。埋土は炭化物・地山粒を含む単一層である。

埋土上面から縄文土器片27点が出土した。土器は１点を図示した(第27図27､図版22)。27は底部で、色調はにぶい黄橙色、胎土には砂粒を多く含む。遺構の構築時期は土器から縄文時代後期か、晩期と考えられる。

ＳＫ104土坑（第17図、図版18）

ＭＦ51グリッドに位置する。ＳＫ103の精査中に周辺のⅢ層黒色土を除去していたところ、Ⅳｂ層（地山）上面にて東西に楕円形の褐色プランを確認した。規模は長径1.40m、短径1.23mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.54mである。また斜面にある遺構のため、断面ライン上端での高低差が0.32mある。Ⅲ層を掘り下げている時に１層の埋土を掘り下げてしまった。底面はほぼ平坦である。壁は東側では比較的急角度に湾曲しながら立ち上がる。底面から0.38mのところで傾斜角が変化して緩やかに外側へ広がっている。西側の壁は立ち上がりが明瞭で緩やかに直線的に立ち上がる。底面から0.19mのところで傾斜角が変化して緩く傾斜して立ち上がる。

埋土は全体的に炭化物・地山粒を含む褐色土であるが、地山粒の混入割合や土層の明暗から２層に分層した。２層は、遺構に対しほぼ水平に堆積していることと遺構全体にわたり土器片や石器の製品や剥片が大量に埋まっていた。このことから１層・２層共に人為的に遺物と共に埋め戻されたと推定される。

遺物は１層からは、土器片18点、石匙を含む剥片67点、敲石と打製石斧を含む礫６点が出土した。２層からは土器片11点、石鏃を含む剥片163点、石皿を含む礫７点が出土した。１層から出土した遺物の多くは、遺構の中心部ではなく壁に沿って出土する場合が多い。また、２層から出土した遺物は１層との境界面から深さ約0.15mぐらいまでに集中し、それより低い位置で出土したものはほぼ遺構の中心部から出土した。剥片石器は石鏃３点（第31図Ｓ３～５、図版23)、石匙１点（第32図Ｓ10、

図版23)、削器１点（第32図Ｓ11、図版23)、小型両面加工石器１点（第32図Ｓ12、図版23）を、礫石器は打製石斧（未分類）１点（第65図Ｓ78、図版24)、石皿（Ａ類）２点（第65図Ｓ79・80）を図示した。土器は３点を図示した（第27図28～第28図30、図版21・22)。28～30は胴部に「Ｓ」字状連鎖沈文を施している。29は口縁部片で、口縁部に沿って１条の隆線を貼付し、その上に刻目を施しているものである。遺構の構築時期は土器から縄文時代前期中葉と推定される。

ＳＫ109土坑（第18図）

ＭＫ41・42グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）面にて褐色土の円形プランを確認した。規模は長径1.10m、短径1.01mの円形である。確認面からの深さは0.07mで、底面標高は188.14mある。断面形は大変浅い皿状で、底面はほぼ平坦である。埋土は炭化物粒・地山粒を含む単一層で、掘り上げ地山土を主体とした人為的埋め戻し土の可能性がある。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

ＳＫ110土坑（第18図）

ＭＮ43・44グリッドに位置する。Ⅲ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）面にて黒色の楕円形プランを確認した。規模は長径0.94m、短径0.89mの楕円形である。確認面からの深さは1.14mで、底面標高は187.54mである。底面は緩く湾曲し、壁は南西側は緩く湾曲して立ち上がり、北東側は一度湾曲した後、さらに外側に外傾しながら立ち上がる。埋土は４層に分層した。４層は若干地山土を含み、開口部の旧表土を主体とした埋め戻し土の可能性がある。３層は埋め戻しの際の壁面崩落土。２層も４層に類似し、一連の埋め戻し土と考えられる。１層は埋め戻し後に沈降した窪みに自然に堆積した流入土である。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

４　フラスコ状土坑

ＳＫＦ26フラスコ状土坑（第19図、図版18）

ＭＣ45グリッドに位置する。Ⅰ層の重機によって撹乱された土の除去中に円形に窪んだプランが見え、撹乱された土を取り除いていったところ、プラン内から大きな円柱状の礫が出土したため土坑と判断した。その後、埋土を掘ったところ上端のラインよりも下端のラインの方が広がる形になりフラスコ状土坑と判断した。規模は上端長径1.02m、上端短径0.79m、下端長径0.98m、下端長径0.94mの不整円形を呈す。確認面からの深さは0.30mである。底面はほぼ平坦である。壁は、南東側では外側に湾曲しながら立ち上がり、真上の上端に向かい多少外側に膨らんでいる。北西側は底面から緩やかに外側に湾曲しながら立ち上がるが、底面より10㎝付近で傾斜が変化し上端に向かって括れている。埋土は地山粒・炭化物を含む単一層であり、礫と一緒に人為的に埋め戻されたと推定され、その埋め戻しの土の上に撹乱による黒色土が覆っていたと考えられる。

埋土から礫石器が１点出土している。時期は縄文時代と思われる。

ＳＫＦ31フラスコ状土坑（第19図、図版３・19）

ＬＳ55グリッドに位置する。Ⅰ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）面にて暗褐色の不整楕円形プランを確認した。北東側急斜面に位置しており、東側の一部が不明であるが、確認出来る範囲で開口部長径1.52m、短径1.0m、底面長径1.27m、短径1.32mである。確認面からの深さは0.47mで、底面標高は

179.2mである。底面はほぼ平坦であるが、西から東へ緩やかに傾斜している。壁の東側は削平されている。西側は僅かに内湾し、確認面より0.2m程下で外反する。埋土は５層に分層した。４・５層は天井・壁面崩落土と考えられ、１～３層は自然に堆積したと考えられる。

埋土から縄文土器４点、石器２点、礫石器の破片３点と石器剥片23点が出土した。土器は３点を図示した（第24図３、第28図31・32、図版21）。３は口縁部が小破状となる鉢形土器である。地文は斜縄文で口縁部には、口縁に沿って５条の沈線で区画し、沈線以外を磨消縄文手法によって無文帯としている。31・32は縄文や撚糸文を施文している土器である。石器は小型両面加工石器１点を図示した（第33図Ｓ13、図版23）。帰属時期は出土土器から縄文時代後期中葉である。

ＳＫＦ68フラスコ状土坑（第19図、図版３・19）

ＬＳ54グリッドの北東側急斜面に位置する。Ⅰ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）上面にて、褐色・黄褐色の円形プランを確認した。その後、掘り進めて西側の下端がオーバーハングしていることからフラスコ状土坑と推定した。規模は上端長径2.04m、上端短径1.84m、下端長径1.96m、下端短径1.76mの不整円形を呈する。斜面に位置するため、確認面からの深さは斜面の上部と下部で大きな差があるが、上部の最も高低差があるところでは1.16mであった。底面はほぼ平坦であるが、撹乱があり一部底面がえぐられている。壁は、東側では直線的に緩やかに立ち上がる。西側は外側に大きく湾曲しながら立ち上がり、上端から深さ0.60mの位置で傾斜が変化し、底面に対してほぼ垂直方向に直線的に立ち上がる。埋土は土層の色や混入物の違いによって７層に分層した。

埋土中から土器片14点、製品を含む剥片64点、礫１点が出土した。剥片石器は尖頭器２点（第33図Ｓ14・15、図版23）、箆状石器１点（第33図Ｓ16、図版23）、削器１点（第33図Ｓ17、図版23）、小型両面加工石器２点（第33図Ｓ18・19、図版23）、異形石器１点（第33図Ｓ20、図版23）を図示した。土器は５点を図示した（第28図33～37、図版21）。33・34・36は連鎖状沈線文を施文する土器で、36は口縁部で、口唇部下に竹管状工具による連続刺突文を２段巡らしている。これら土器の文様施文の特徴から縄文時代前期中葉に属すると思われる。

ＳＫＦ72フラスコ状土坑（第19図、図版19）

ＭＣ44・ＭＤ44グリッドにまたがって位置する。Ⅰ層除去後、Ⅳ層（地山）上面においてＳＫ33のプラン確認の為、周辺を広めに精査したところ、黒色の円形プランを確認した。その後、埋土除去を進めていく過程で、底面に近づくにつれ壁が上端よりも広がったためフラスコ状土坑と判断した。規模は上端長径1.42m、上端短径1.29m、下端長径1.66m、下端短径1.65mの不整円形を呈する。確認面からの深さは0.61mである。底面はほぼ平坦である。壁は、南側では外側に緩やかに湾曲しながら立ち上がる。底面から0.07mで内側へ比較的急角度で直線的にすぼまり、底面から0.48mになるとほぼ垂直に上端に向かう。一方、北側は外側に緩やかに湾曲しながら立ち上がり、底面から0.12mで傾斜方向が変化し、内側へ比較的急な角度で直線的に立ち上がる。埋土は土層の色や炭化物粒の有無、混入物の混入割合などから８層に分層した。６層は遺構の外側にしか堆積していないことなどから土坑内の天井崩落土であると考えられる。６層を除くと遺物が多く出土した炭化物の多く混入している層と地山由来の明黄・明褐色土が交互に堆積していることなどから、このフラスコ状土坑は埋め戻しを繰り返しながら数回程度使用されていたのではないかと推定される。

埋土から土器片57点、礫１点が出土した。土器片は２層と６層を除く全ての層から出土したが、

比較的炭化物粒の混入度が高い１・３・５・８層からの出土が多い。また礫は遺構の中央部底面直上から出土した。石器は敲磨器類（Ｄ１類）１点を図示した（第65図Ｓ81、図版24）。土器は６点を図示した（第28図38～第29図43、図版21・22）。いずれも地文が縄文で、41・43は口縁に沿って沈線を施文し、沈線と口唇部間を磨消縄文手法によって無文とし、区画している。これら土器の文様施文の特徴から縄文時代後期中葉の時期に属すると思われる。

ＳＫＦ99フラスコ状土坑（第19図、図版17・20）

ＭJ40グリッドに位置する。Ｉ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）上面にて暗褐色の円形プランを確認した。規模は上端長径1.24m、上端短径1.21m、下端長径1.40m、下端短径1.33mの不整円形を呈する。確認面からの深さは0.59mで、底面はほぼ平坦である。開口部の中央が凹んでいるのは確認時にやや掘りすぎたためである。壁は、北側では大きく外側に湾曲しながら立ち上がり、底面から10㎝で緩やかに内側に湾曲しながら上端に向かう。一方、南側は立ち上がりは明瞭でほぼ垂直に立ち上がり、底面から26㎝でやや内側にすぼみながら上端に向かう。

埋土は７層に分層した。黒褐色・暗褐色基調土を主体とし、地山粒のブロックが多い層と少ない層が互層をなしているため、人為的に埋め戻された土と考えられる。また１層は基本土層のⅢａ層に若干似ている。

遺物は１層から礫１点、４層から石器の剥片４点、６層から剥片２点出土した。石器は敲磨器類（Ａ３類）１点を図示した（第65図Ｓ82、図版24）。

時期については縄文時代と思われる。

５　焼土遺構

ＳＮ66焼土遺構（第20図、図版20）

ＭＣ46グリッドに位置する。Ｉ層除去後、Ⅳ層（地山）面にて赤褐色の焼土楕円形プランを確認した。規模は長径0.74m、短径0.42mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは0.08mである。掘り込みは確認されなかった。埋土は炭化物・地山粒を含む単一層であり、埋土全体が被熱している。

遺物は土器片が１点・剥片が２点出土してる。土器は１点を図示した（第29図44、図版22）。44は小破片で風化しているが胎土・焼成から縄文時代の土器と考えられる。

ＳＮ79焼土遺構（第20図、図版20）

ＭＦ43グリッドに位置する。Ｉ層除去後、Ⅳ層（地山）面にて不整形の焼土粒と炭化物粒の分布を確認した。規模は長径0.64m、短径0.48mの不整形を呈する。確認面からの深さは0.08mである。掘り込みは確認されなかった。埋土は焼土粒・炭化物を含む単一層であり、焼土粒と炭化物がほぼ同じ分布状況で密集して見つかった。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

ＳＮ88焼土遺構（第20図、図版20）

ＭＩ50グリッドに位置する。Ⅲｂ層掘り下げ中に焼土を確認し、周辺を精査したところ不整楕円形プランを確認した。規模は長径0.72m、短径0.42mの不整楕円形を呈する。被熱が及んでいる深さは0.08mである。遺構の中心よりやや東側に被熱の強い部分がある。掘り込みは確認できなかった。埋土は被熱の程度から２層に分層した。１層は被熱の程度が強く、２層は程度が弱い。１層が被熱の

中心であると考えられる。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

ＳＮ92焼土遺構（第20図）

ＭＩ48グリッドに位置する。Ⅲｃ層にて焼土と炭化物の不整楕円形プランを確認した。規模は長径2.88m、短径1.40mの不整楕円形を呈する。被熱の及んでいる深さは0.10mである。遺構のほぼ中心付近に強い被熱土が集中している。掘り込みは確認できなかった。埋土は被熱の程度と混入物から３層に分層した。１層が被熱の程度が強く、２層は１層と比較すると程度は弱い。３層は炭化物と焼土を含む。１層付近で燃焼作業を行った可能性がある。

埋土から縄文土器６点、不定形石器２点を含む剥片27点、礫１点が出土した。土器は２点を図示した（第29図45・46、図版22）。45は「Ｓ」字状連鎖沈文を施文した縄文時代前期中葉の土器である。46は撚糸文を施文しており、色調は黄橙色で硬質である。縄文時代中期後半の土器かと推定される。

ＳＮ93焼土遺構（第20図）

ＭＪ47グリッドに位置する。Ⅲｃ層にて焼土と炭化物の不整楕円形プランを確認した。規模は長径1.70m、短径1.21mの不整楕円形を呈する。被熱が及んでいる深さは0.13mである。掘り込みは確認できなかった。埋土は２層に分層した。１層は被熱の程度が強く、２層は被熱の程度が低い。

埋土から縄文土器９点、不定形石器３点を含む剥片109点が出土した。ＳＮ92と隣り合っており、剥片などが多く出土していることから火の周りで石を加工していた可能性がある。

剥片石器は削器１点を図示した（第33図Ｓ21、図版23）。土器は３点を図示した（第29図47 ～ 49、図版22）。47は外面にススの付着が著しく、文様が判然としないが、「Ｓ」字状連鎖沈文を施文しているものと思われる。48は小波状口縁に沿って１条の浅い沈線を巡らす土器である。沈線下の胴部には不整撚糸文を施文か。49は撚糸文を施文している。47・48は縄文時代前期中葉に属すると考えられる。

ＳＮ102焼土遺構（第20図）

ＭＧ53グリッドに位置する。Ⅲｂ層掘り下げ中、炭化物粒と焼土粒の広がりを確認し、周辺を精査したところⅢｃ層面で焼土の不整楕円形プランを確認した。調査中に設定したトレンチにより、北西側が失われているが、残存する部分の規模は長径0.40m、短径0.30mで不整楕円形を呈する。被熱が及んでいる深さは0.05mである。掘り込みは確認されなかった。埋土は黒褐色で、炭化物粒・焼土粒が少量含まれている。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

ＳＮ105焼土遺構（第21図）

ＭＩ42グリッドに位置する。Ⅲ層掘り下げ中、褐色と暗褐色の焼土の広がりを確認し、周辺を精査したところⅣａ層面で焼土の不整楕円形プランを確認した。規模は長径0.50m、短径0.23mの不整楕円形を呈する。被熱が及んでる深さは0.04mである。掘り込みは確認されなかった。埋土は被熱状況から２層に分層した。１層は被熱の程度が強く、２層は被熱の程度が低く焼土粒を多量に含んでいる。１層は西側に分布し、東側に２層が分布する。１層で燃焼作業を行った可能性がある。

埋土から遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明である。

ＳＮ106焼土遺構（第21図）

ＭＪ42グリッドに位置する。Ｉ層掘り下げ後、倒木痕上に炭化物と焼土の不整楕円形プランを確認した。遺構は二つに分かれているが、本来一つの遺構と判断される。西側は長径0.24m、短径0.15mの不整楕円形を呈し、被熱が及んでいる深さは0.04mである。東側も不整楕円形を呈し、長径0.38m、短径0.33m、被熱の及んでいる深さは0.09mである。いずれからも掘り込みは確認できなかった。また、東側の焼土の北側で炭化物が集中して出土した。埋土は３層に分層した。１・２層は被熱の程度が強く、３層はやや弱い。遺構が倒木痕上にあること、二つに分かれていることから、本遺構は倒木痕によって二つに分かれた可能性がある。

埋土から遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明である。

ＳＮ107焼土遺構（第21図）

ＭＩ41グリッドに位置する。Ｉ層除去後、倒木痕上に焼土の不整楕円形プランを確認した。規模は長径0.44m、短径0.26mの不整楕円形を呈する。被熱が及んでる深さは0.11mである。掘り込みは確認出来なかった。埋土は単層で炭化物と焼土が含まれていた。

埋土から遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明である。

ＳＮ108焼土遺構（第21図）

ＭＪ42グリッドに位置する。Ｉ層除去後、倒木痕上に焼土の不整楕円形プランを確認した。規模は長径1.15m、短径0.89mの不整楕円形を呈する。被熱が及んでいる深さは0.08mで、掘り込みは確認できなかった。埋土は炭化物・焼土粒を含む単層で、被熱の程度が低いものの可能性がある。

埋土から遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明である。

ＳＮ111焼土遺構（第21図）

ＭＪ41グリッドに位置する。Ｉ層除去後、倒木痕上に焼土の不整楕円形プランを確認した。規模は長径1.53m、短径1.20mの不整楕円形を呈する。被熱が及んでいる深さは0.13mである。掘り込みは確認出来なかった。埋土は２層に分層した。１層は被熱の程度が強く、２層は被熱の程度が低い。

埋土から遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明である。

ＳＮ112焼土遺構（第21図）

ＭＪ42グリッドに位置する。Ｉ層除去後、倒木痕上に焼土と炭化物の不整楕円形プランを確認した。規模は長径0.54m、短径0.36mの不整楕円形を呈する。焼土と炭化物が不整楕円形に広がり、北東と南西付近に楕円形の被熱の強い部分がある。被熱が及んでいる深さは0.07mである。埋土は３層に分層した。１層と２層は確認できた被熱の程度が強い部分で、３層は炭化物と焼土粒を含んでいる。４層は被熱の程度が強い部分である。

埋土から遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明である。

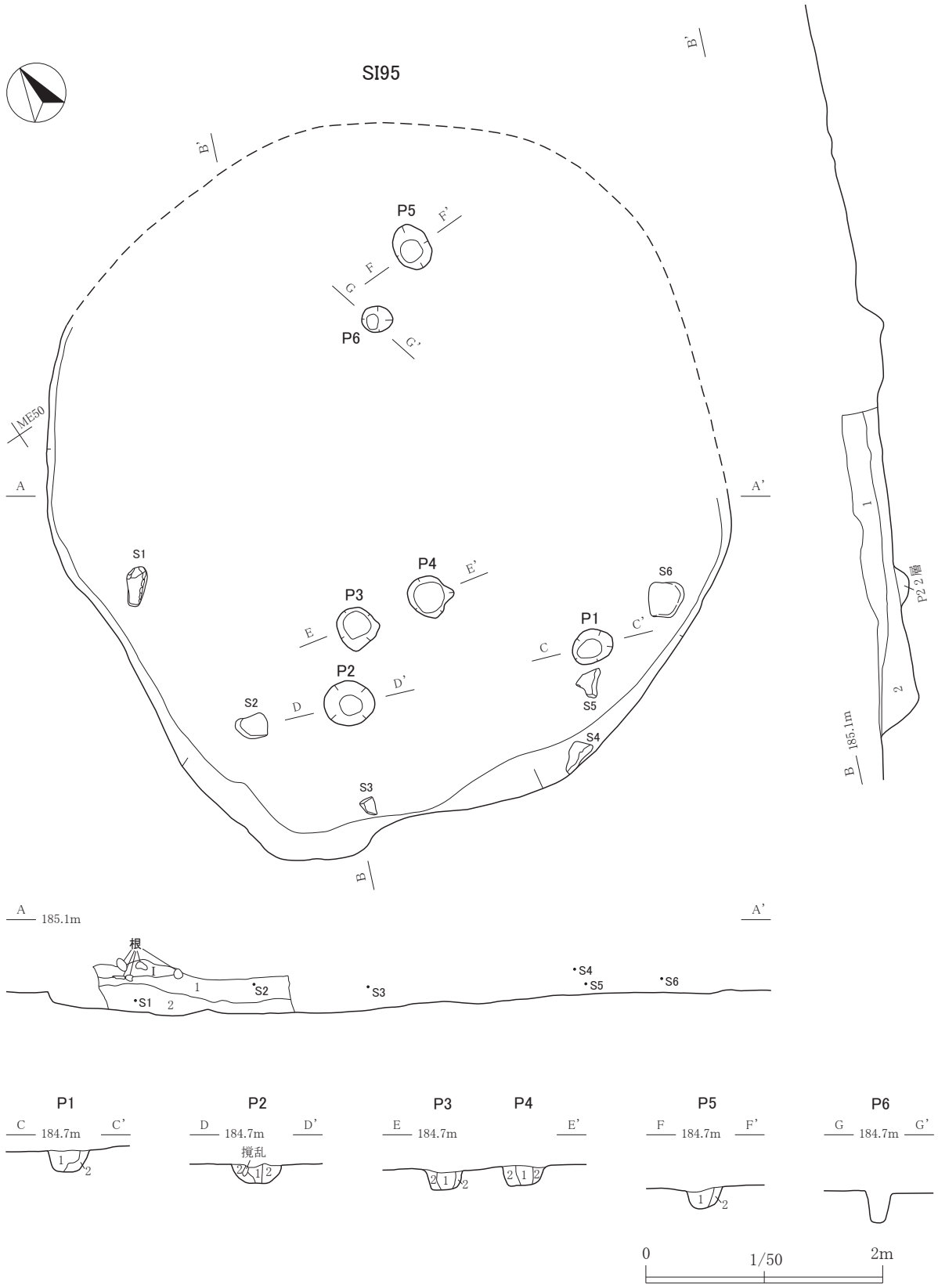
６　柱穴様ピット

22基を確認している。位置は付図に、詳細は第２表に示した。

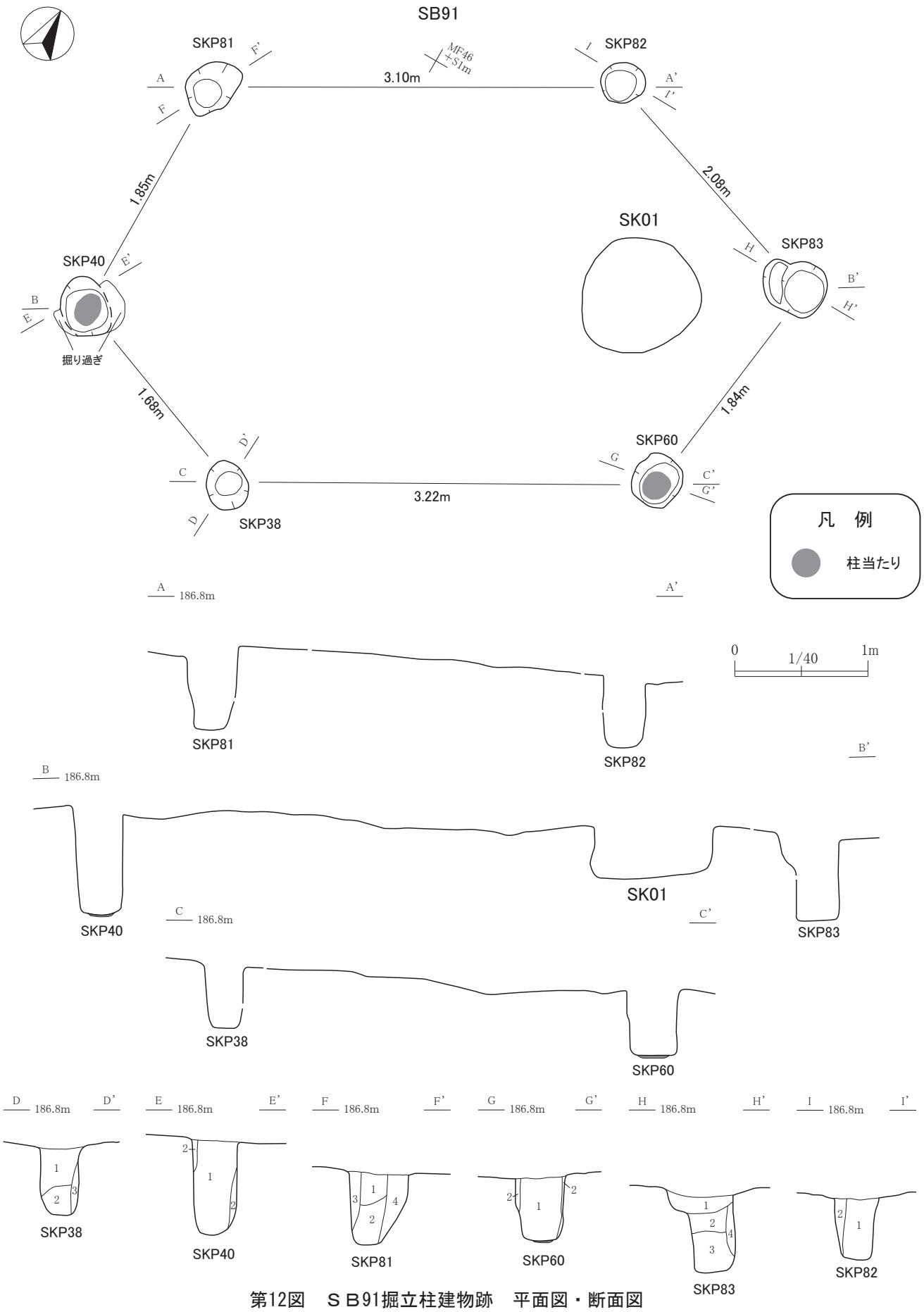
第２表　柱穴様ピット一覧

No.	グリッド	確認面	長径	短径	深さ	底面標高	重複関係（新＞旧）	帰属建物等
			(cm)	(cm)	(cm)	(m)		
06	MA46	Ⅳ層	34	28	7.6	183.51		
07	MA47	Ⅲ層	32	25	5.2	183.45		
08	MB47	Ⅳ層	28	25	3.3	183.59		
09	MB48	Ⅲ層	33	27	38.4	183.20		
10	ME45	Ⅳ層			24	186.02	SKP10＞SK01	
18	ME44	Ⅳ層	30	22	34.7	186.20		
34	MB46	Ⅳ層	39	22	41	184.25		
36	MF44	Ⅳ層	29	28	18.1	186.45	SKP36＞SKP37	
37	MF44	Ⅳ層	(47)	38	22.9	186.44	SKP36＞SKP37	
38	ME44	Ⅳ層			51.4	185.99		SB91
40	MF44	Ⅳ層			72	185.74		SB91
45	MF45	Ⅳ層	35	24	29.7	186.16		
55	MC55	Ⅳ層	(21)	34	21.6	181.39	SKP56＞SKP55	
56	MC55	Ⅳ層	41	36	20.8	181.47	SKP56＞SKP55	
58	MD54	Ⅳ層	40	32	22.8	181.41		
60	ME45	Ⅳ層			52.2	185.78		SB91
71	MH43	Ⅳ層	36	28	29.7	186.76		
75	LT49	Ⅳ層	25	19	41.2	180.67		
81	MF45	Ⅳ層			56	185.80		SB91
82	ME45	Ⅳ層			46	185.65		SB91
83	ME45	Ⅳ層			62	185.59		SB91
98	MD57	Ⅳ層	30	28	10.6	178.73		

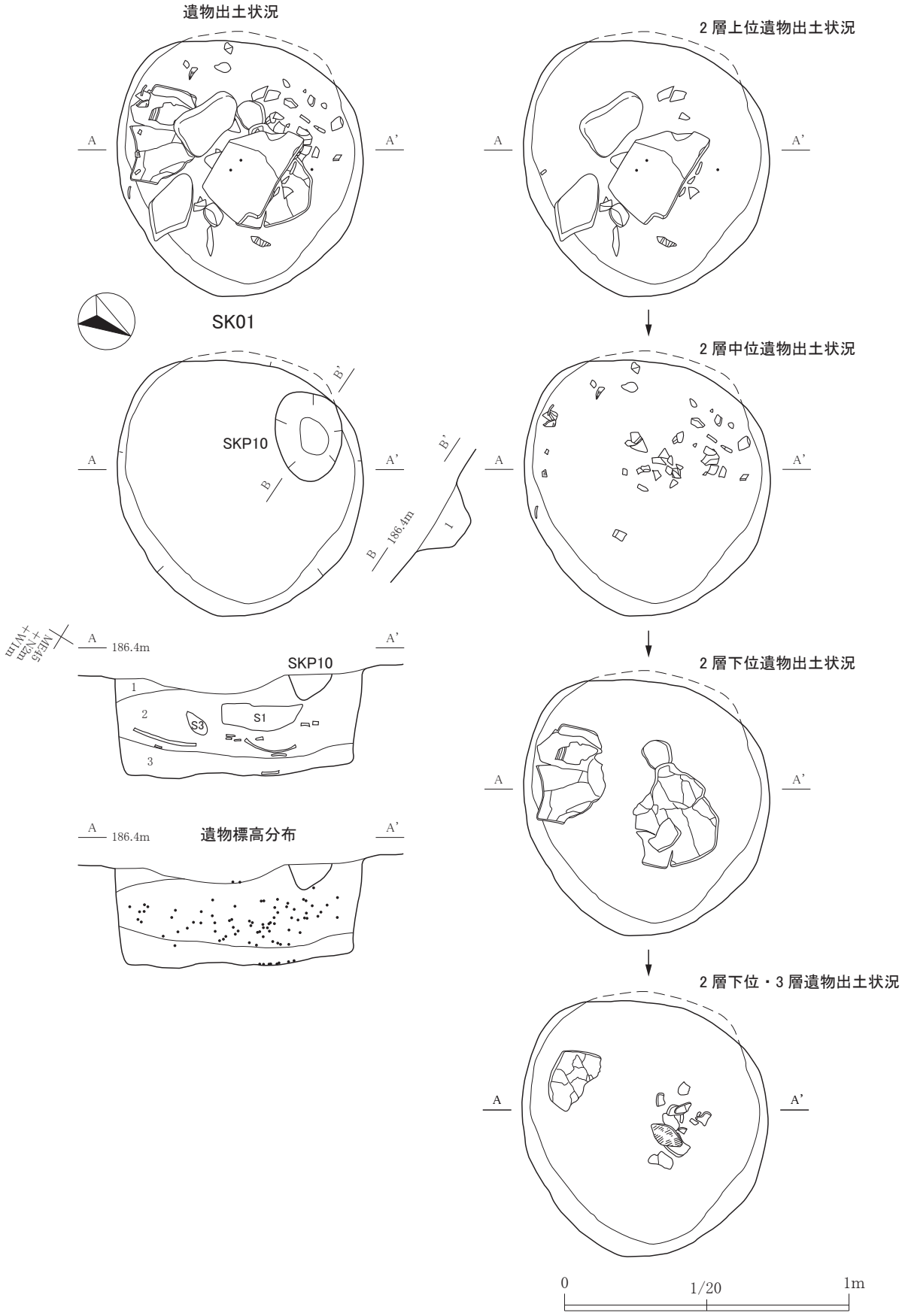
柱穴様ピット一覧凡例
※「長径」・「短径」が切り合いなどにより不明の場合、（　）内に推定値を示した。



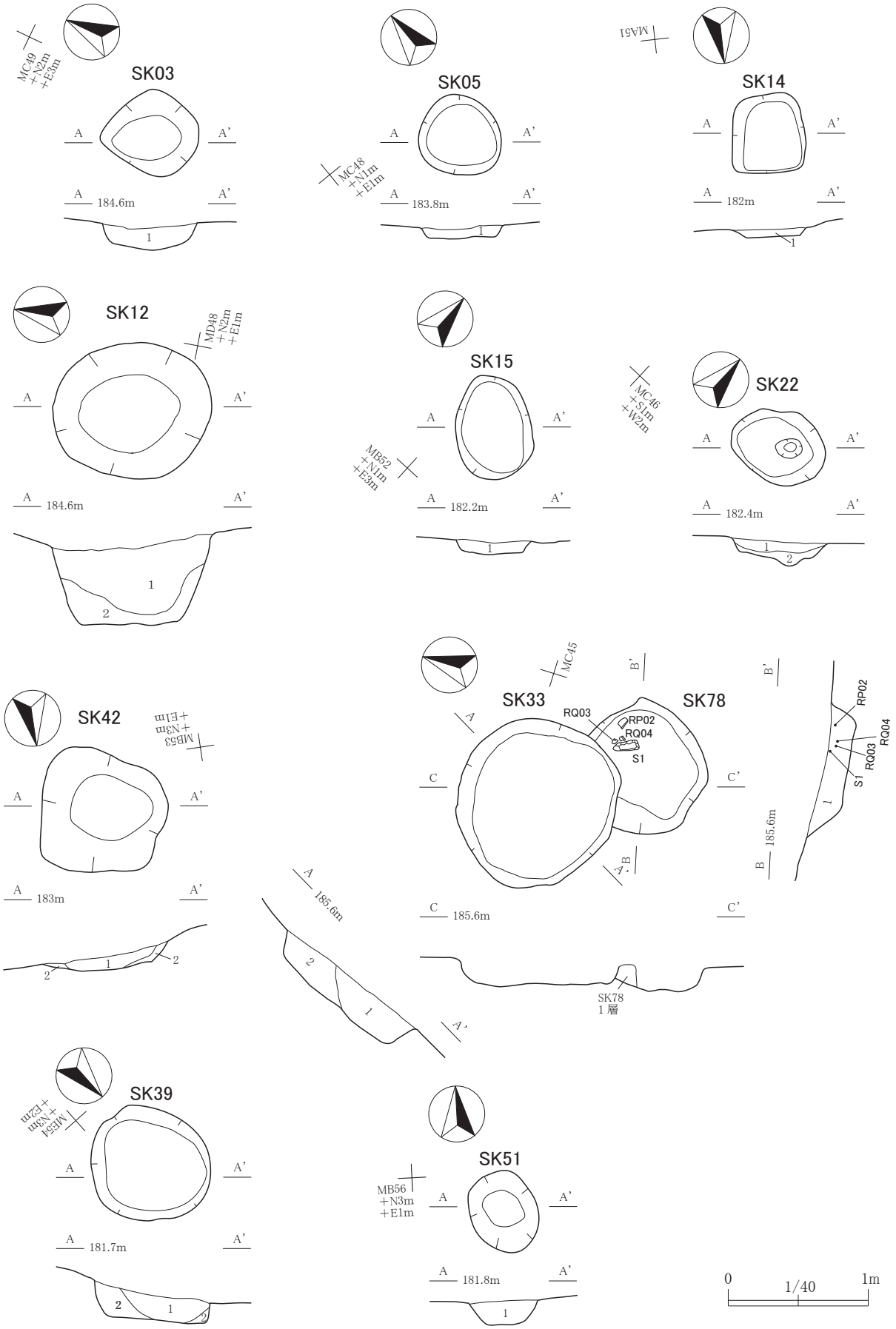
第11図　ＳＩ95竪穴建物跡　平面図・断面図



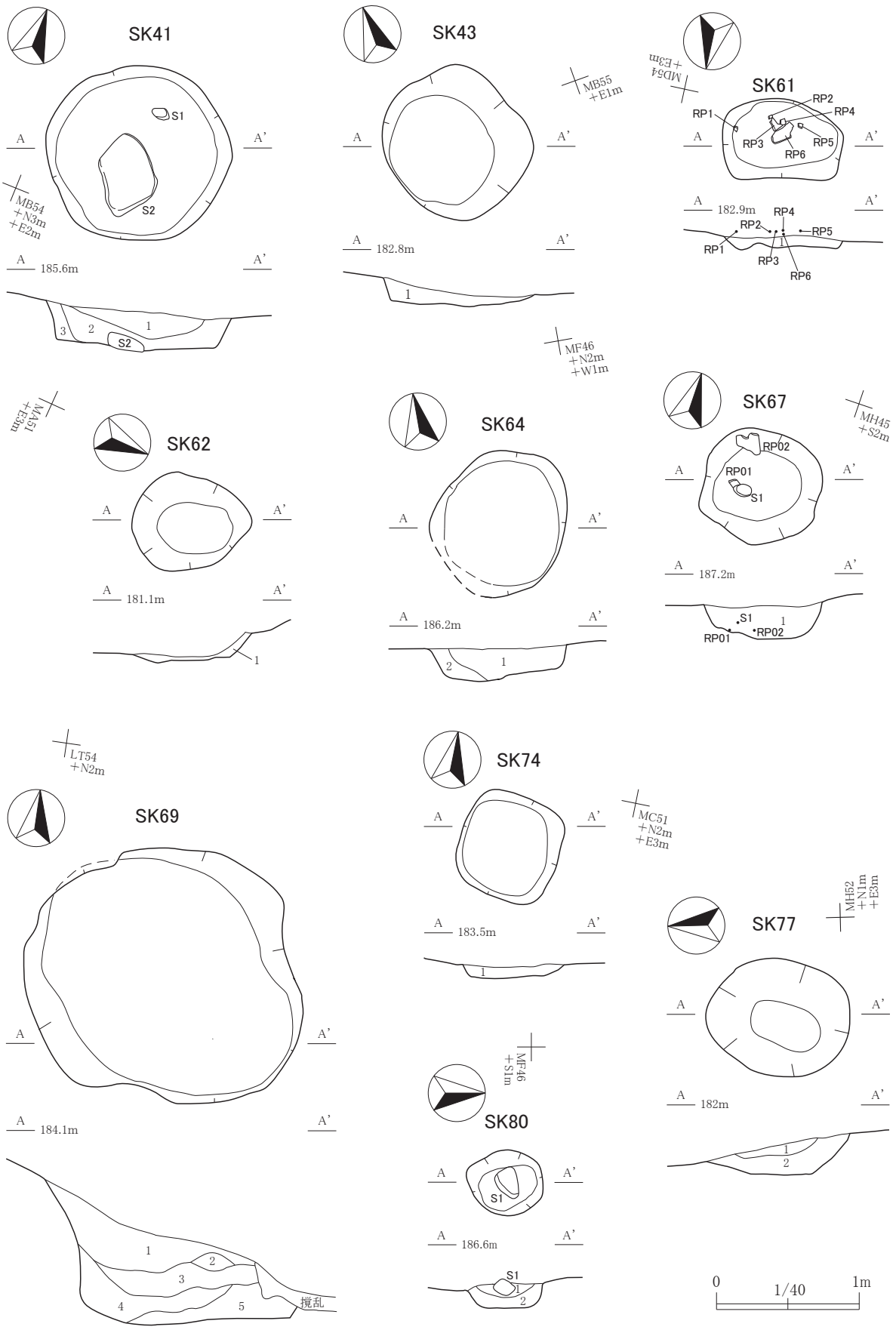
第12図　ＳＢ91掘立柱建物跡　平面図・断面図



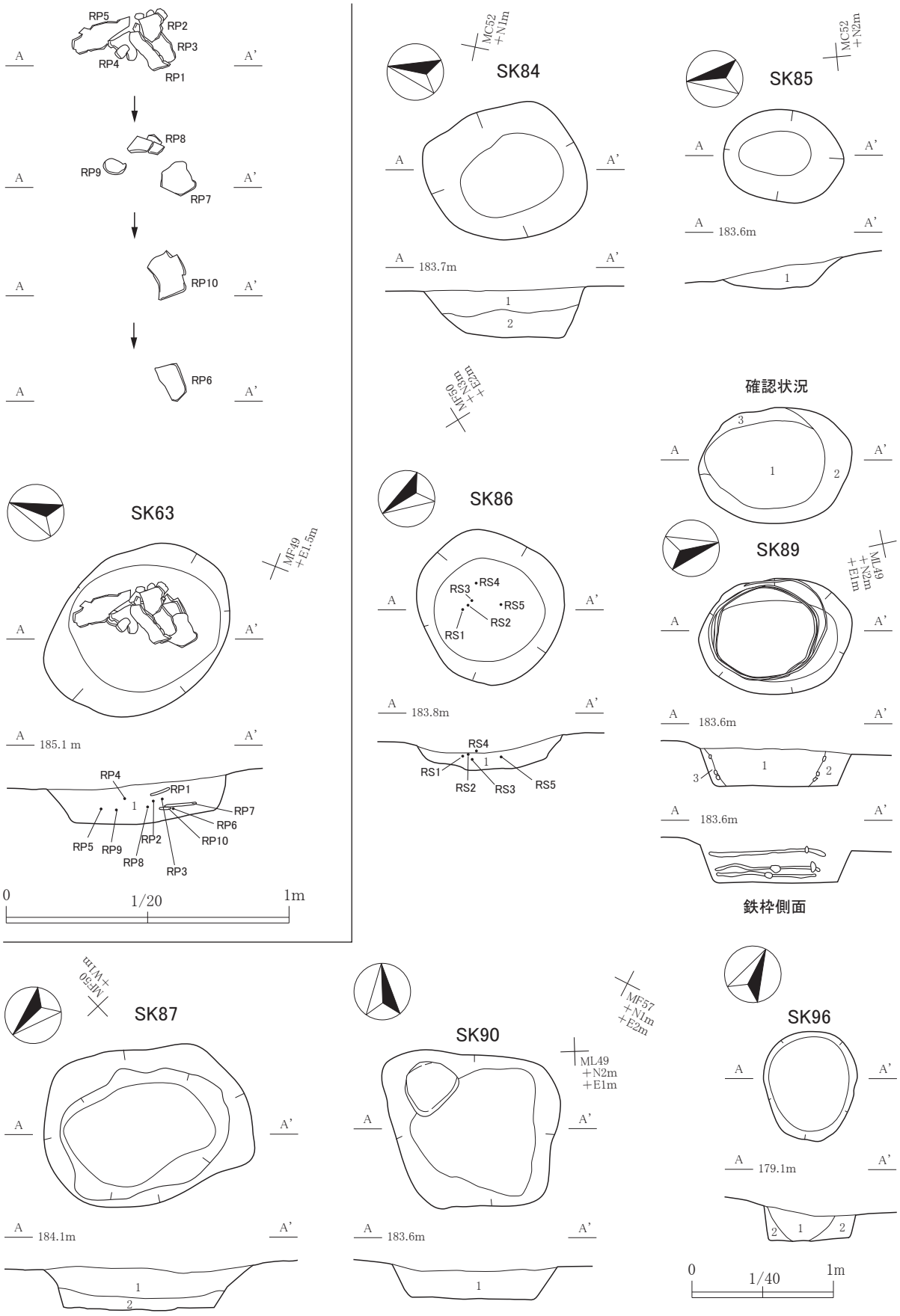
第13図　ＳＫ01土坑　遺物出土状況図



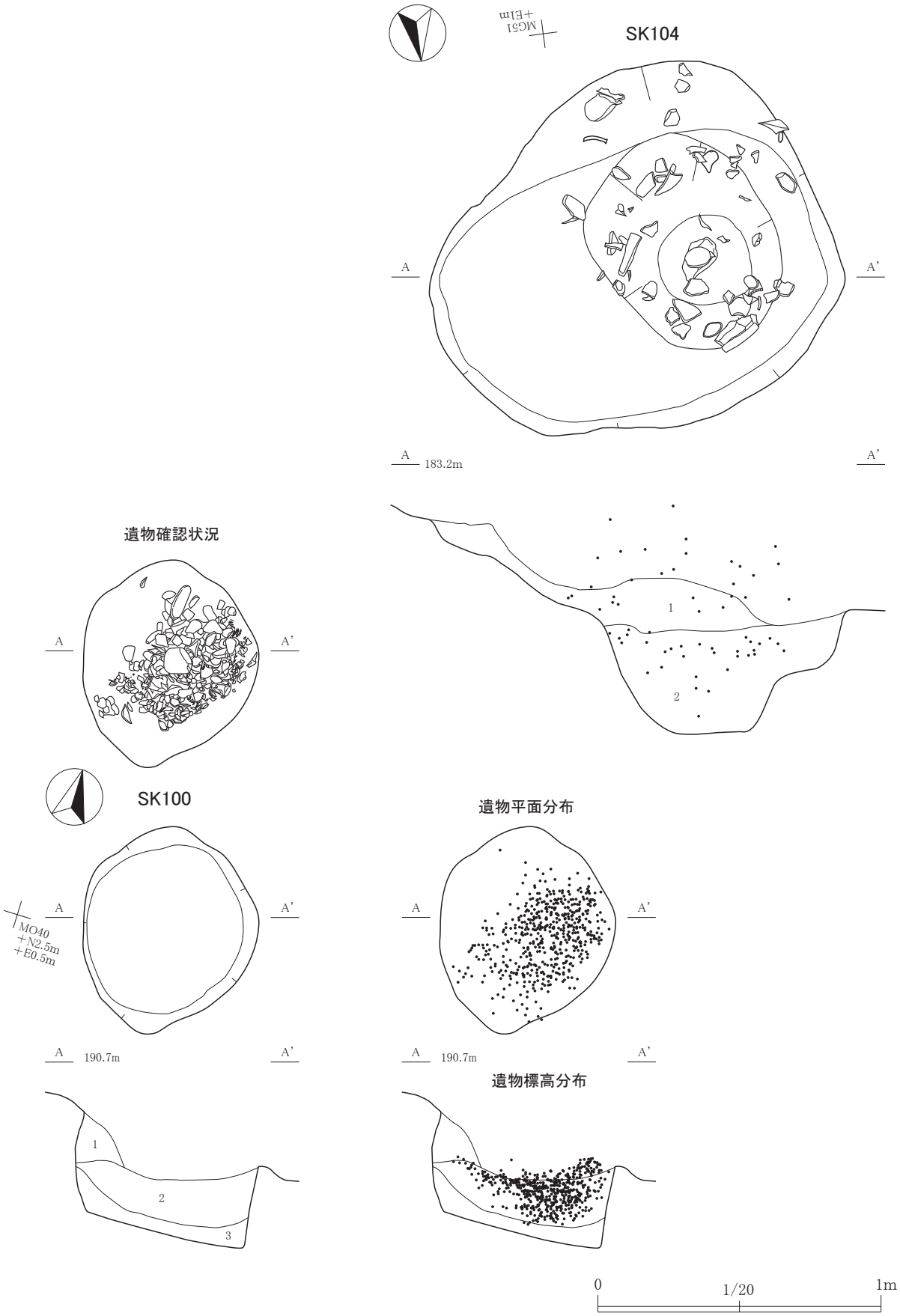
第14図　ＳＫ３・５・12・14・15・22・33・39・42・51・78土坑　平面図・断面図



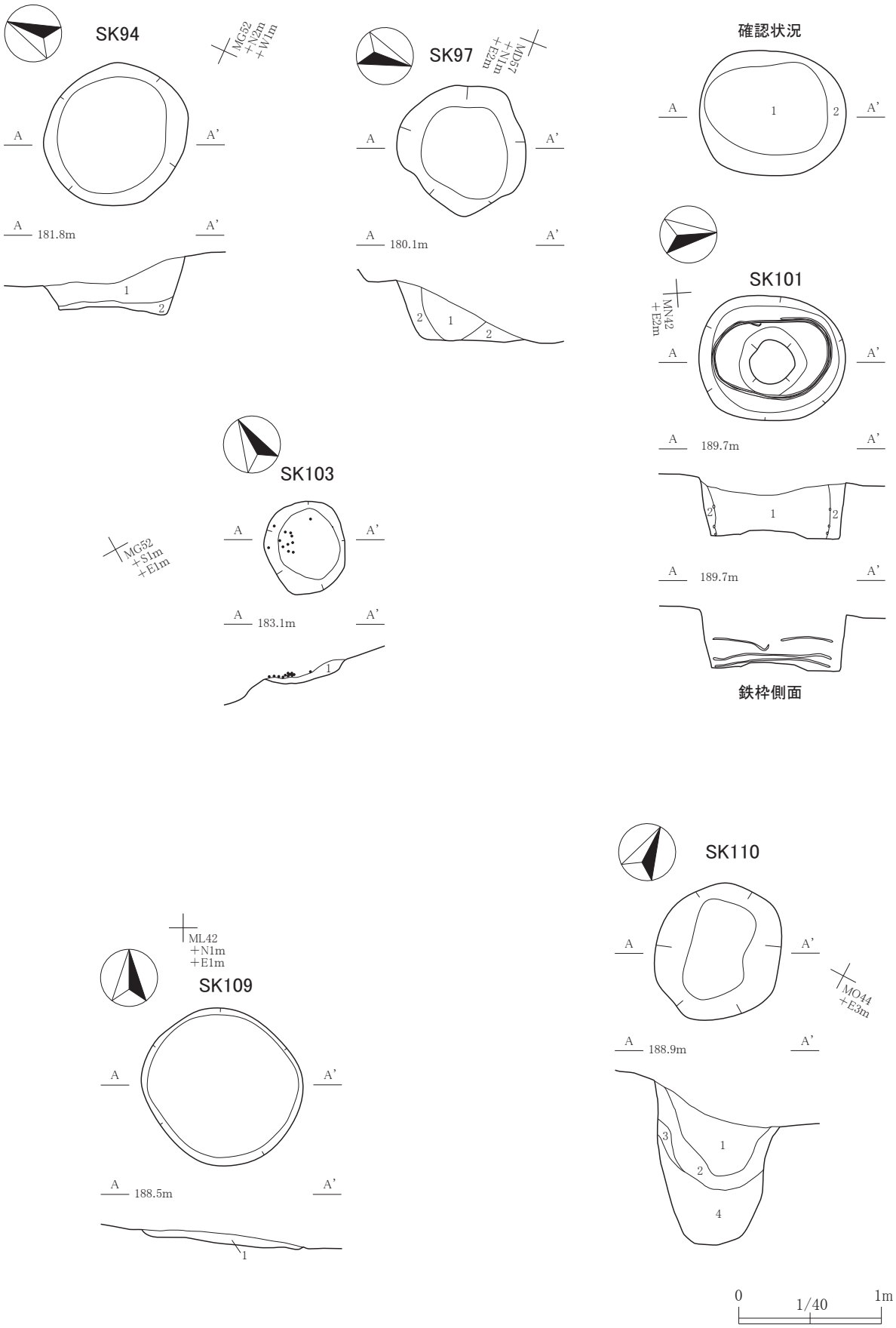
第15図　ＳＫ41・43・61・62・64・67・69・74・77・80土坑　平面図・断面図



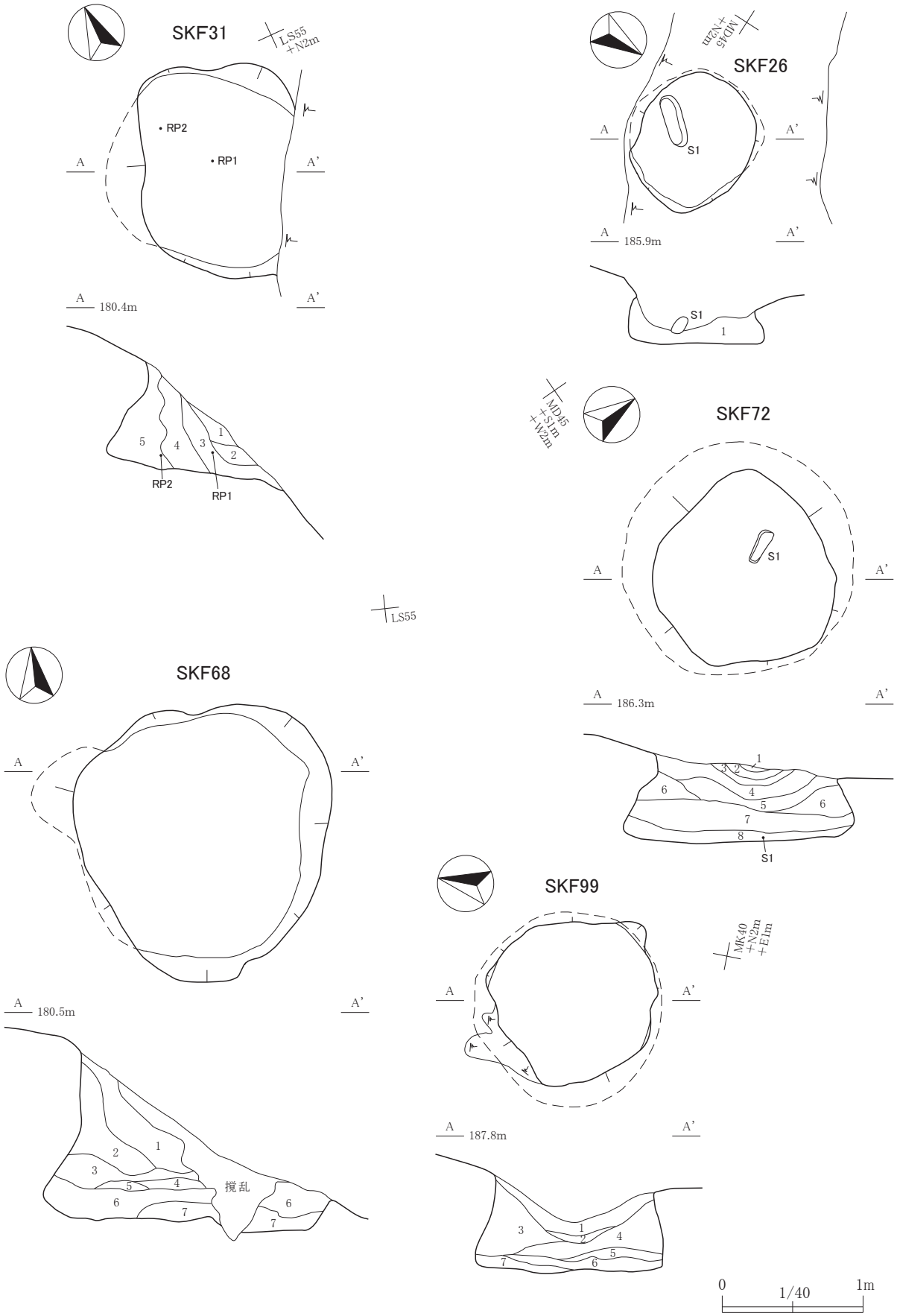
第16図　ＳＫ63・84・85・86・87・89・90・96土坑　平面図・断面図



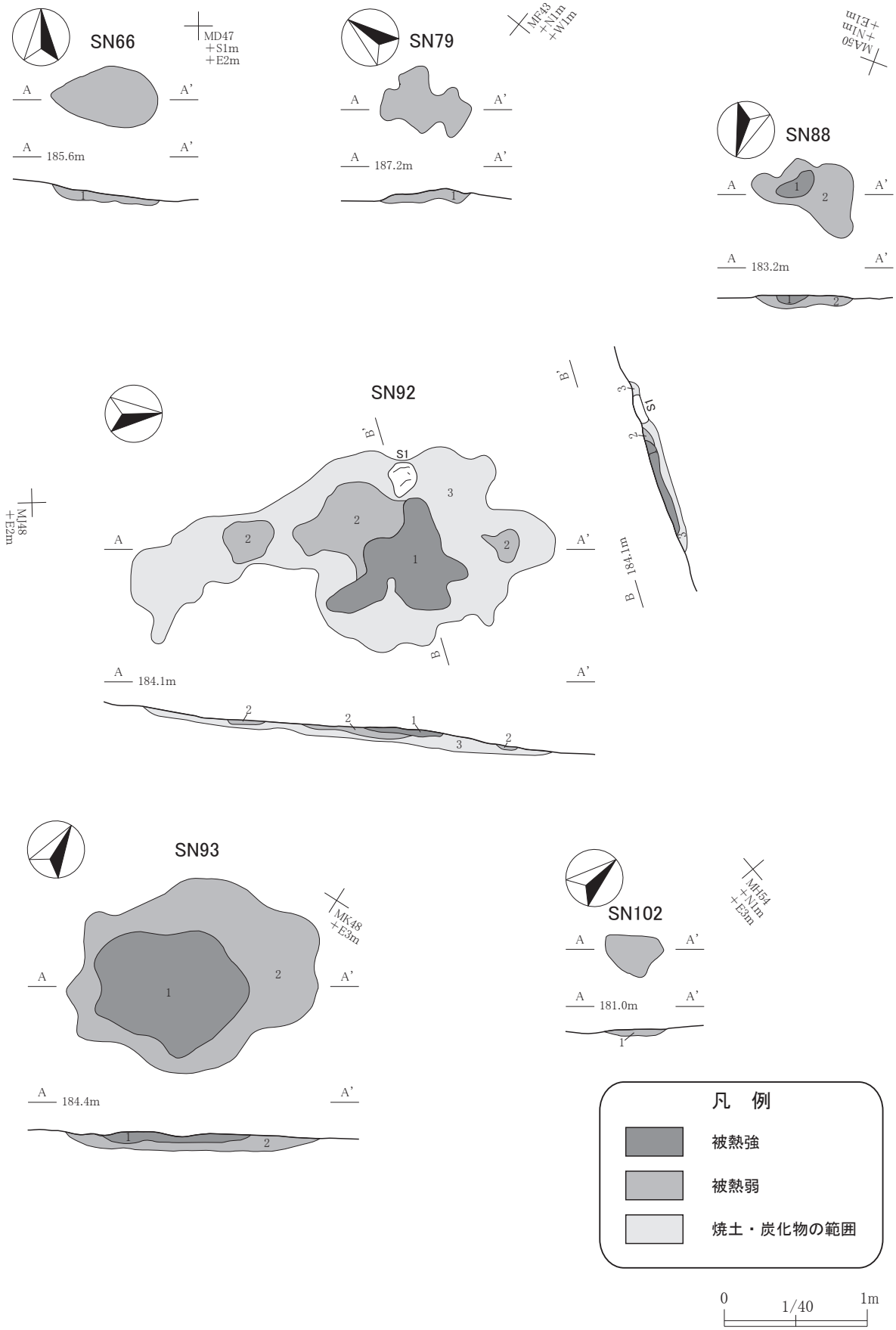
第17図　ＳＫ100・104土坑　遺物出土状況図・平面図・断面図



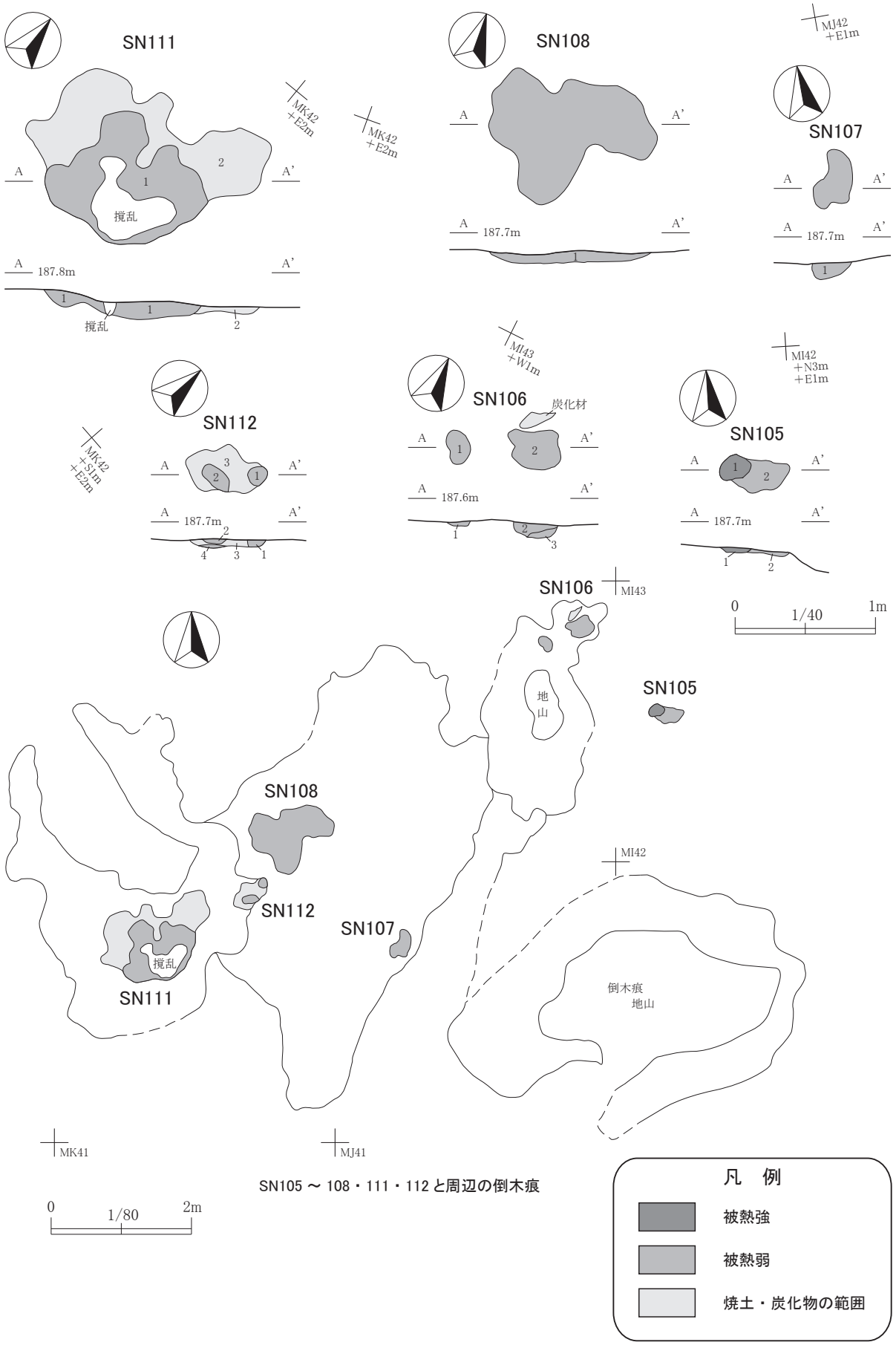
第18図　ＳＫ94・97・101・103・109・110土坑　平面図・断面図



第19図　ＳＫＦ26・31・68・72・99フラスコ状土坑　平面図・断面図

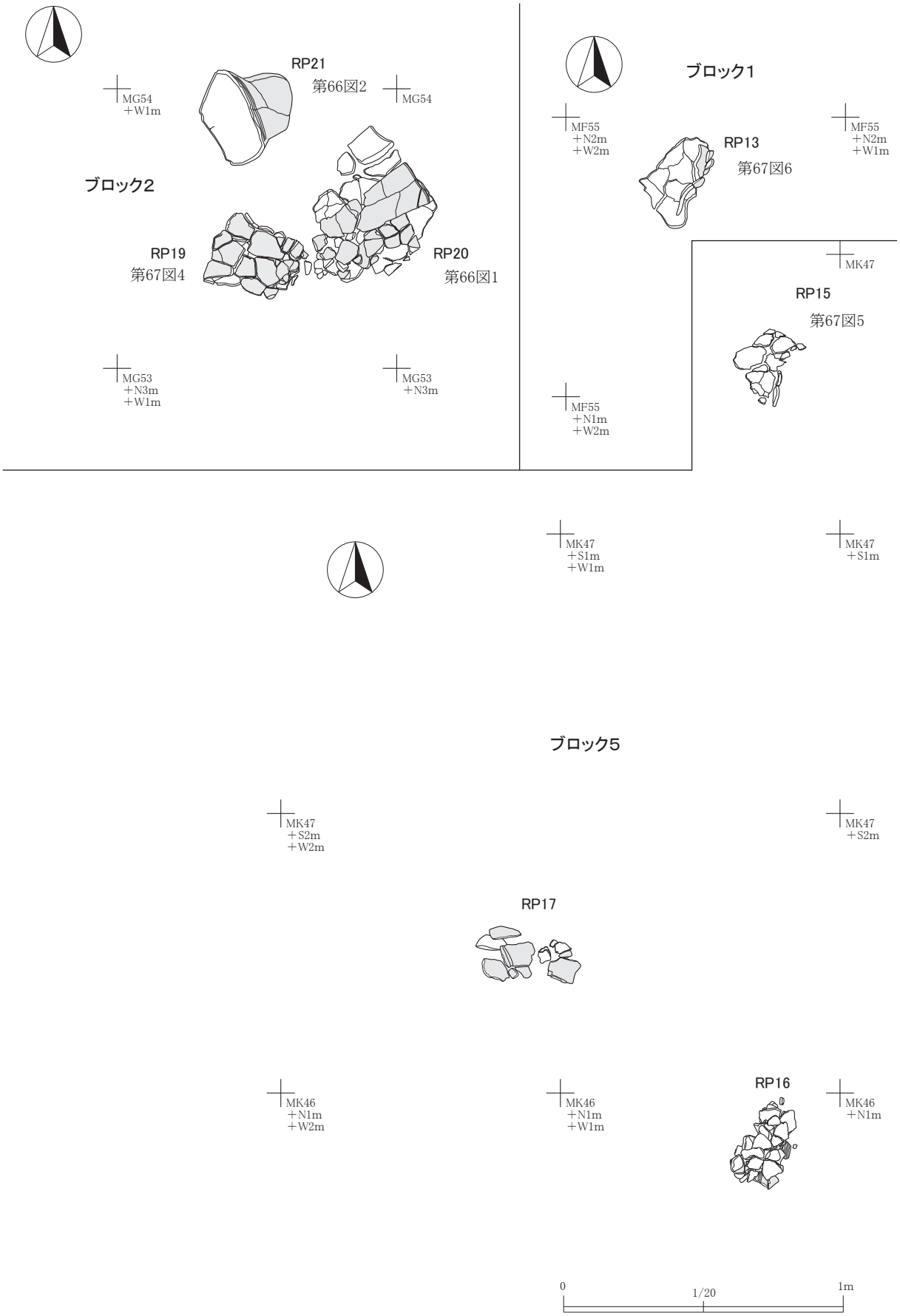


第20図　ＳＮ66・79・88・92・93・102焼土遺構　平面図・断面図

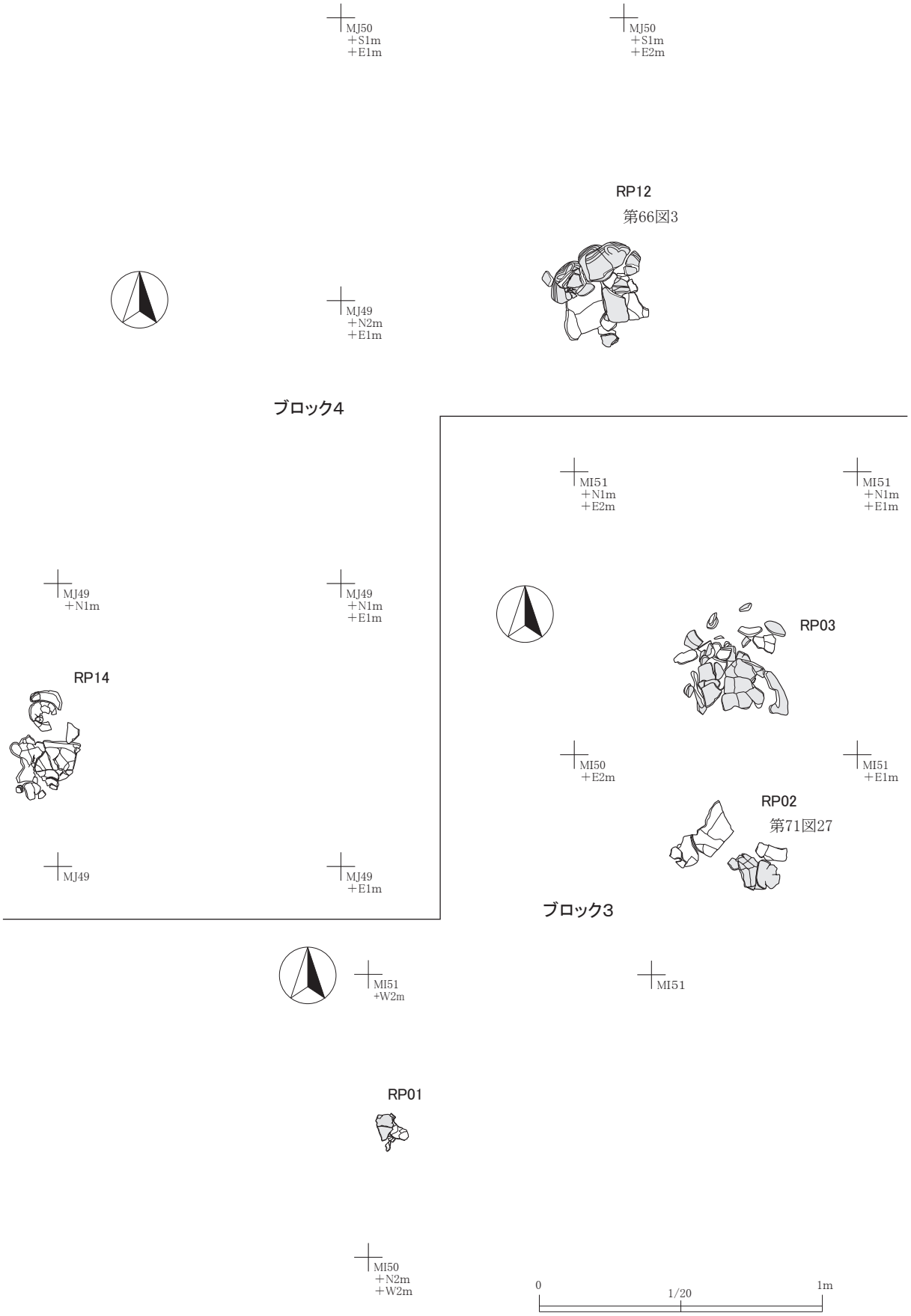


SN105 ～ 108・111・112 と周辺の倒木痕

第21図　ＳＮ105～108・111・112焼土遺構　平面図・断面図



第22図　遺構外土器出土状況図（１）



第23図　遺構外土器出土状況図（２）

第３表　遺構土層注記一覧（１）

略号	No.	層位	土色	記号	土性	粘性	締まり	混入物
SI	95	1	褐色	10YR4/4	SiCL	2	5	炭化物粒（径2～5mm）1%、地山粒（径1mm）5%、黒褐色土（径1mm）7%
		2	褐色	7.5YR4/4	SiC	3	4	炭化物粒（径2～5mm）3%、地山粒（径1mm）20%
SI	P1	1	暗褐色	10YR3/3	SiCL	2	3	地山粒（径1mm）3%
		2	明黄褐色	10YR6/8	SiCL	2	4	褐色土（径1mm）15%
		3	黒褐色	10YR3/2	SiC	2	3	なし
		4	明黄褐色	10YR6/8	SiC	3	5	なし
SI	P2	1	黒褐色	10YR3/2	SiCL	3	3	地山粒（径1mm）5%
		2	明黄褐色	10YR6/6	SiC	3	5	炭化物粒（径2～5mm）1%
SI	P3	1	暗褐色	10YR3/3	SiCL	2	5	地山粒（径1mm）20%
		2	明黄褐色	10YR6/6	SiC	3	5	炭化物粒（2～5mm）3%
SI	P4	1	暗褐色	10YR3/3	SiC	2	3	地山粒（1mm）5%
		2	明黄褐色	10YR6/8	SiC	3	5	なし
SI	P5	1	黒褐色	10YR2/3	SiC	3	4	地山粒（1mm）5%
		2	褐色	10YR4/4	SiC	3	4	地山粒（1mm）20%
SK	01	1	暗褐色	10YR3/3	SiC	2	4	炭化物粒（径10mm）4%、地山粒（径1mm）5%、明褐色砂（径1mm）1%
		2	暗褐色	10YR3/4	SiC	3	3	炭化物塊（径10mm以上）1%、地山粒（径5mm）1%
		3	暗褐色	10YR3/3	SiC	3	4	地山粒（径1mm）1%
SK	03	1	暗褐色	10YR3/3	SiC	2	4	炭化物粒（径3～5mm）5%、地山粒（径3mm）3%
SK	05	1	褐色	10YR4/4	SiC	2	4	炭化物粒（径1mm）3%、地山粒（径5mm）5%
SK	12	1	黒褐色	7.5YR3/2	SiC	2	2	炭化物粒（径10mm）1%、地山粒（径1mm）1%
		2	黒褐色	10YR3/2	SiC	2	3	地山粒（径1mm）25%
SK	14	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	SiC	2	4	地山粒（径5mm）15%
SK	15	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	SiC	3	3	地山粒（径5mm）5%
		2	褐色	7.5YR4/6	SiCL	3	3	炭化物粒（径3～10mm）5%、炭化物塊（径20mm）5%、地山粒（径1mm）20%
SK	22	1	暗褐色	10YR3/4	SiL	2	4	炭化物粒（径2～10mm）7%、地山粒（径1mm）20%
		2	褐色	10YR4/6	SiCL	2	3	炭化物粒（径2～10mm）1%
SK	33	1	褐色	7.5YR4/4	SiCL	2	2	炭化物粒(径4～10mm)3%、地山粒(径1mm）30%
		2	褐色	7.5YR4/6	SiCL	3	3	炭化物粒・塊(径3～20mm）5%、地山粒(径1mm）20%
SK	39	1	黒褐色	10YR3/2	SiC	3	2	地山粒(径1～2mm）3%
		2	暗褐色	10YR3/3	SiC	3	2	黒褐色土(径2～3mm）20%
SK	41	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	SiC	4	4	炭化物粒（径2mm）5%
		2	にぶい黄褐色	10YR5/4	SiC	3	4	炭化物粒（径5mm）3%
		3	黄褐色	10YR5/8	SiC	3	4	炭化物粒（径2mm）3%
SK	42	1	暗褐色	10YR3/4	SiC	4	2	炭化物粒（径2～3mm）3%、地山粒（径2mm）3%
		2	黄褐色	10YR5/6	SiC	4	3	なし
SK	43	1	黄褐色	10YR5/6	SiC	4	2	炭化物粒（径1mm）3%、地山塊（径10～20mm）5%
SK	51	1	褐色	10YR4/4	SiC	4	3	炭化物粒（径1～2mm）3%、地山粒（径2～3mm）3%
SK	61	1	暗褐色	10YR3/4	SiC	3	4	炭化物粒（径3～5mm）5%、地山粒（5～20mm）5%
SK	62	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	SiC	3	2	地山粒（径10mm）5%
SK	63	1	褐色	10YR4/6	SiCL	2	4～5	炭化物粒（径1～3mm）2%
SK	64	1	黄褐色	10YR5/6	SiCL	2	5	炭化物粒（径2～3mm）1%、地山粒（径1mm）15%、灰白色砂・小石(径3～15mm)1%
		2	黄褐色	10YR5/8	SiC	3	5	炭化物粒（径2～5mm）3%
SK	67	1	褐色	7.5YR4/4	SiC	3	4	地山粒（径1～10mm）7%
SK	69	1	褐色	10YR4/4	-	2	2	炭化物(径1～2mm）5%、地山粒（径1～2mm）5%
		2	褐色	10YR4/6	-	3	4	炭化物（径1～2mm）1%、地山粒（径2～10mm）10%
		3	暗褐色	10YR3/4	-	-	-	炭化物粒（径1～2mm）10%、地山粒（1～5mm）5%
		4	褐色	10YR4/6	-	3	3	炭化物粒（径1～2mm）3%、地山粒（1～10mm）15%
		5	褐色	10YR4/6	-	3	4	地山塊（径30～150mm）30%
SK	74	1	暗褐色	10YR3/3	SiCL	2	3	炭化物粒（径10mm）3%、地山粒・塊（径5～20mm）15%
SK	77	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	SiCL	2	4	炭化物粒（径1～2mm）1%
		2	黒褐色	10YR3/2	SiCL	2～3	3～4	炭化物粒（径1～2mm）1%未満、地山粒（径2～5mm）2%
SK	78	1	褐色	10YR4/4	SiCL	2	4	炭化物粒（径2～5mm）1%、褐色土（径1mm）7%
SK	80	1	褐色	10YR4/4	SiCL	2	4	炭化物粒（径2～3mm）1%、地山粒（径1mm）5%
		2	にぶい黄褐色	10YR5/4	SiC	2	4	炭化物粒（径2～10mm）1%、地山粒（径1mm）35%
SK	84	1	褐色	10YR4/4	SiCL	2	4～5	炭化物粒（径1～3mm）1%未満
		2	にぶい黄褐色～褐色	10YR4/3.5	SiCL	2～3	4	炭化物粒（径1～3mm）1%未満
SK	85	1	褐色	10YR4/4.5	SiCL	2	4～5	炭化物粒（径1～2mm）1%未満
SK	86	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	SiCL	2	3～4	炭化物粒（径1～3mm）1%、地山粒（径1～7mm）2%
SK	87	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	SiCL	2	3	炭化物粒（径1～5mm）1%、地山粒・塊（径3～30mm）3%
		2	暗褐色	10YR3/3	SiCL	2～3	2～3	炭化物粒（径1～2mm）1%未満、地山粒・塊（径1～30mm）2%
SK	89	1	暗褐色	10YR3/3	SiC	4	3	地山粒（径1～5mm）5%
		2	黒褐色	10YR2/2	SiC	4	4	炭化物粒（径1mm）3%、地山粒（径1～10mm）20%、礫1%
		3	明黄褐色	10YR6/8	SiC	4	3	黒褐色土（径10mm）3%、礫1%
SK	90	1	黒褐色	10YR2/2	SiC	2	3	地山塊（径10～20mm）10%
SK	94	1	黒褐色	10YR3/2	SiC	4	4	炭化物粒（径1～2mm）3%、地山粒・塊（径10～50mm）25%
		2	暗褐色	10YR3/3	SiC	4	3	炭化物粒（径1～2mm）3%
SK	96	1	黒褐色	10YR2/3	ｼﾙﾄ	3	3	地山粒（径5mm）1%
		2	黒褐色	10YR2/3	ｼﾙﾄ	3	3	地山粒（径1～5mm）5～6%
SK	97	1	褐色	10YR4/4	ｼﾙﾄ	3	4	地山粒（径1～5mm）3%
		2	暗褐色	10YR3/3	ｼﾙﾄ	3	3	地山粒（径5mm）5%
SK	100	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	SiC	4	3	地山粒・塊（径1～100mm）3%
		2	暗褐色	10YR3/3	SiC	4	4	炭化物粒（径1～2mm）1%
		3	褐色	10YR4/4	SiC	4	5	なし
SK	101	1	黒褐色	10YR2/3	SiC	4	3	炭化物粒（径1～3mm）3%、地山粒・塊（径1～20mm）5%
		2	暗褐色	10YR3/3	SiC	4	4	地山粒（径1～10mm）20%
SK	103	1	褐色	10YR4/6	SiC	3	4	炭化物粒（径1～5mm）3%、地山粒（径1mm）10%
SK	104	1	褐色	10YR4/6	SiC	4	5	炭化物粒・塊（径1～15mm）1%、地山粒（径1mm）25%
		2	褐色	10YR4/4	SiC	3	5	炭化物粒・塊（径1～20mm）5%、地山粒（径1mm）5%
SK	109	1	褐色	10YR4/4	SiCL	2～3	3～4	炭化物粒（径1～2mm）1%未満、地山粒・塊（径5～20mm）10%
SK	110	1	黒色	10YR1.7/1	SiC	2～3	3	なし
		2	黒褐色	10YR3/2	SiCL	3	3～4	地山粒・塊（径1～10mm）7%
		3	暗褐色	10YR3/4	SiCL	3	2	なし
		4	黒褐色	10YR3/1	SiC	3～4	3	地山粒（径1～5mm）3%
SKF	26	1	褐色	7.5YR4/6	SiCL	2	3	炭化物粒（径10mm）1%、地山粒（径1mm）5%
SKF	31	1	暗褐色	10YR3/3	-	2	2	炭化物粒(径1～2mm）1%、地山粒（径1mm以下）2～3%
		2	暗褐色	10YR3/4	-	2	3	地山粒（径1～2mm）1%
		3	暗褐色	10YR3/3	-	3	3	地山粒（径2～5mm）5%
		4	褐色	10YR4/4	-	2	3	炭化物粒（径1～2mm）1%、地山粒（径1～5mm）10%
		5	黄褐色	10YR5/6	-	4	4	炭化物粒（径1～2mm）5%、地山粒(径1～2mm)5%、地山塊（径20～30mm）20%

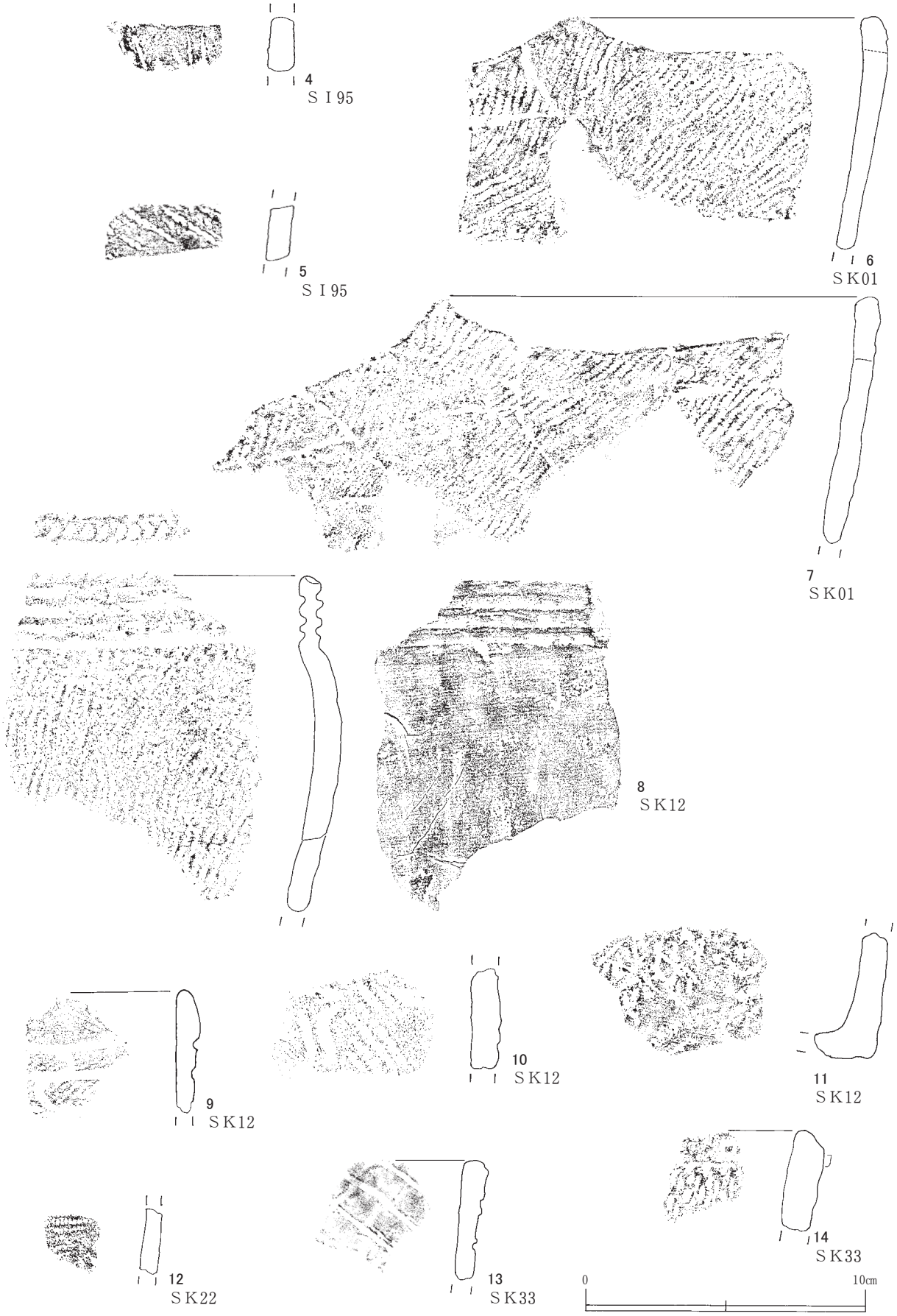
第４表　遺構土層注記一覧（２）

略号	No.	層位	土色	記号	土性	粘性	締まり	混入物
SKF	68	1	褐色	10YR4/4	SiCL	3	3	炭化物粒（径1mm以下）1%、地山粒(径1～5mm）10%
		2	暗褐色	10YR3/3	SiCL	3	3	炭化物粒（径1～2mm）2～3%、地山粒（径1～5mm）5%
		3	黄褐色	10YR5/8	SiC	4	4	暗褐色土粒（径5mm）10%
		4	暗褐色	10YR3/4	SiCL	3	3	炭化物粒（径1～2mm）1%、地山粒（径2～5mm）2～3%
		5	褐色	10YR4/6	SiC	5	5	炭化物粒（径1～2mm）5%
		6	黄褐色	10YR5/8	SiC	4	4	暗褐色土含む
		7	黒褐色	10YR2/3	SiCL	3	3	炭化物粒（径1～2mm）2～3%、地山塊（径10mm）10%
SKF	72	1	黒色	10YR2/1	SiCL	2	4	炭化物粒（径2～3mm）1%、地山粒（径1mm）1%、暗褐色土25%
		2	黄褐色	10YR5/6	SiC	2	4	暗褐色土（径1mm）10%
		3	褐色	10YR4/6	SiCL	2	4	炭化物粒（径2～10mm）5%、地山粒（径1～5mm）10%
		4	黄褐色	10YR5/6	SiCL	3	4	炭化物粒・塊（径3～15mm）3%、地山粒（径1mm）1%
		5	褐色	10YR4/6	SiC	3	4	炭化物粒・塊（径2～30mm）20%、地山粒（径1mm）15%、褐色土（径1mm）10%
		6	褐色	10YR4/6	SiC	2	3	炭化物粒（径2～5mm）3%、地山粒（径1mm）7%、褐色土（径1mm）3%
		7	黄褐色	10YR5/6	SiCL	2	3	炭化物粒（径2～3mm）1%、褐色土（径1mm）5%
		8	褐色	10YR4/6	SiCL	2	3	炭化物粒・塊（径2～25mm）7%、地山粒（径1～10mm）5%
SKF	99	1	暗褐色	10YR3/3	SiCL	3	3～4	炭化物粒（径1～3mm）1%未満、地山粒・塊（径1～15mm）5%
		2	黒褐色	10YR2/2	SiCL	2～3	3	炭化物粒（径1～3mm）2%、地山粒（径1～5mm）2%
		3	暗褐色	10YR3/3	SiCL	3	3	炭化物粒（径1～3mm）1%未満、地山粒・塊（径1～15mm）30%
		4	黒褐色	10YR3/2	SiCL	3	3～4	炭化物粒（径1～3mm）1%未満、地山粒・塊（径3～30mm）25%
		5	黒褐色	10YR2.5/2	SiCL	3	3	炭化物粒（径1～3mm）1%未満、地山粒（径1～5mm）3%
		6	黒褐色～暗褐色	10YR3/2.5	SiCL	3	3～4	炭化物粒（径1～3mm）1%未満、地山粒・塊（径3～15mm）30%
		7	暗褐色	10YR3/3	SiCL	3	3	炭化物粒（径1～3mm）1%未満、地山粒（径1～10mm）5%
SN	66	1	赤褐色	5YR4/8	SiCL	1	5	炭化物粒（径5mm）5%、焼土粒（径3mm）1%
SN	79	1	暗褐色	10YR3/4	SiCL	1	4	炭化物粒（径2～10mm）5%、焼土粒（径1～8mm）15%
SN	88	1	褐色	7.5YR4/4	SiC	3	5	炭化物粒（径1～3mm）1%、焼土粒（径1～3mm）3%
		2	暗褐色	10YR3/4	SiC	4	3	炭化物粒（径1～3mm）1%
SN	92	1	明赤褐色	5YR5/8	SiCL	2	4	炭化物粒（径1～3mm）2%、焼土粒（径5～10mm）10%
		2	褐色	7.5YR4/4	SiCL	2～3	3～4	炭化物粒（径1～3mm）2%、焼土粒（3～5mm）5%
		3	暗褐色	7.5YR3/3	SiCL	2～3	3	炭化物粒（径1～2mm）1%、焼土粒（径1～2mm）2%
SN	93	1	褐色	7.5YR4/6	SiCL	2	3～4	炭化物粒（径1～5mm）1%、焼土粒（径3～10mm）5%
		2	暗褐色	10YR3/3	SiCL	2～3	3	炭化物粒（径1～5mm）1%、焼土粒（径1～5mm）2%
SN	102	1	黒褐色	10YR3/2	SiCL	2	5	炭化物粒（径1～5mm）5%、焼土粒・塊（径1～20mm）5%
SN	105	1	褐色	7.5YR4/6	SiC	3	4	炭化物粒（径1mm）3%、暗褐色土10%
		2	暗褐色	10YR3/3	SiC	3	4	炭化物粒（径1mm以下）3%、焼土粒（径1～5mm）10%
SN	106	1	褐色	7.5YR4/6	SiCL	3	3	炭化物粒（径1mm）3%、焼土粒（径5～10mm）10%、黒褐色土7%
		2	黒褐色	10YR2/3	SiC	4	4	炭化物粒（径1～3mm）5%、焼土粒（径5～10mm）10%
		3	褐色	7.5YR4/6	SiCL	3	4	焼土粒（径5～10mm）10%、黒褐色土5%
SN	107	1	暗褐色	7.5YR3/4	SiC	4	4	炭化物粒（径1～3mm）3%、焼土粒（径1～5mm）15%
SN	108	1	明褐色	7.5YR5/6	SiC	4	4	炭化物粒（径1～3mm）3%、焼土粒（径5～10mm）2%、暗褐色塊（径20～50mm）5%
SN	111	1	褐色	7.5YR4/6	SiC	4	4	炭化物粒（径1～3mm）5%、焼土粒（径1～2mm）3%
		2	褐色	7.5YR4/4	SiC	5	4	炭化物粒（径1～5mm）5%、焼土粒・塊（径5～20mm）10%
SN	112	1	褐色	7.5YR4/4	SiC	4	5	なし
		2	暗褐色	10YR3/4	SiC	5	3	炭化物粒（径1～5mm）5%、焼土粒（径5～10mm）1%
		3	暗褐色	10YR3/3	SiC	4	3	炭化物粒（径1～3mm）1%、焼土粒（径1～2mm）3%
		4	明赤褐色	5YR5/6	SiC	4	5	なし
SKP	06	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	SiC	2	4	炭化物粒（径2mm）5%、地山粒・塊（径1～20mm）10%
SKP	07	1	黒褐色	10YR3/2	SiC	2	4	地山粒（径2mm）10%
SKP	08	1	灰黄褐色	10YR4/2	SiC	2	4	炭化物粒（径2mm）3%、地山粒（径2～3mm）15%
SKP	09	1	黒褐色	10YR2/3	SiC	3	3	炭化物粒（径2mm）3%
SKP	10	1	黒褐色	10YR3/2	SiCL	2	4	炭化物粒（径10mm）3%、地山粒（径1mm）3%、にぶい黄褐色土(径1mm)1%
SKP	11	1	褐色	7.5YR4/6	SiCL	2	5	炭化物粒（径3mm）1%
SKP	18	1	暗褐色	10YR3/3	SiCL	2	3	炭化物粒（径2mm）3%、地山粒（径1mm）5%
SKP	34	1	暗褐色	10YR3/3	SiC	2	3	炭化物粒（径2～3mm）
SKP	36	1	暗褐色	10YR3/3	SiC	3	4	炭化物粒（径3mm）5%、地山粒（径1mm）10%
SKP	37	1	暗褐色	7.5YR3/3	SiC	3	3	炭化物粒（径5mm）5%、地山粒（径1mm）5%、黒褐色土5%
		2	褐色	7.5YR4/4	SiC	3	4	炭化物粒（径3mm）3%、地山粒（径1mm）15%
SKP	38	1	暗褐色	10YR3/4	SiC	3	3～4	炭化物粒（径2～5mm）3%、地山粒（径1～5mm）20%
		2	褐色	10YR4/6	SiC	3	3	炭化物粒・塊（2～15mm）、地山粒（径1～10mm）1%
SKP	40	1	褐色	10YR4/6	SiC	3	3	炭化物粒（径2～7mm）7%、地山粒（径1mm）15%、暗赤褐色粒（径3～6mm）1%
		2	黄褐色	10YR5/6	SiC	4	5	炭化物粒（径2～5mm）1%、褐色土（径1mm）20%
SKP	45	1	黒褐色	10YR2/3	SiC	2	3	炭化物粒（径3mm）3%、地山粒（径1mm）10%
SKP	55	1	橙色	7.5YR6/8	SiC	3	4	黒褐色土（径20mm）30%
SKP	56	1	暗褐色	10YR3/3	SiC	3	3	地山塊（径10～20mm）15%
SKP	58	1	黒褐色	10YR3/2	SiC	4	2	炭化物粒（径1mm）5%
SKP	60	1	褐色	10YR4/6	SiC	4	2	炭化物粒（径2～10mm）3%、地山粒（径1mm未満）3%
		2	黄褐色	10YR5/6	SiC	3	4	地山粒（径1mm）1%
SKP	71	1	暗褐色	10YR3/4	SiC	2	2	地山粒（径1mm）15%
SKP	75	1	黒褐色	10YR2/3	SiC	3	3	地山粒（径10mm）3%
SKP	81	1	褐色	10YR4/4	SiCL	3	3	炭化物粒（径2～10mm）5%、地山粒（径1mm）3%、褐色土（径1mm）5%
		2	褐色	10YR4/4	SiC	3	3	炭化物粒(径3～5mm)1%、地山粒(径1mm）8%
		3	明黄褐色	10YR6/8	SiC	2	5	炭化物粒(径2～5mm）1%
		4	明黄褐色	10YR6/6	SiC	3	3	地山粒(径1mm）3%
SKP	82	1	暗褐色	10YR3/4	SiCL	2	4	炭化物粒（径3～10mm）1%、地山粒（径1mm）10%、褐色土（径1mm）30%
		2	褐色	10YR4/4	SiCL	2	3	地山粒（径1mm）15%
SKP	83	1	褐色	10YR4/6	SiCL	2	5	炭化物粒（径2～6mm）1%、地山粒（径1mm）10%
		2	褐色	10YR4/6	SiC	3	3	炭化物粒（径2～10mm）1%、地山粒（径1mm）7%
		3	褐色	10YR4/4	SiC	4	4	炭化物粒（径3～5mm）1%、地山粒（径1mm）10%
		4	褐色	10YR4/4	SiC	4	4	炭化物粒（径2～7mm）1%、地山粒（径1mm）40%
SKP	98	1	黒褐色	10YR2/3	SiCL	3	3	地山粒（径5mm）1%

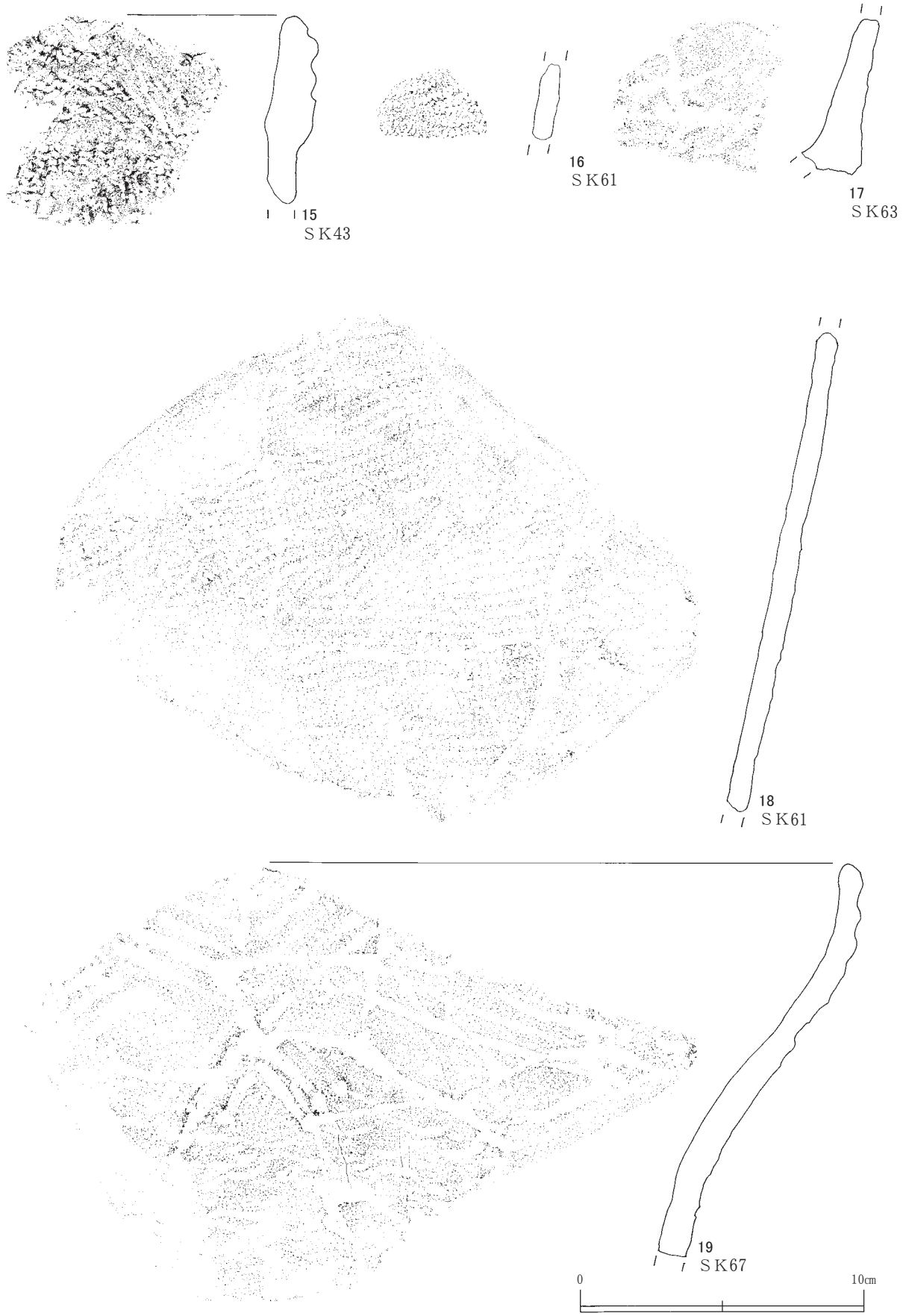
遺構土層注記一覧凡例

※1 「土色」・「土性」の表記は、新版標準土色帖（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、2003）による。
※2 「粘性」・「締まり」の表記は、度合いの強い方弱い方から1～5の数字を用いて示した。
※3 記録漏れにより不明の場合、「-」もしくは「(-)」の記号を用いて示した。

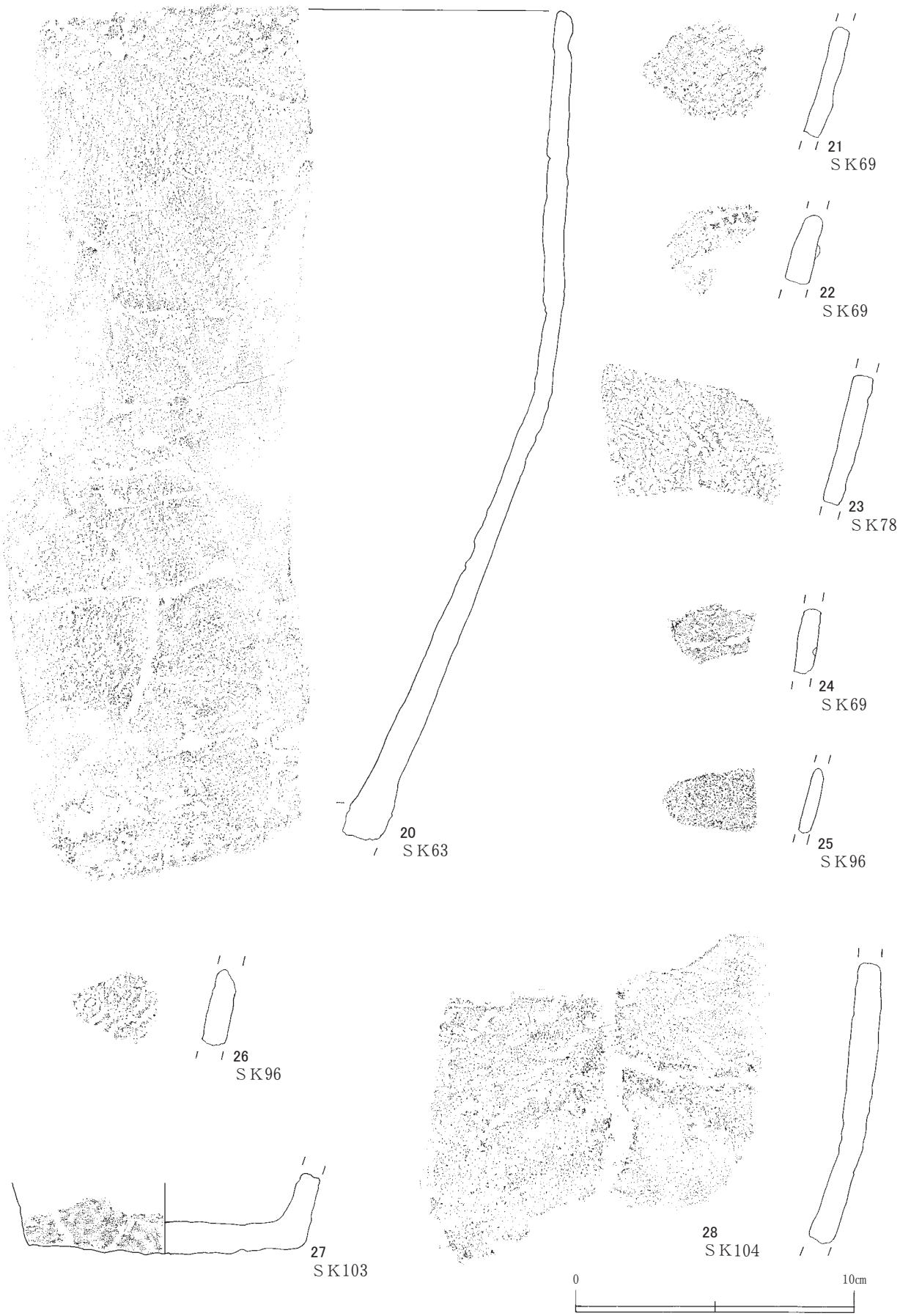
第24図　遺構内出土土器（１）



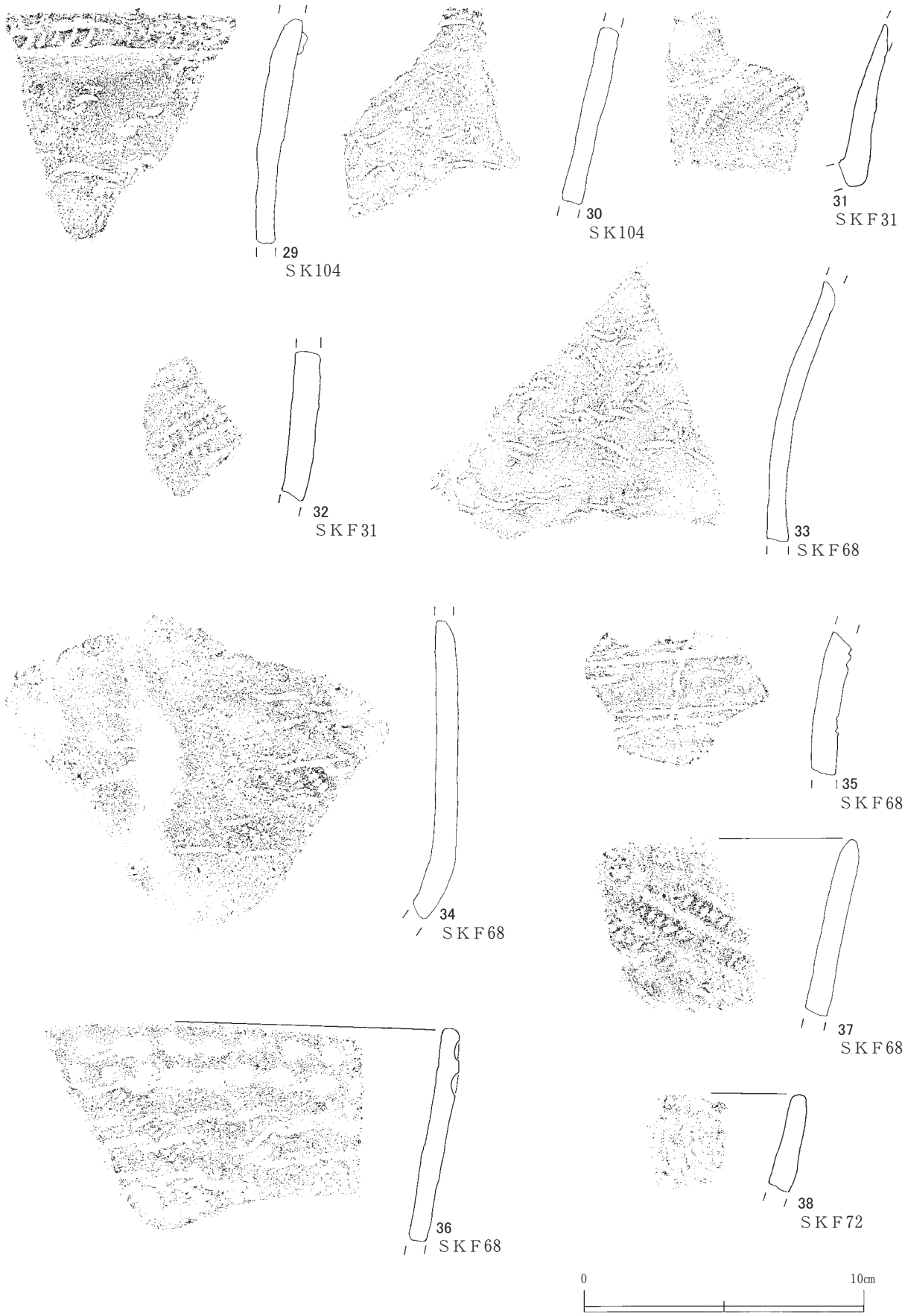
第25図　遺構内出土土器（２）



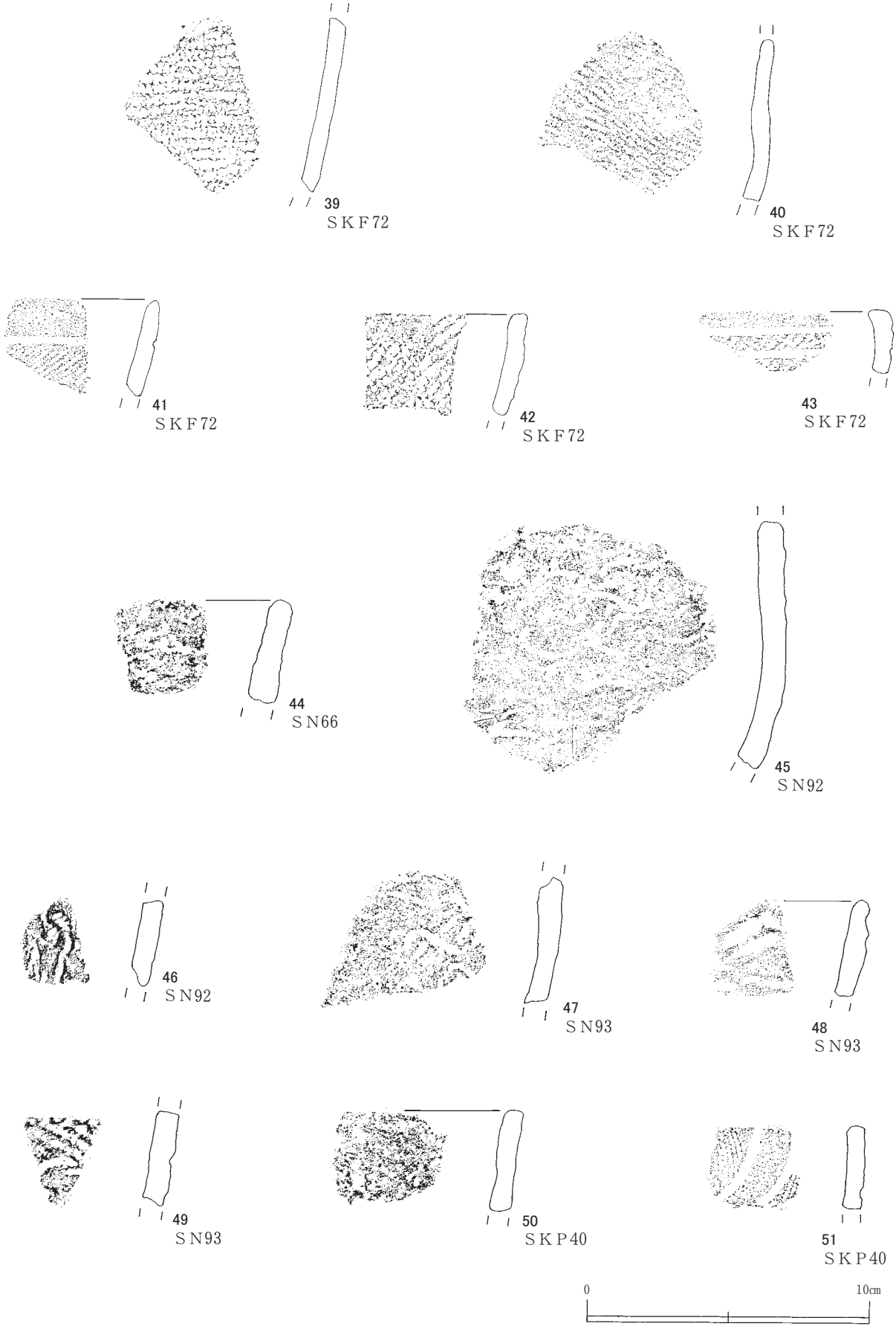
第26図　遺構内出土土器（３）



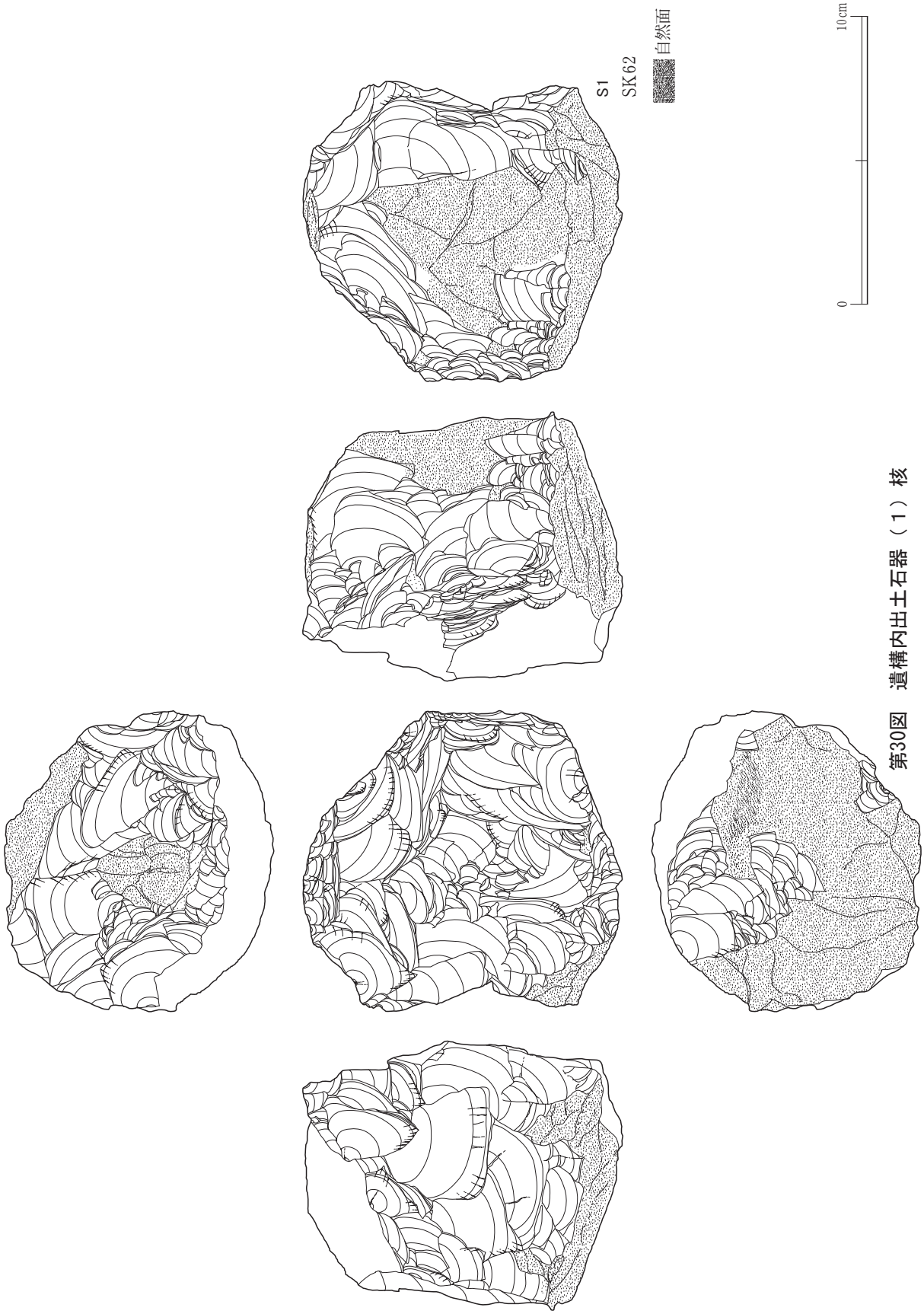
第27図　遺構内出土土器（４）



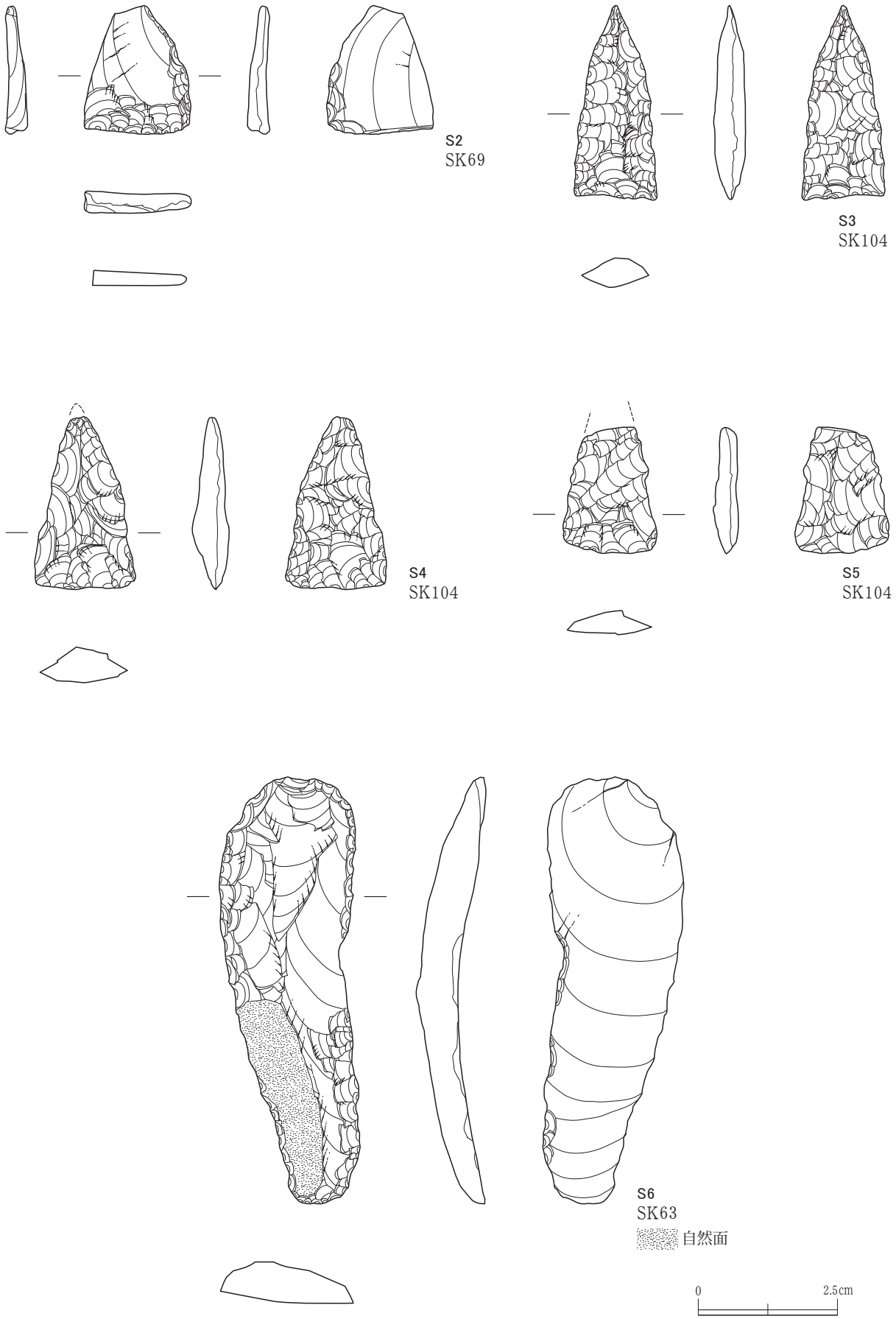
第28図　遺構内出土土器（５）



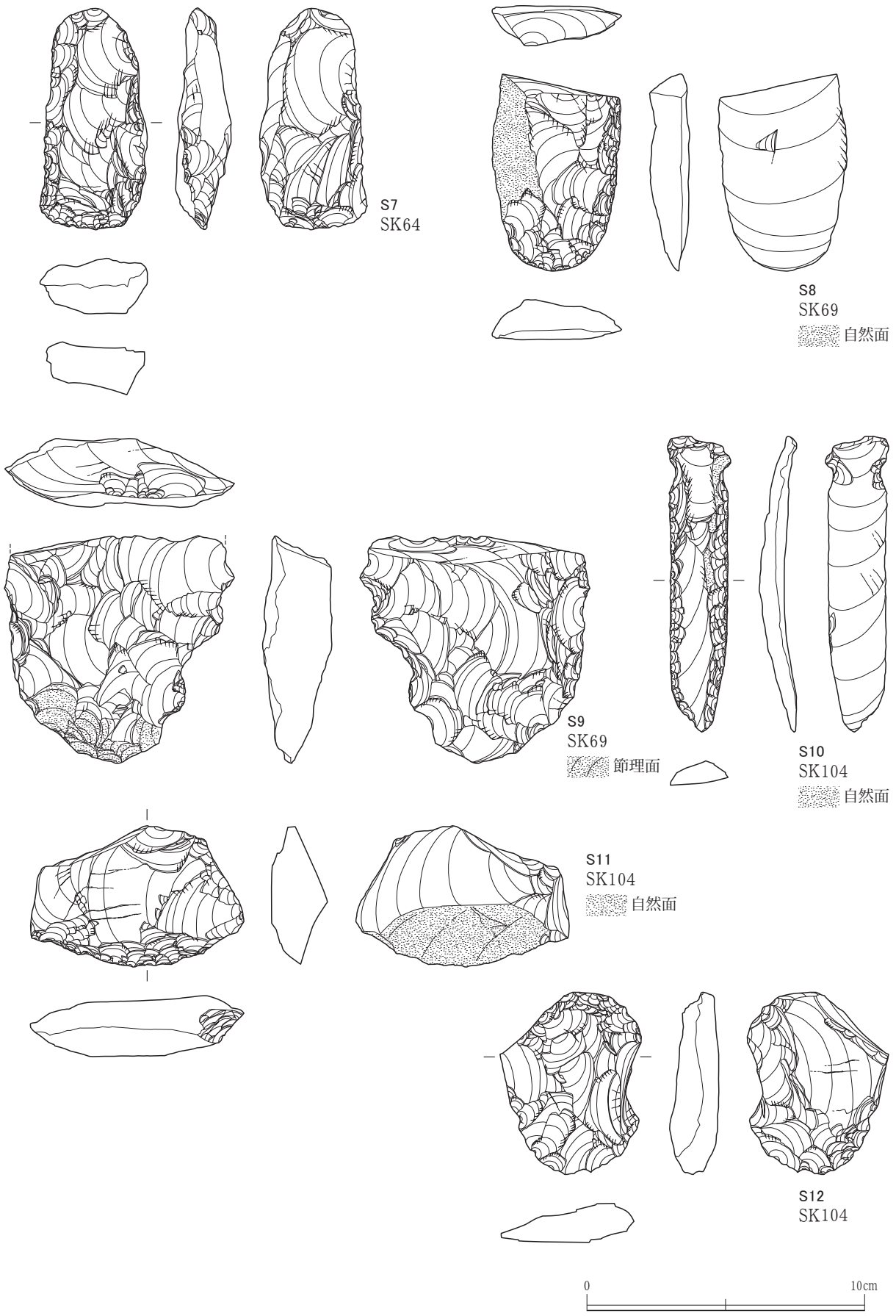
第29図　遺構内出土土器（６）



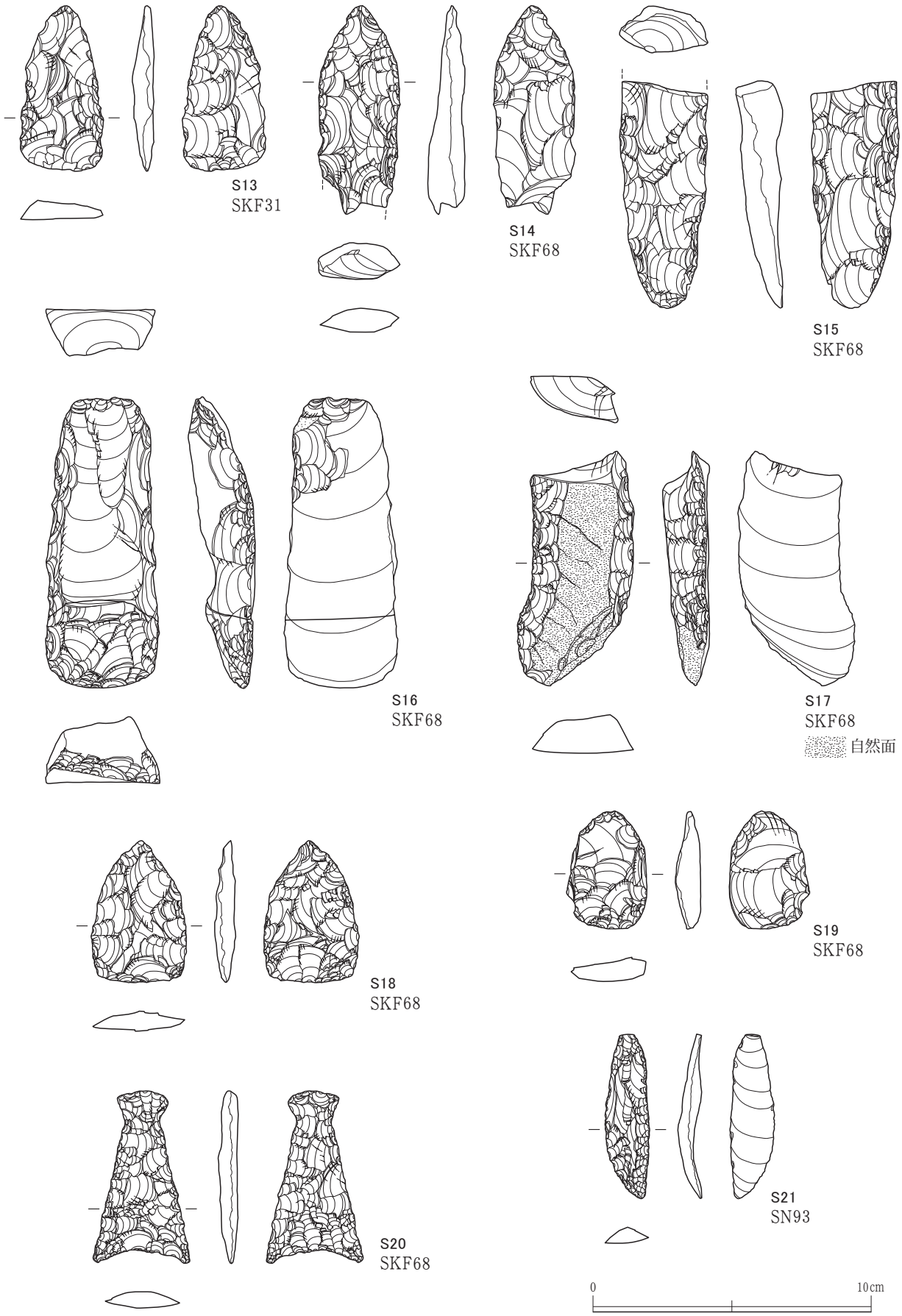
第30図　遺構内出土石器（１）核



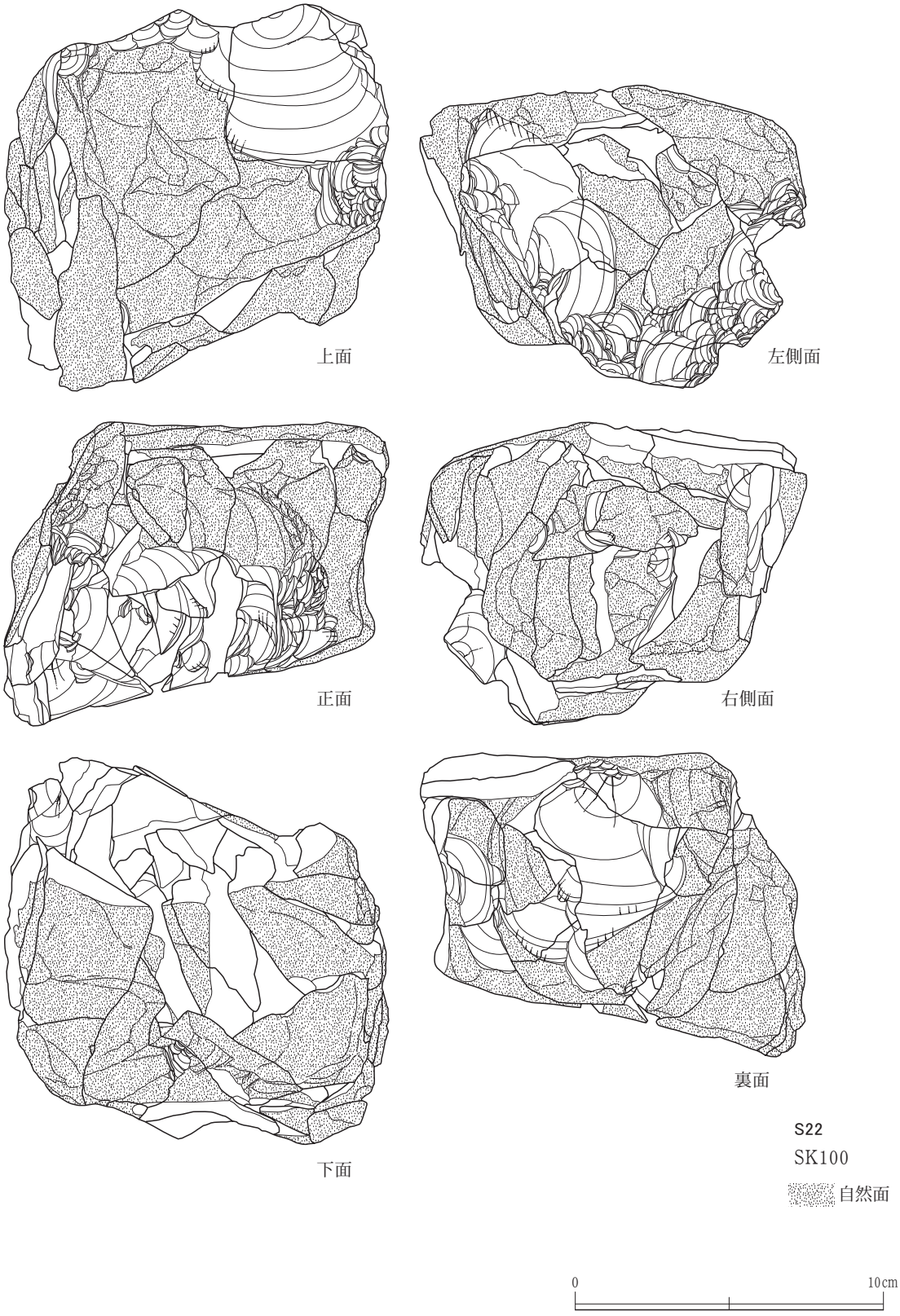
第31図　遺構内出土石器（２）剥



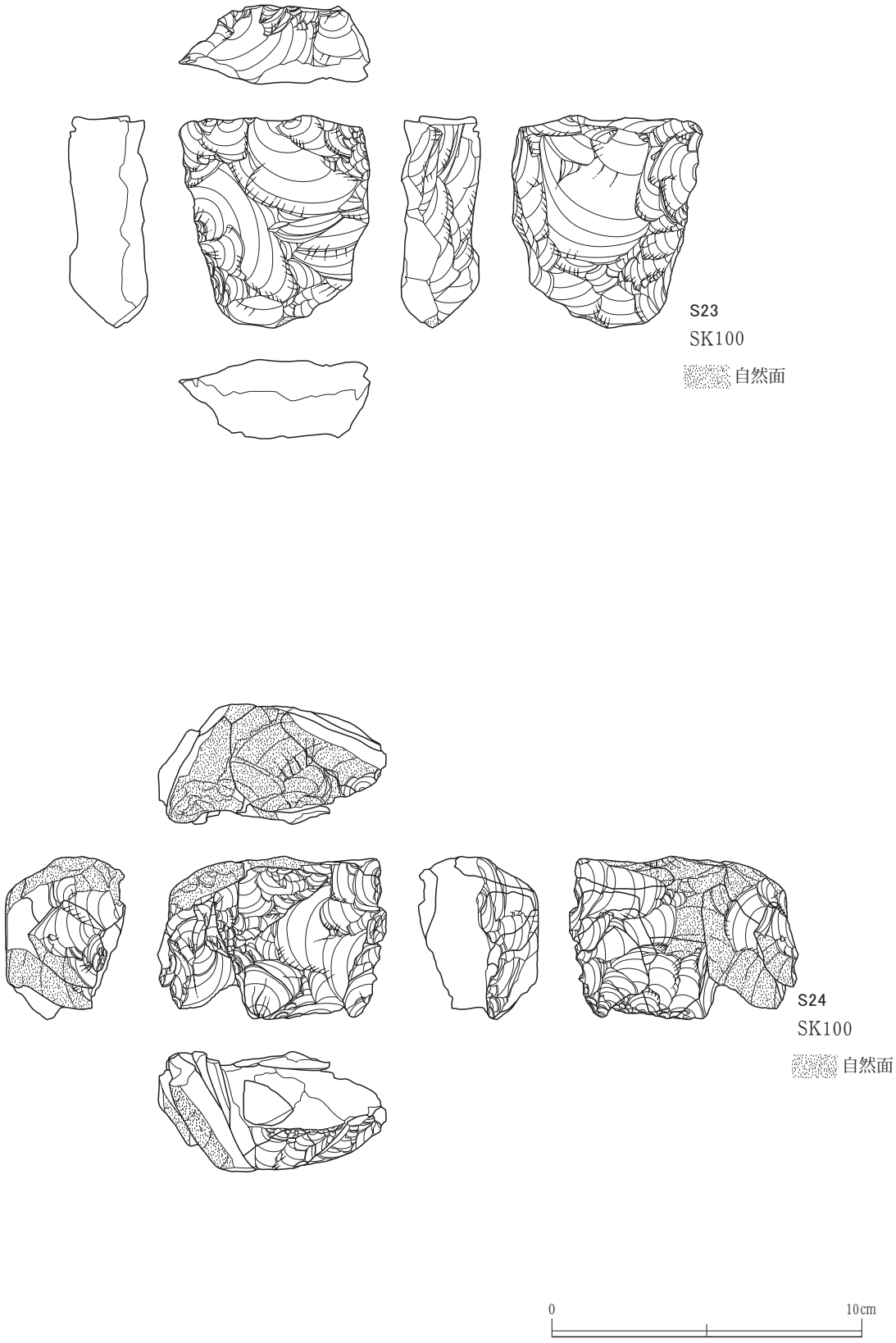
第32図　遺構内出土石器（３）剥・他



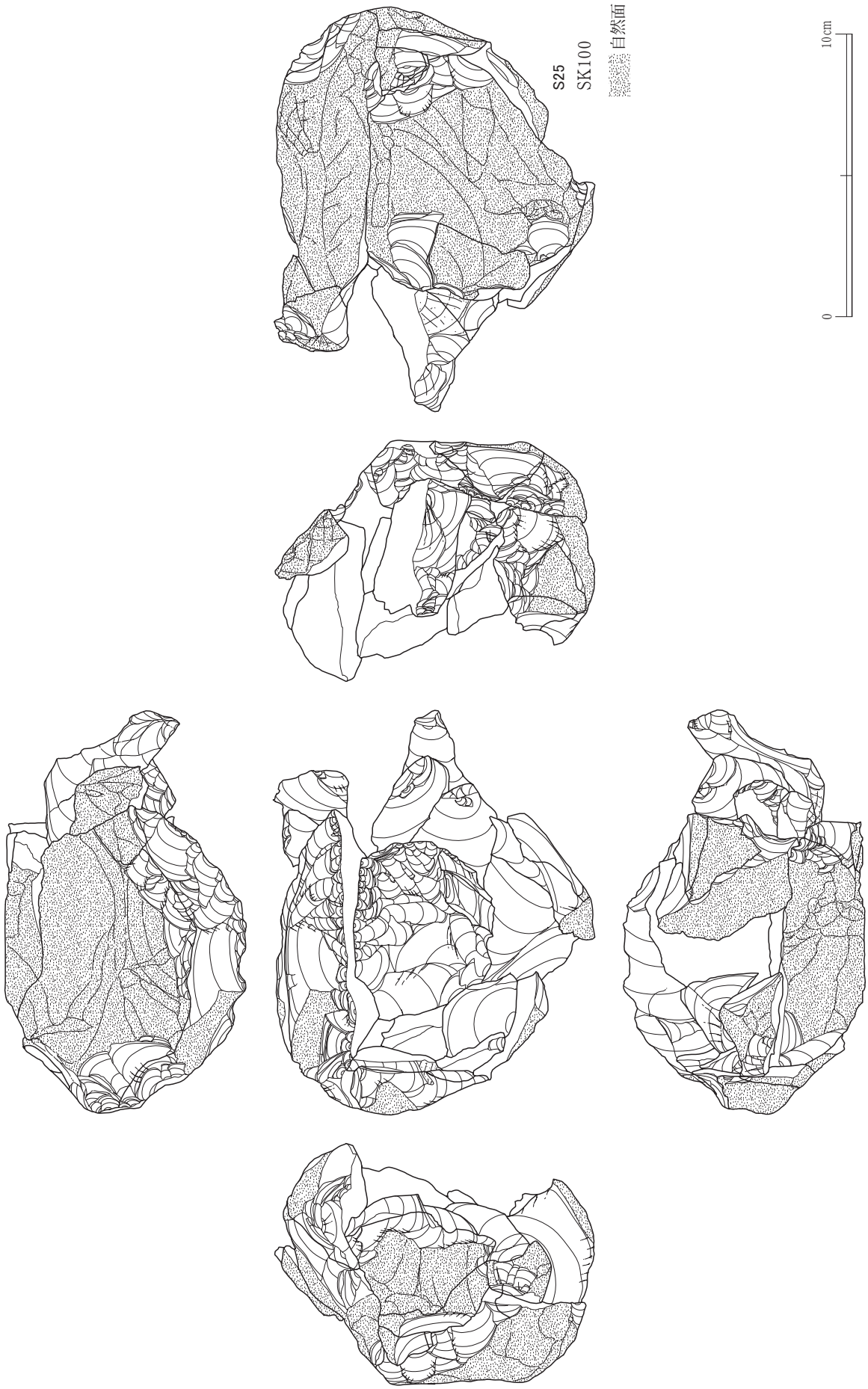
第33図　遺構内出土石器（４）剥・他



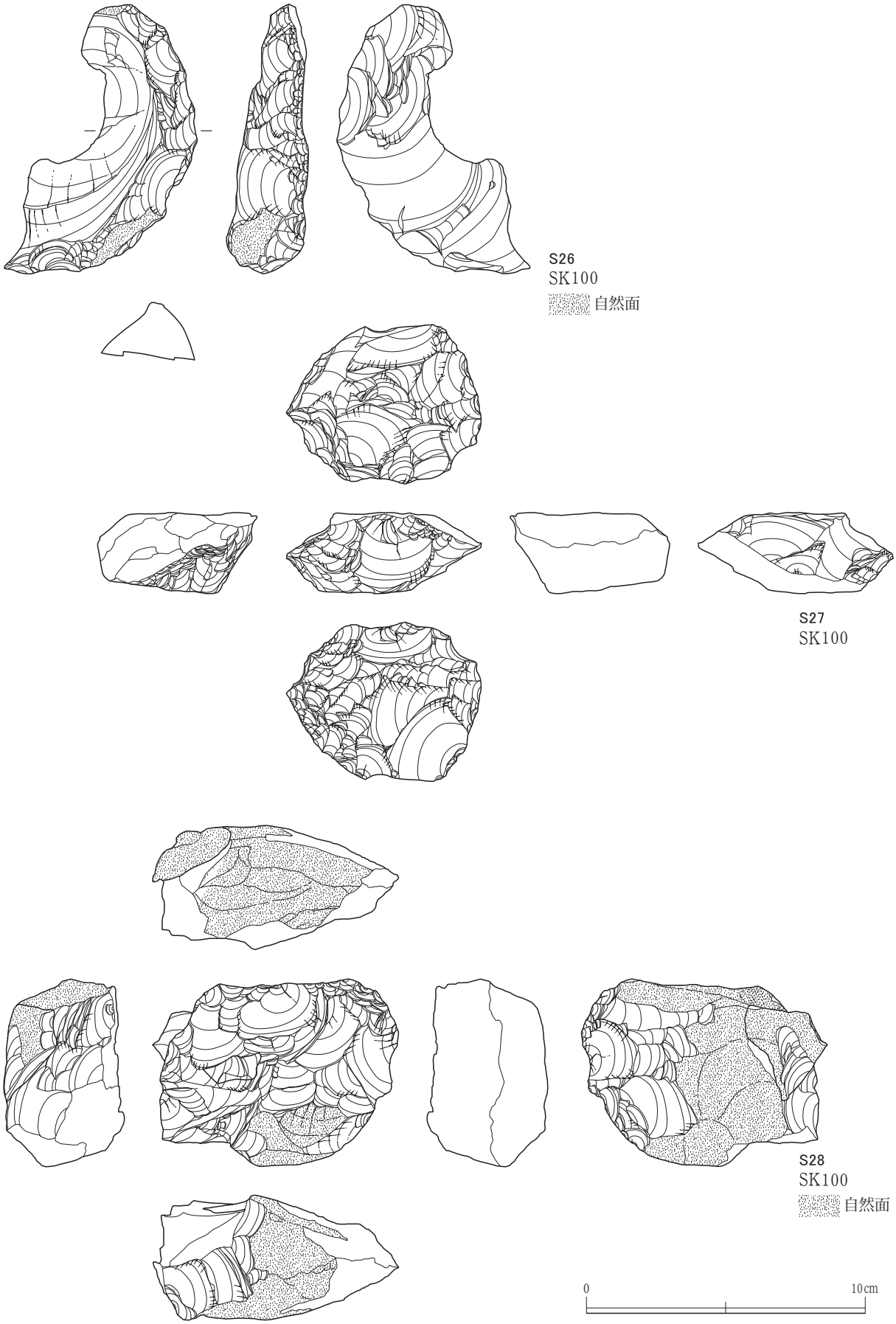
第34図　遺構内出土石器（５）接



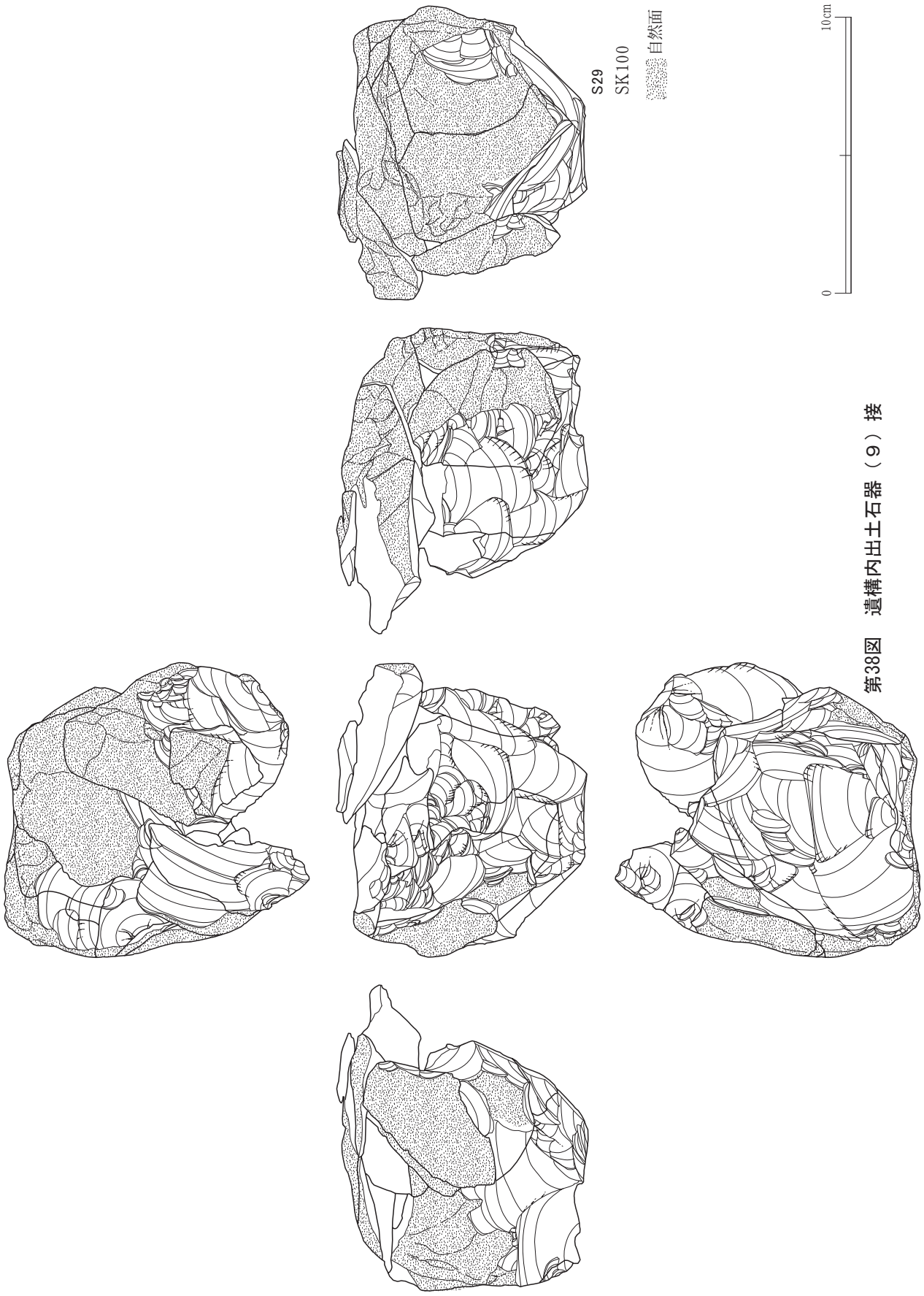
第35図　遺構内出土石器（６）核・接



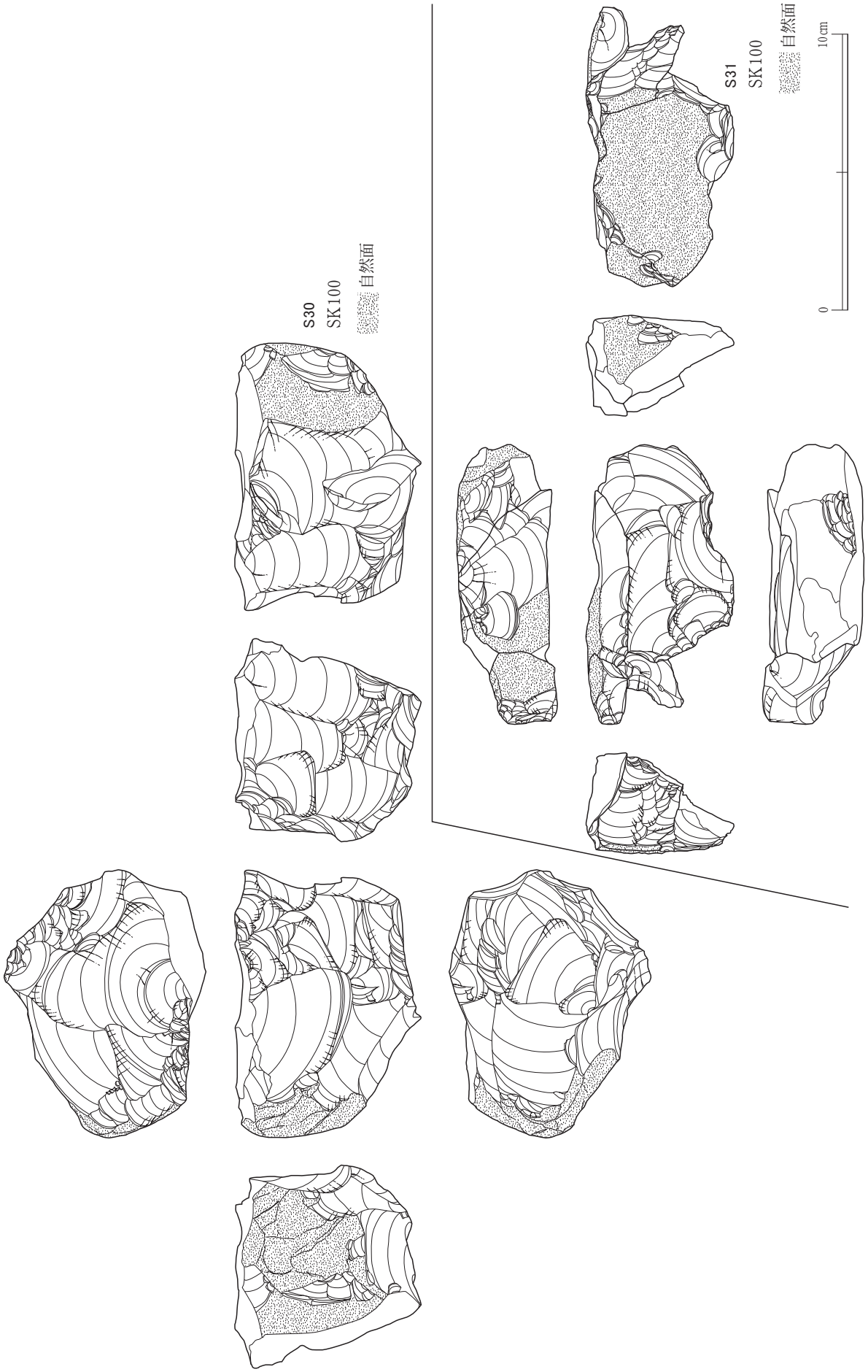
第36図　遺構内出土石器（７）接



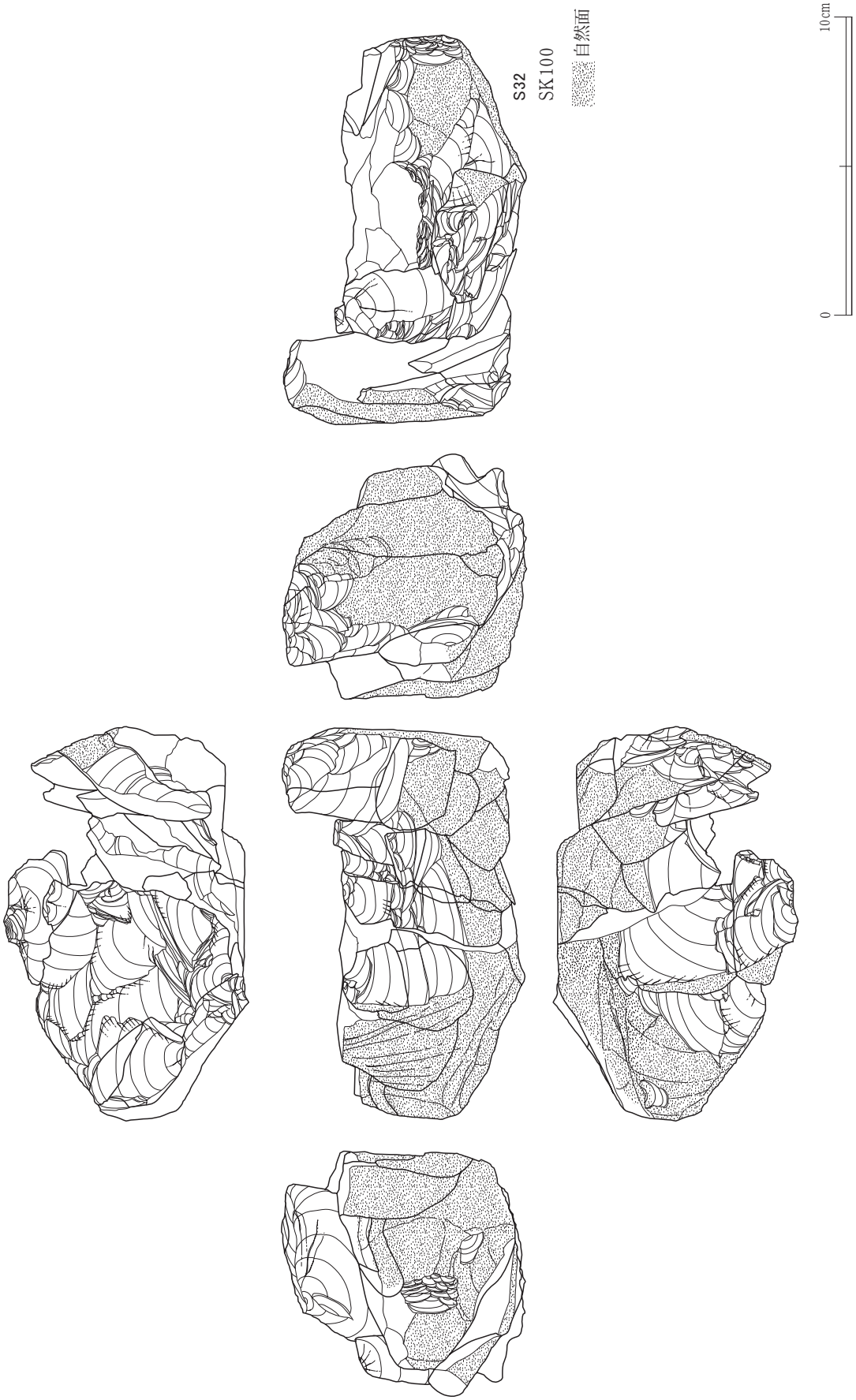
第37図　遺構内出土石器（８）剥・核・接



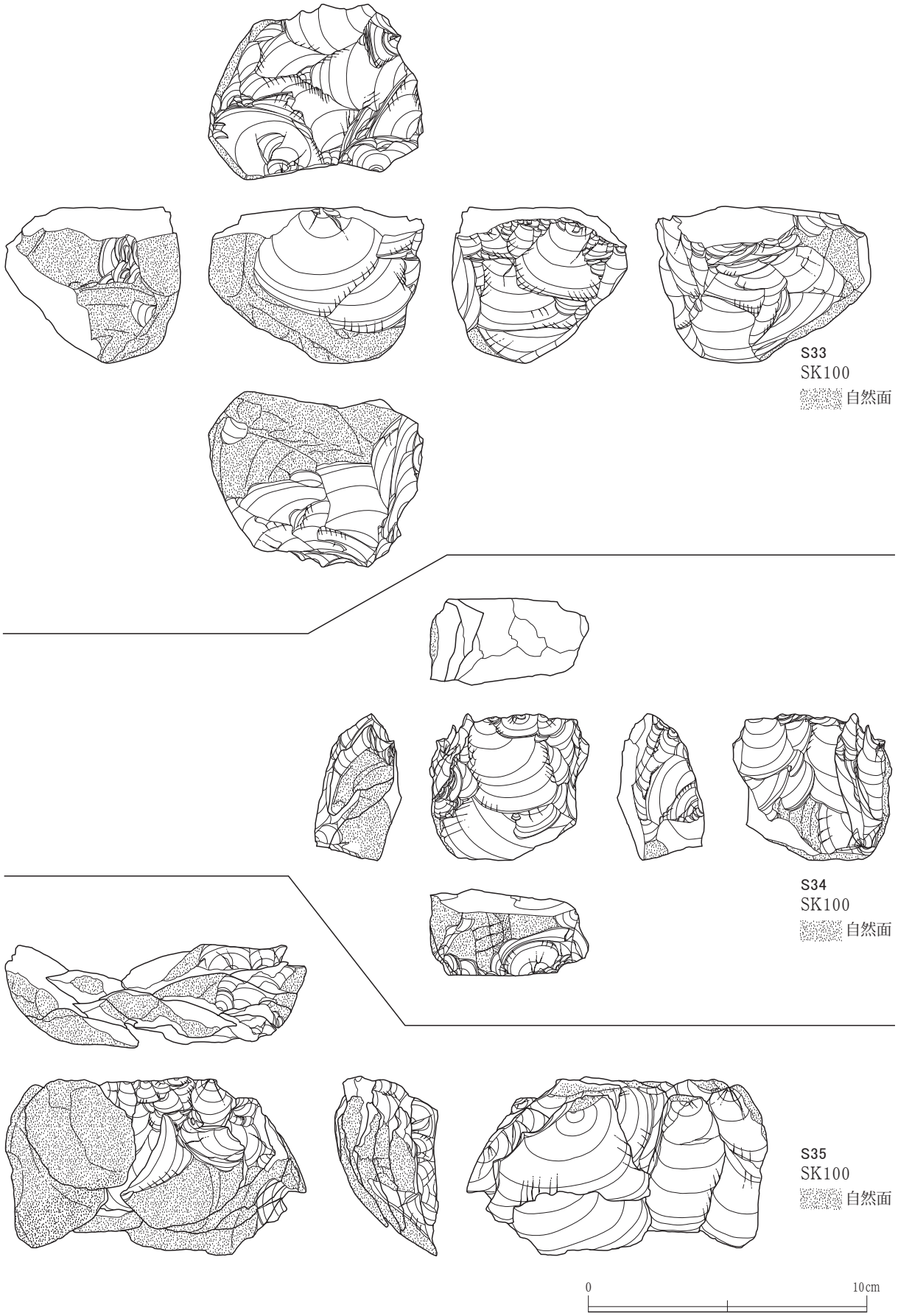
第38図　遺構内出土石器（９）接



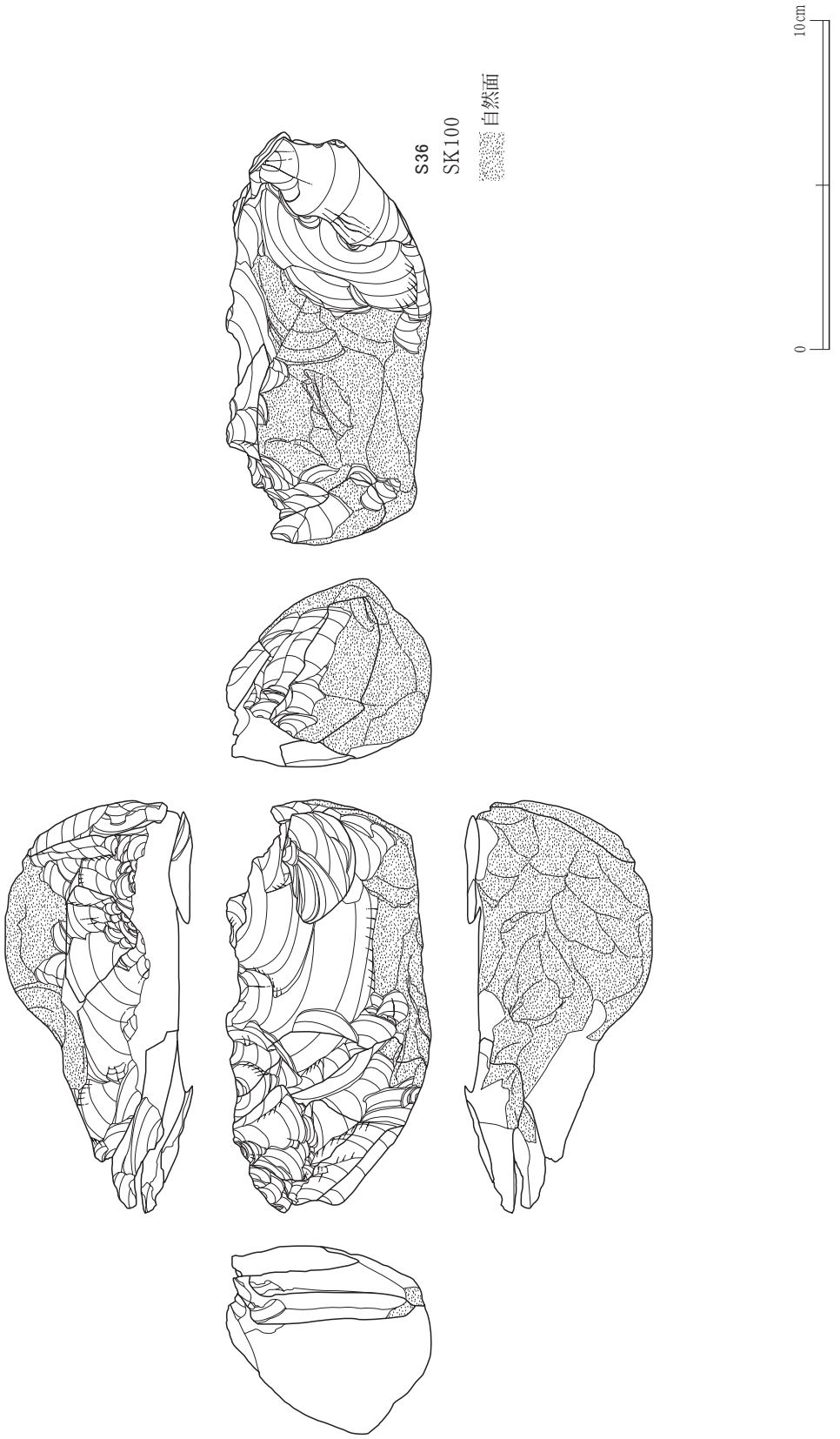
第39図　遺構内出土石器（10）核・接



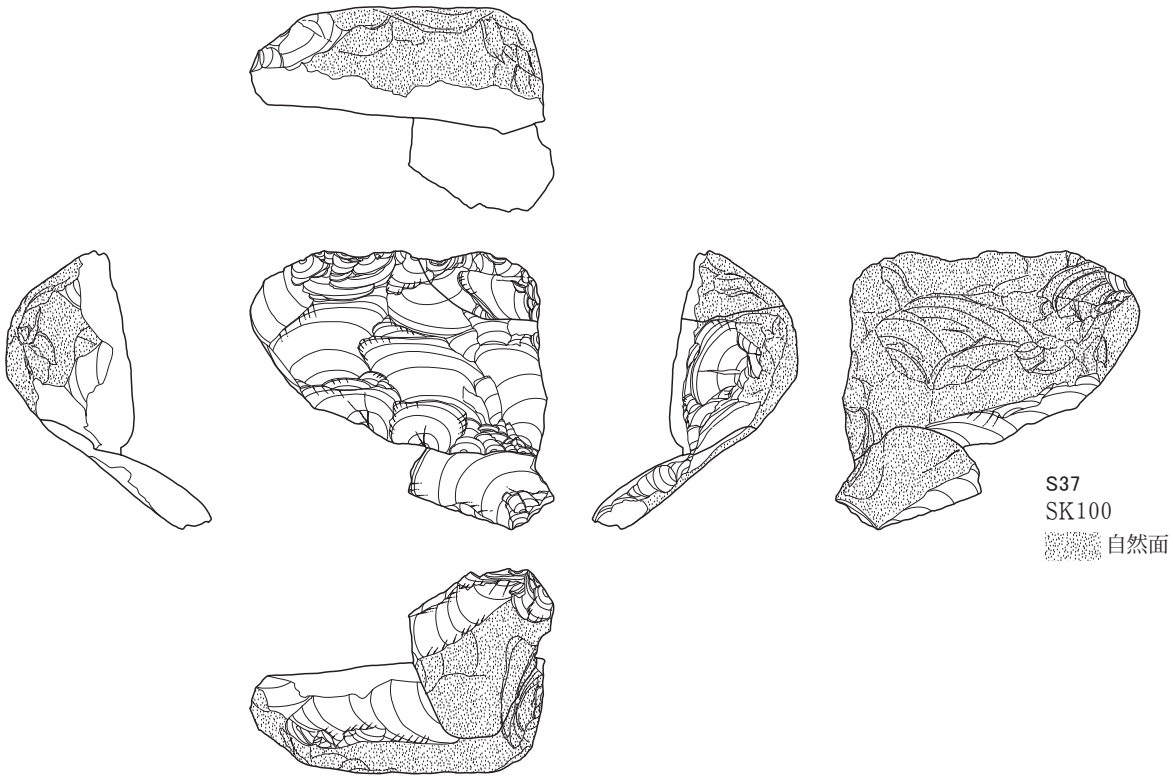
第40図　遺構内出土石器（11）接

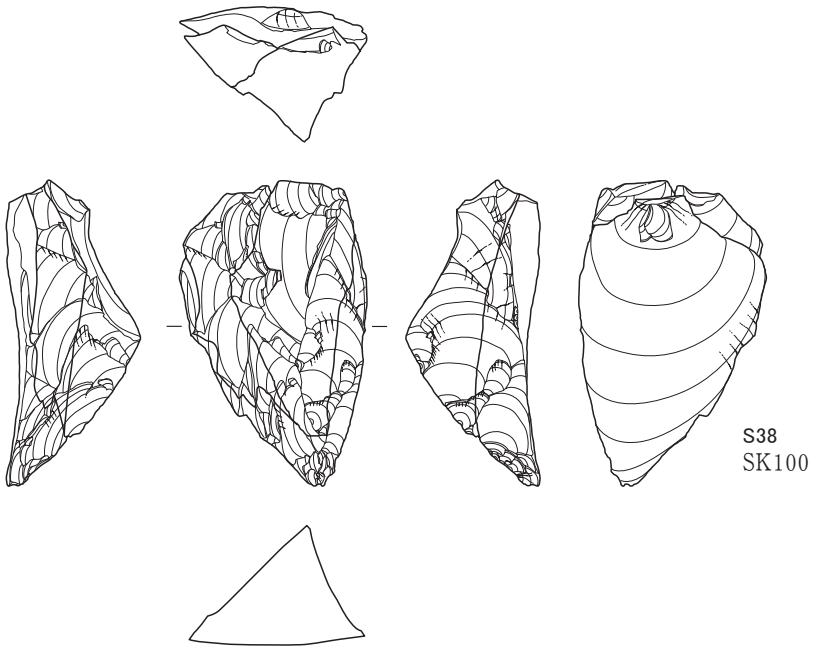


第41図　遺構内出土石器（12）核・接

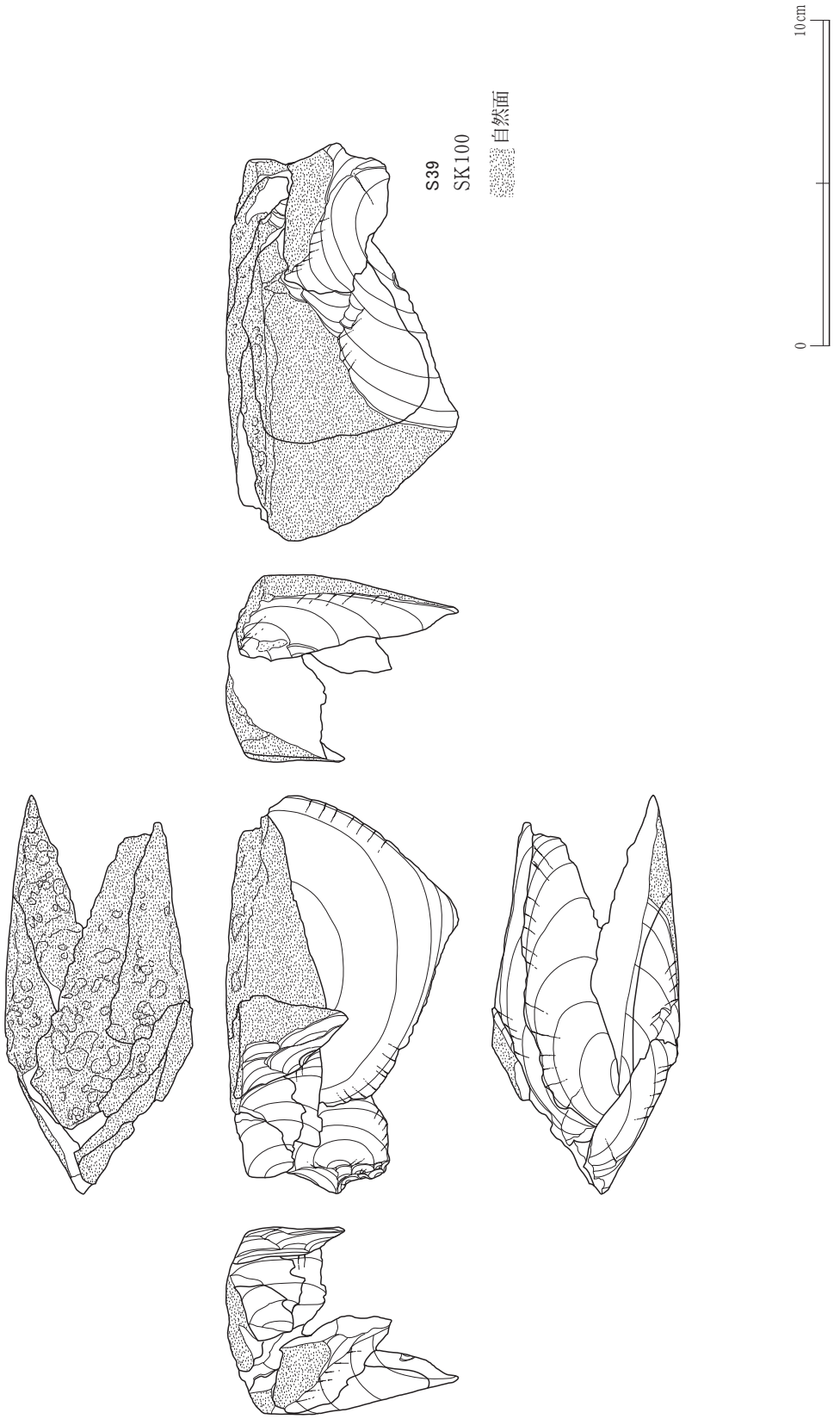


第42図　遺構内出土石器（13）接

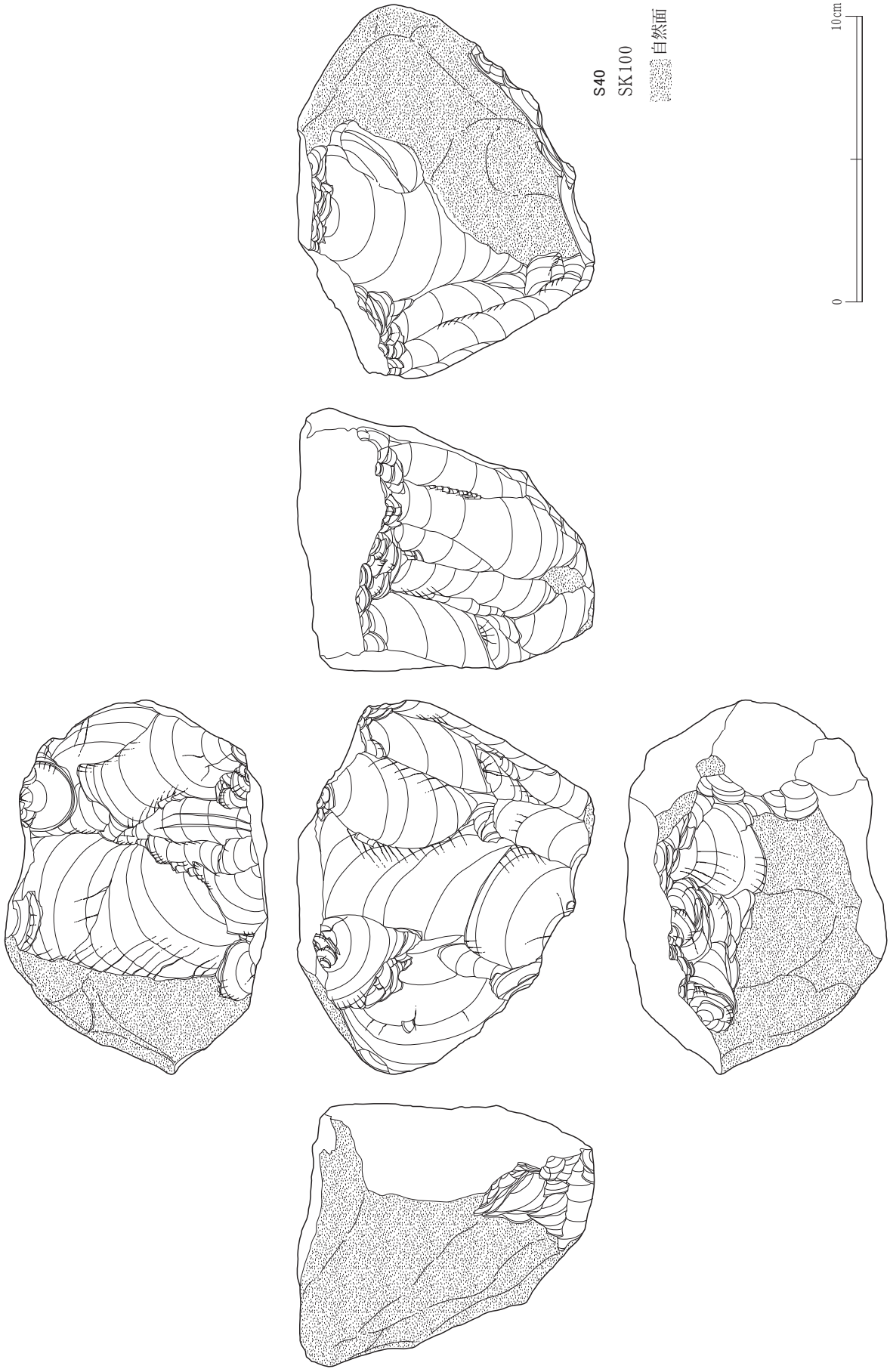




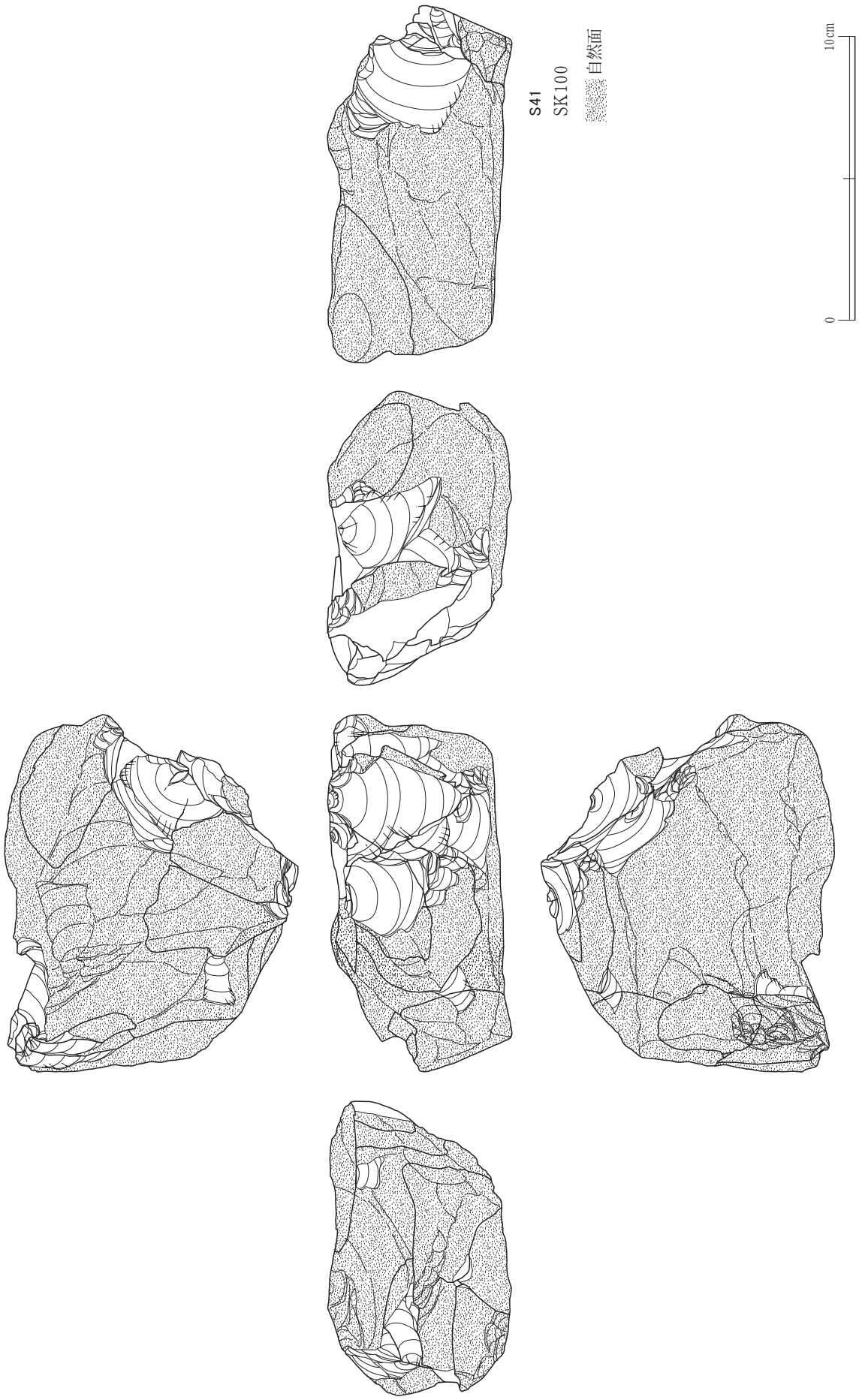
第43図　遺構内出土石器（14）接



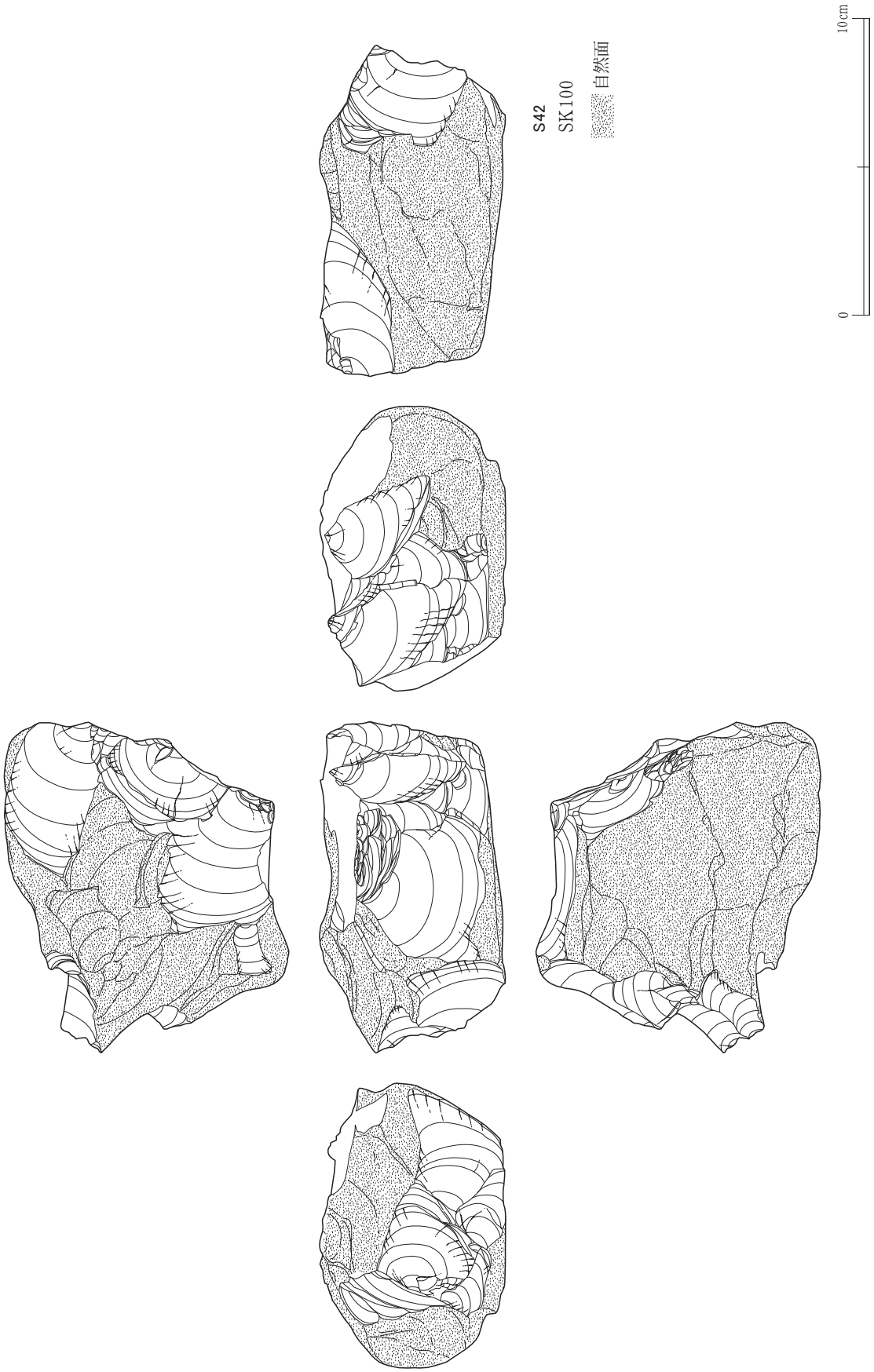
第44図　遺構内出土石器（15）接



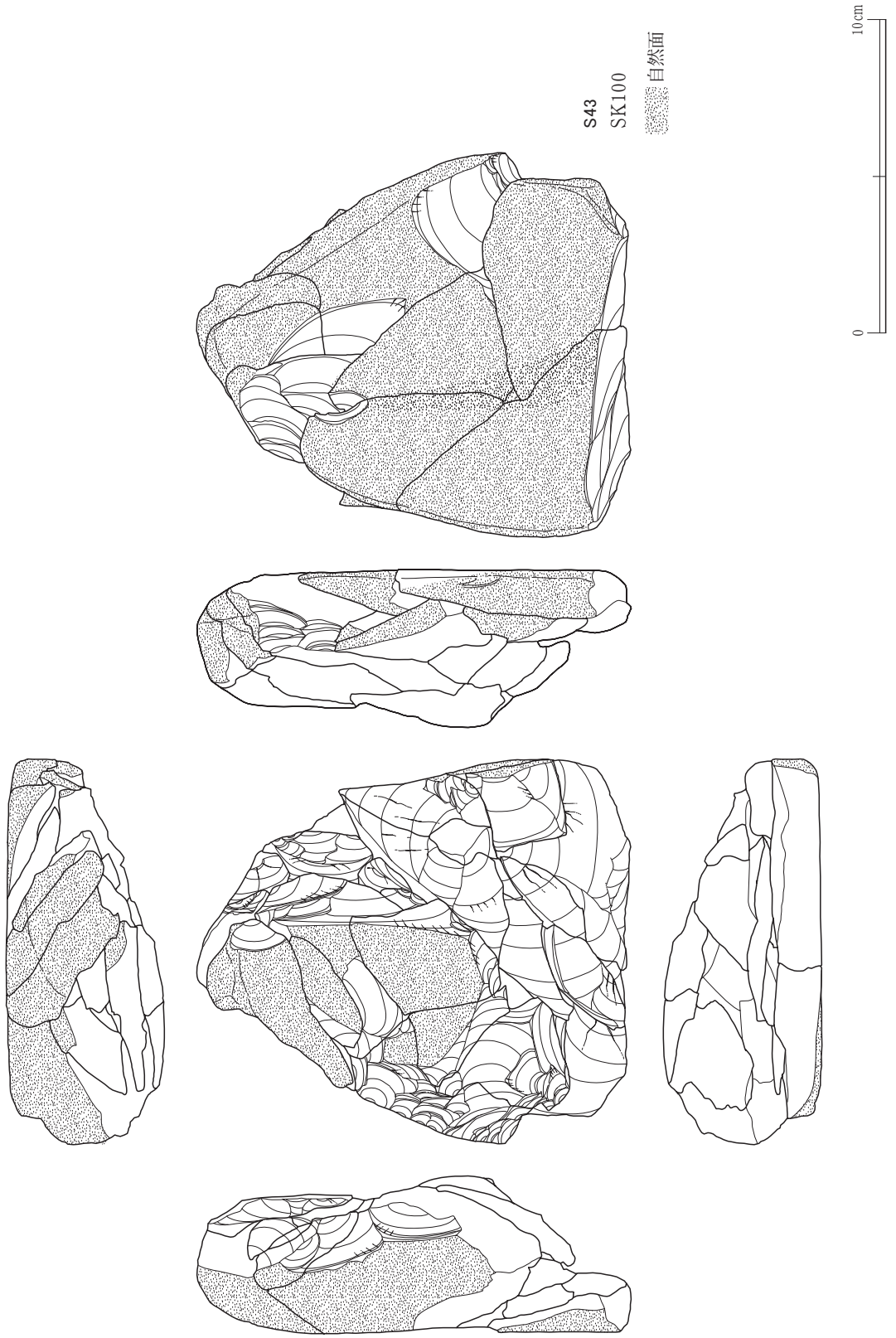
第45図　遺構内出土石器（16）核



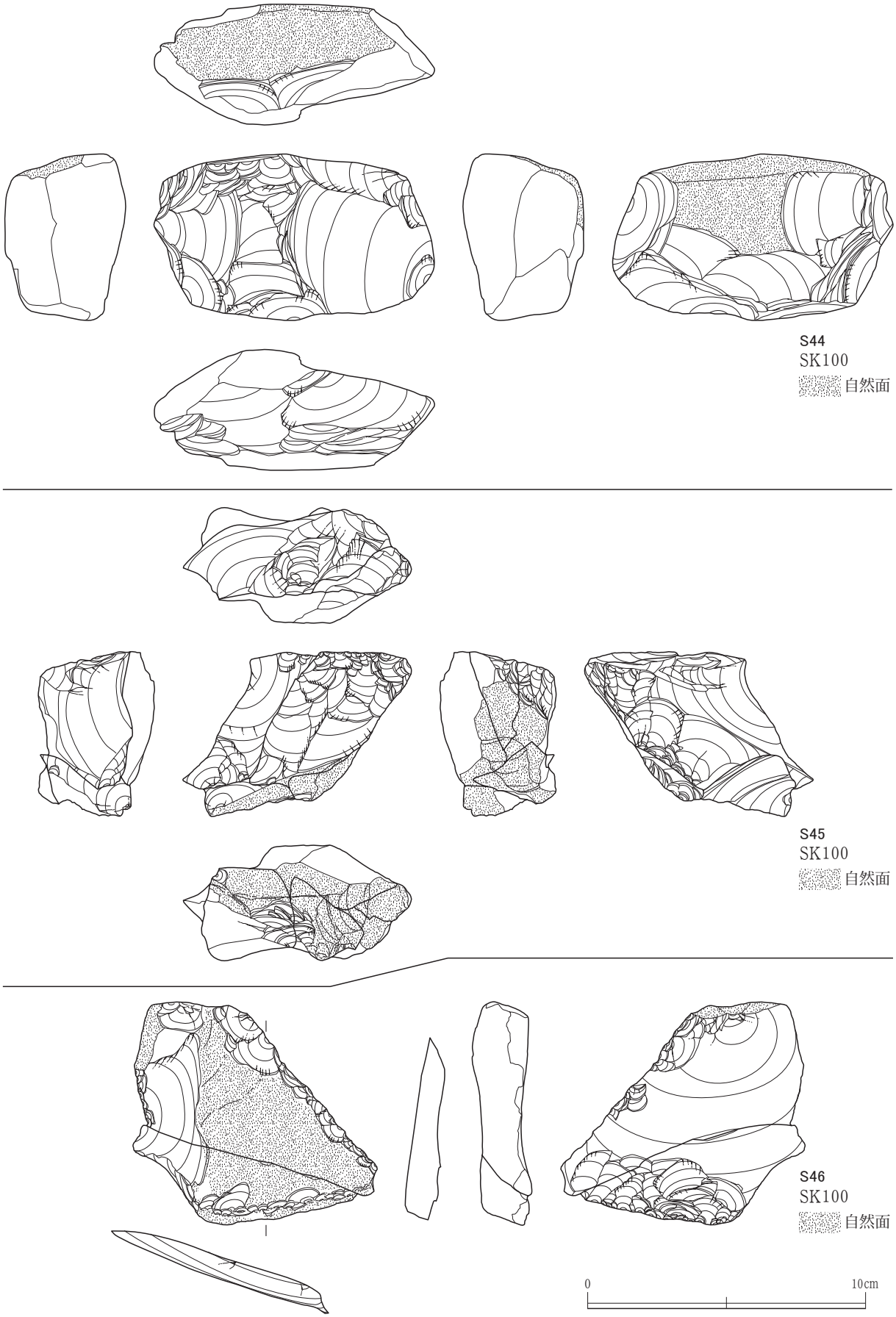
第46図　遺構内出土石器（17）接



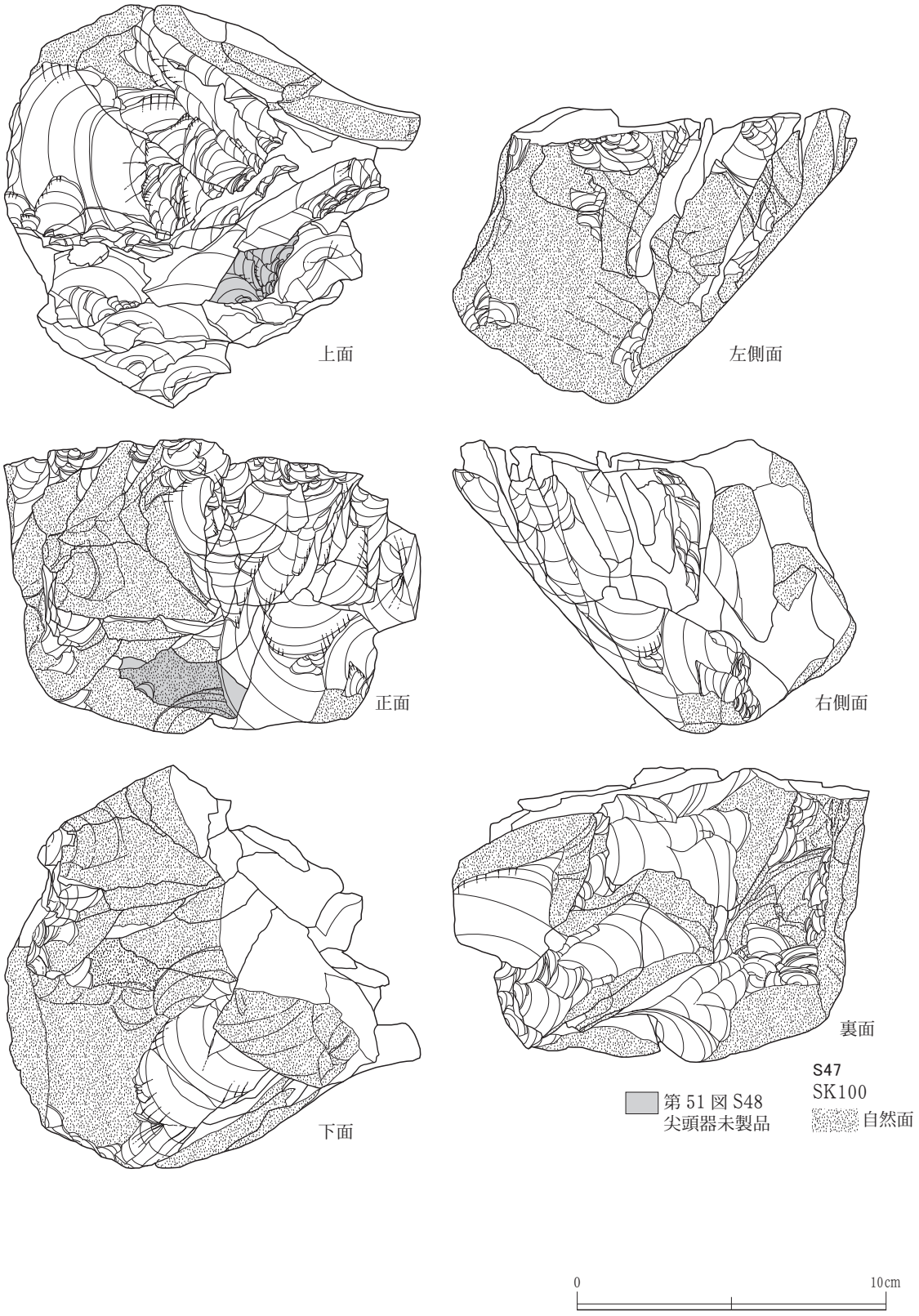
第47図　遺構内出土石器（18）核



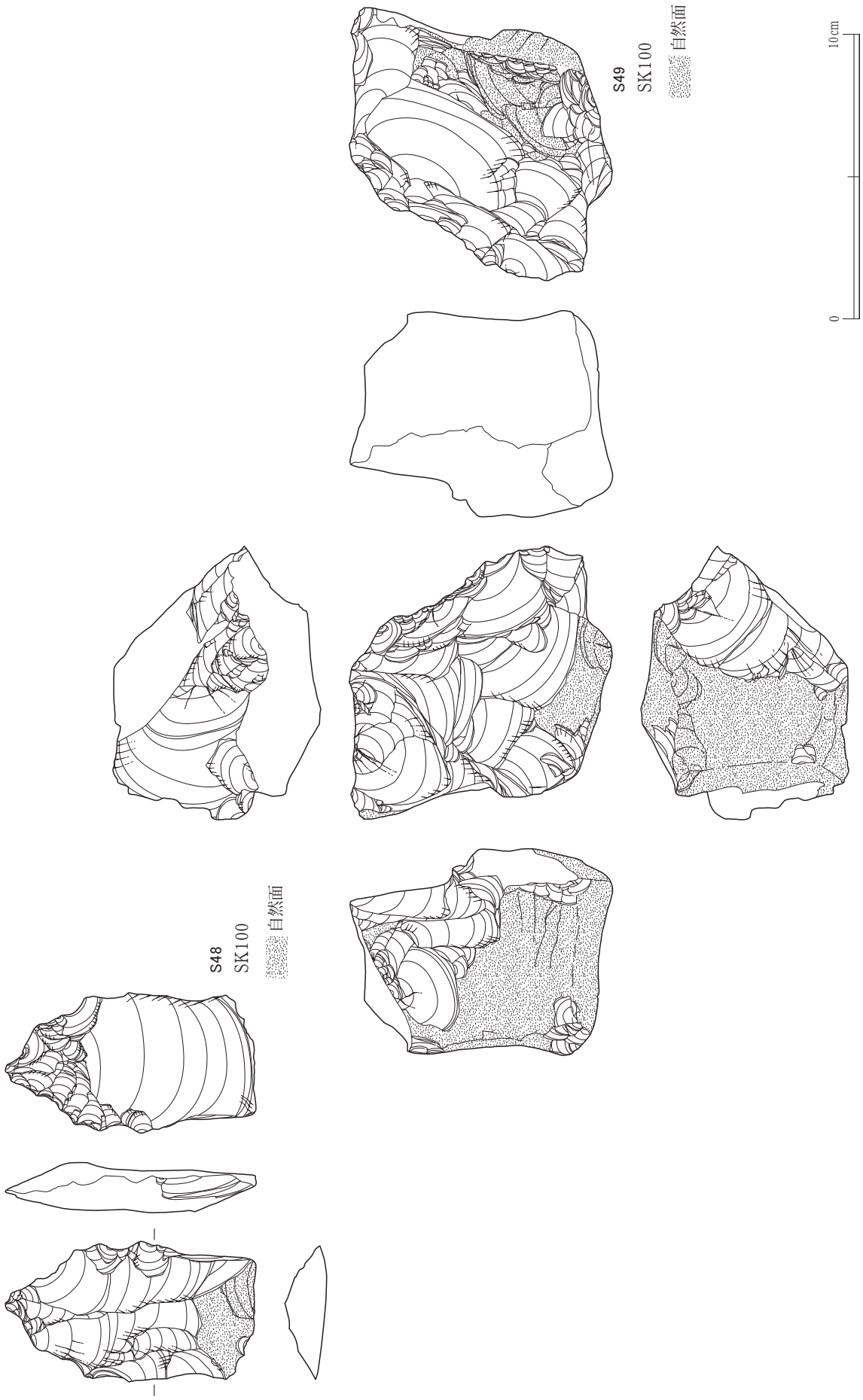
第48図　遺構内出土石器（19）接



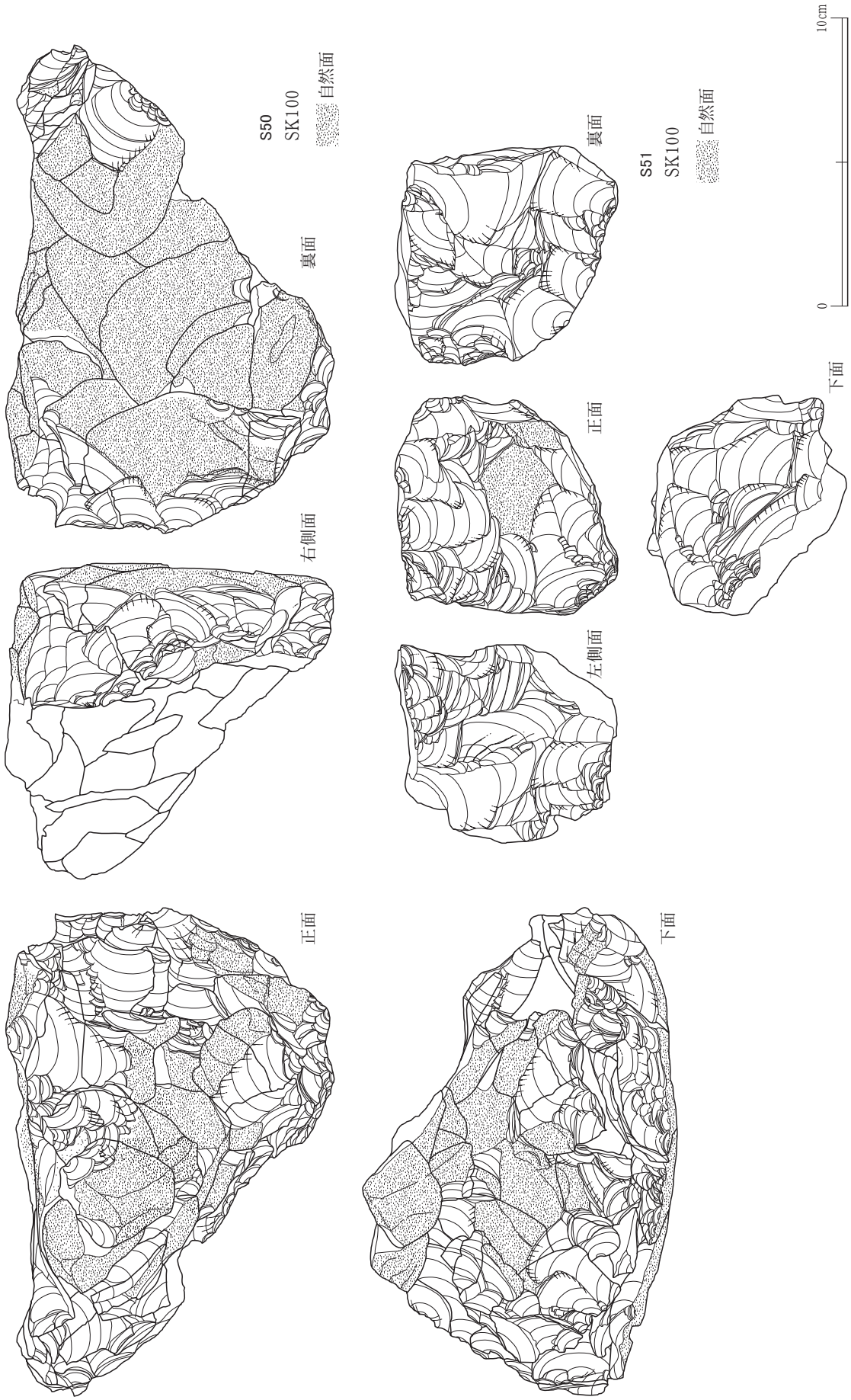
第49図　遺構内出土石器（20）核・接



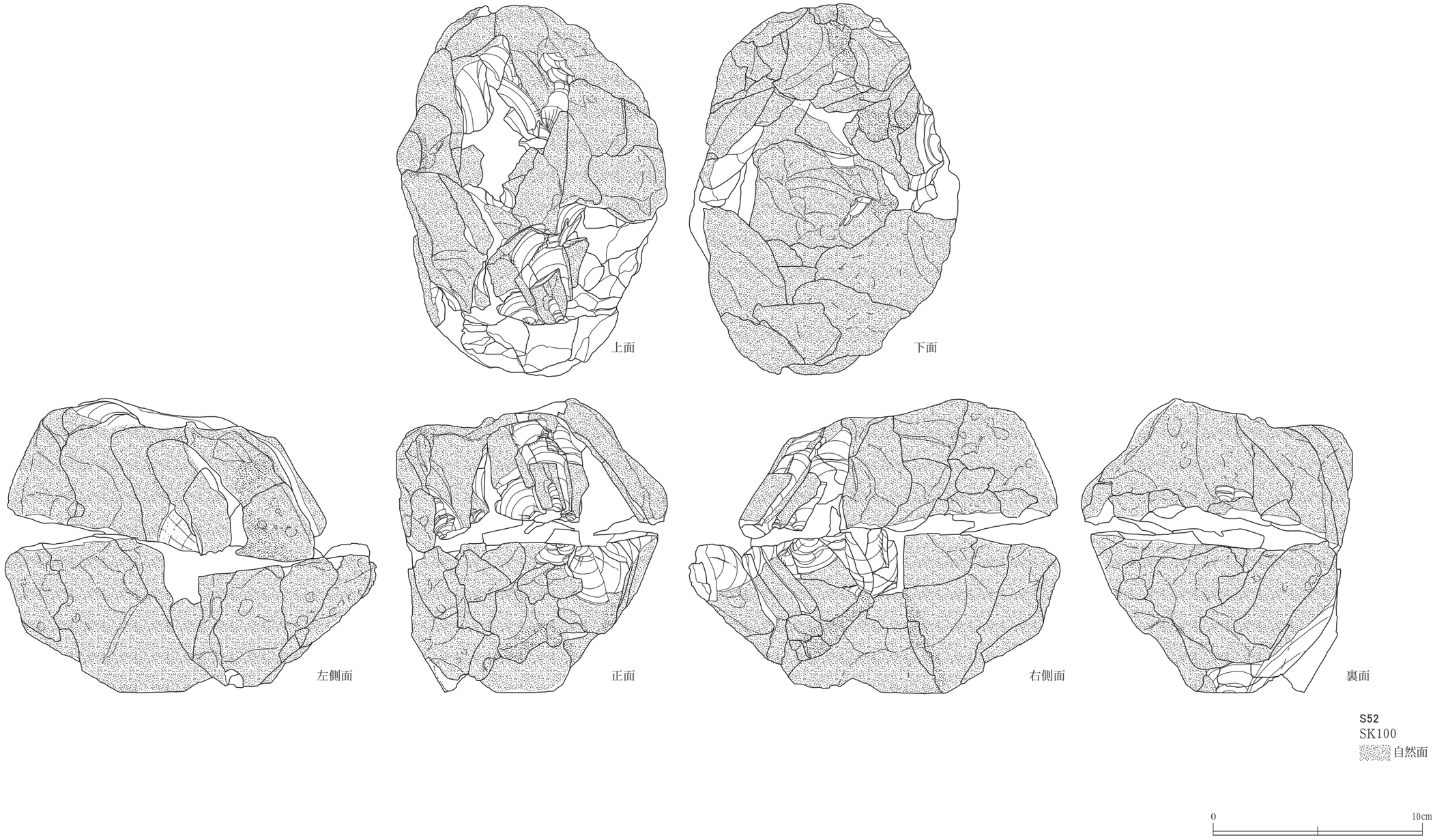
第50図　遺構内出土石器（21）接



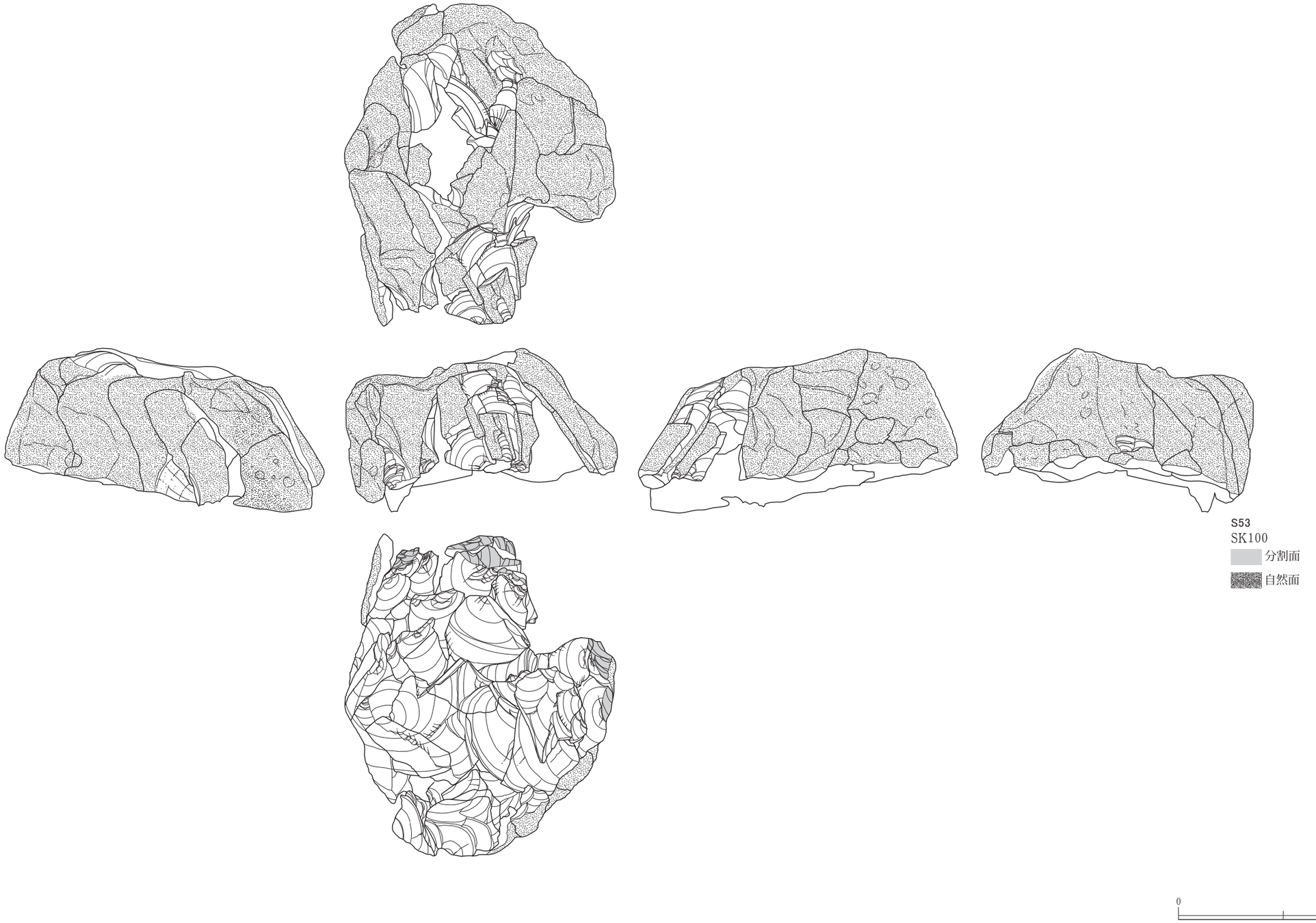
第51図　遺構内出土石器（22）剥・核



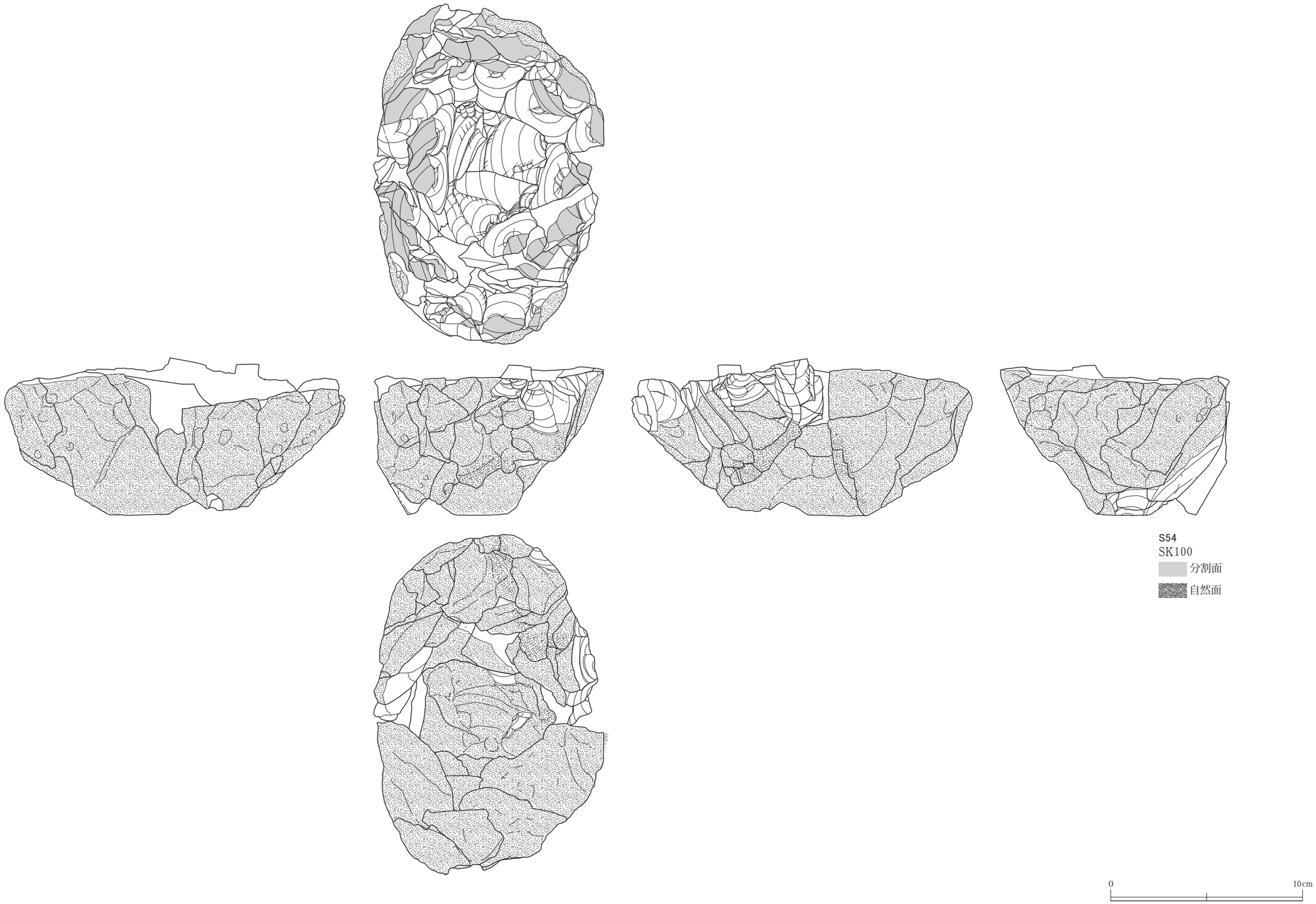
第52図　遺構内出土石器（23）接・核



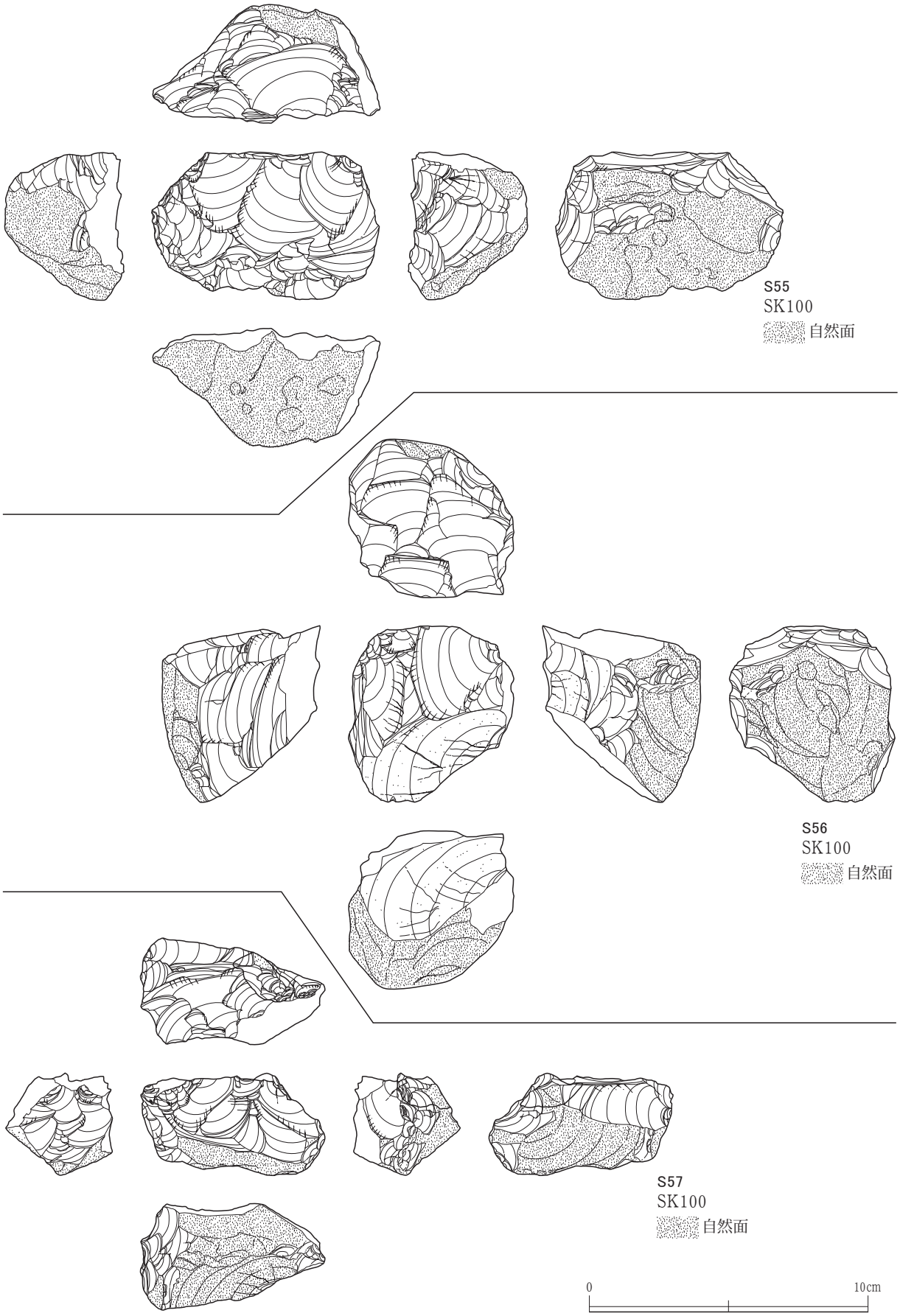
第53図　遺構内出土石器（24）接



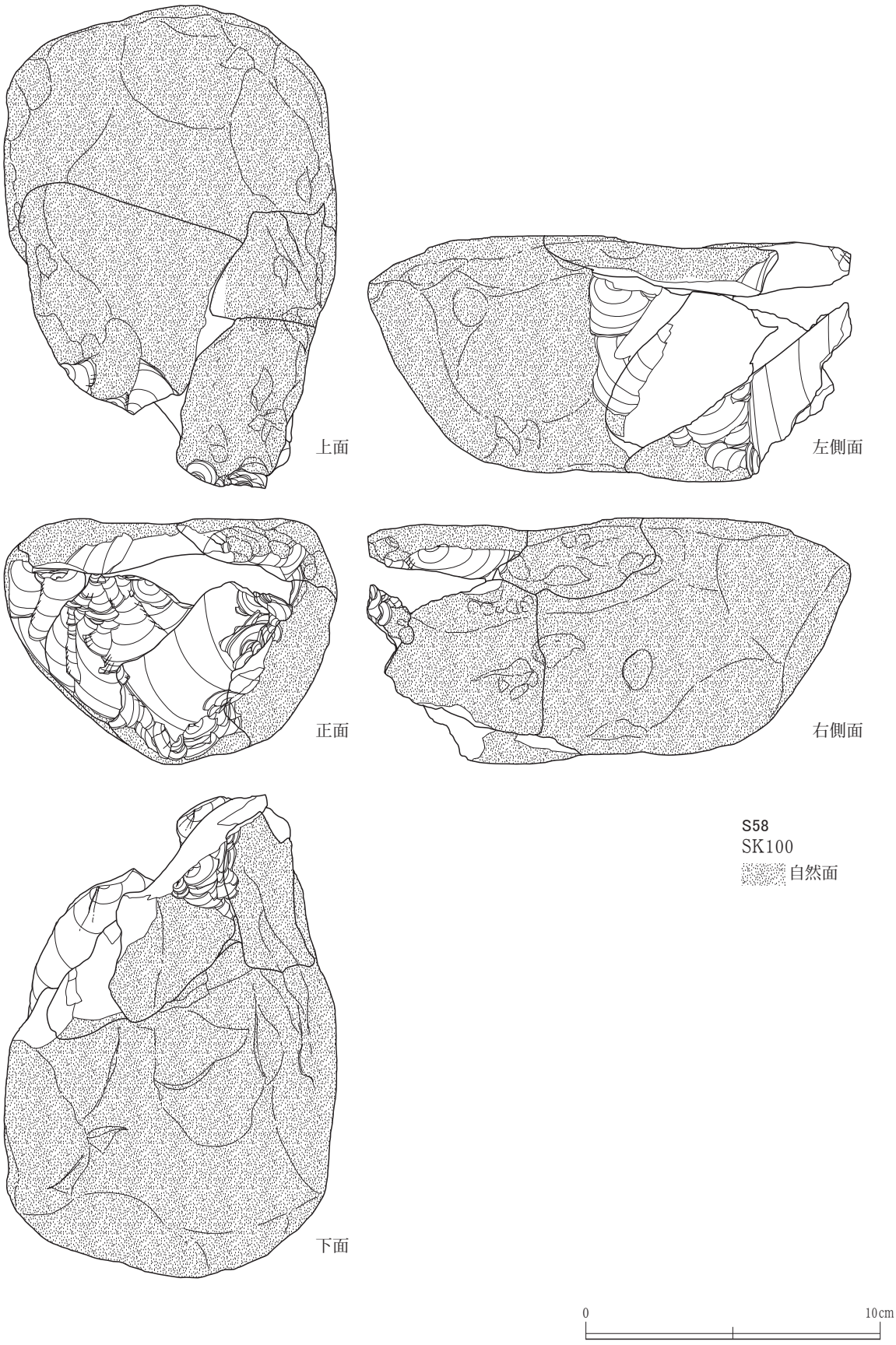
第54図　遺構内出土石器（25）接



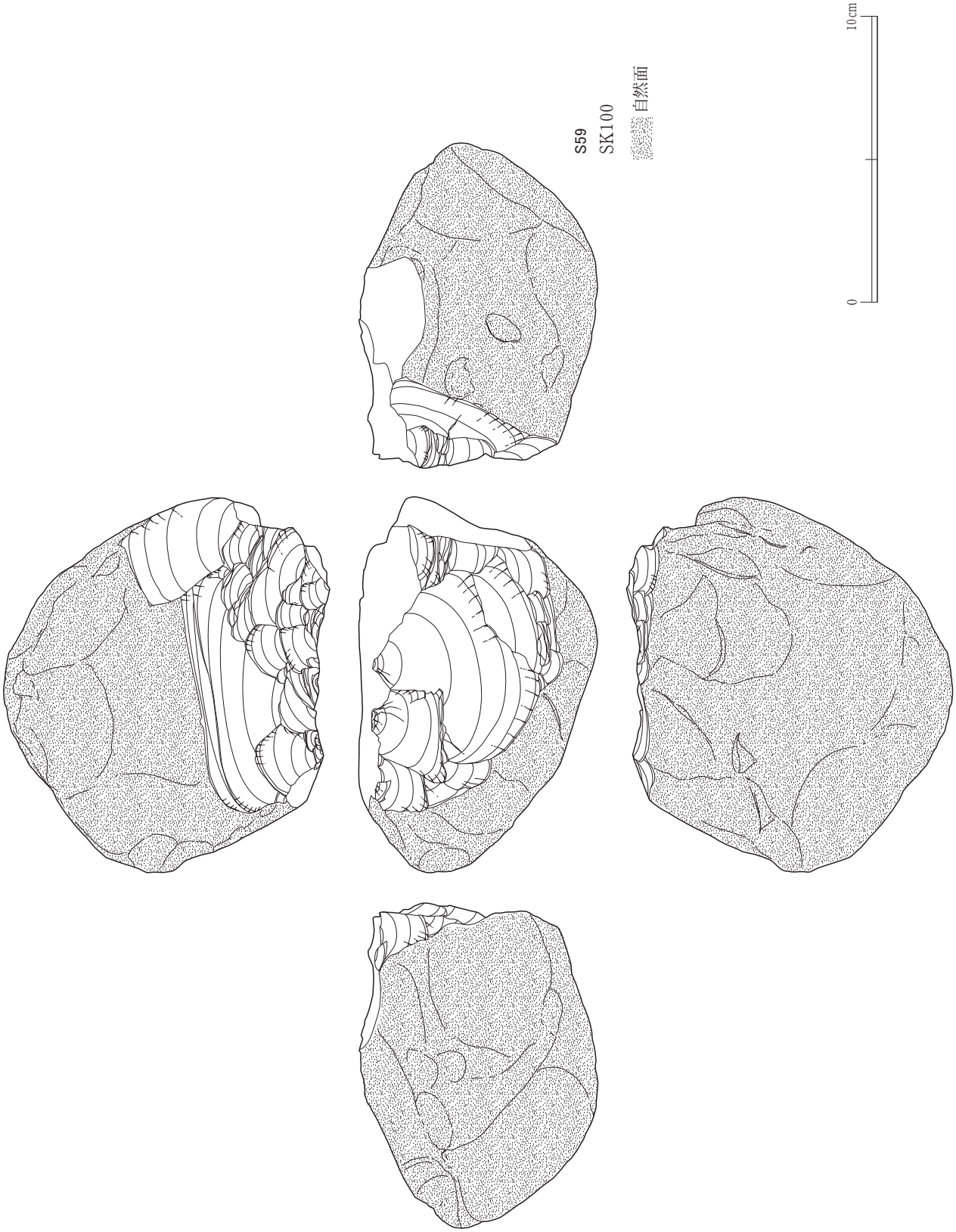
第55図　遺構内出土石器（26）接



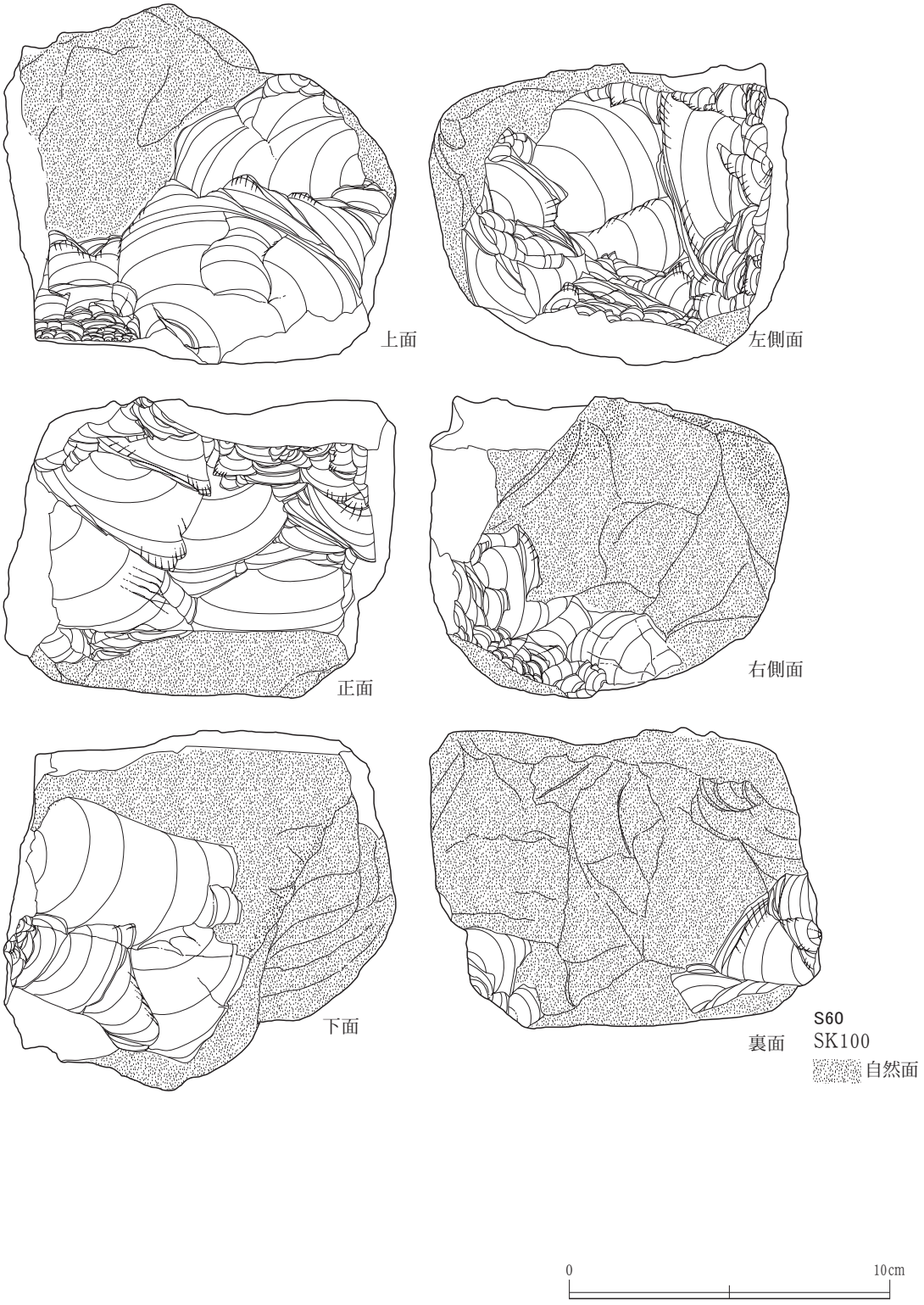
第56図　遺構内出土石器（27）核・接



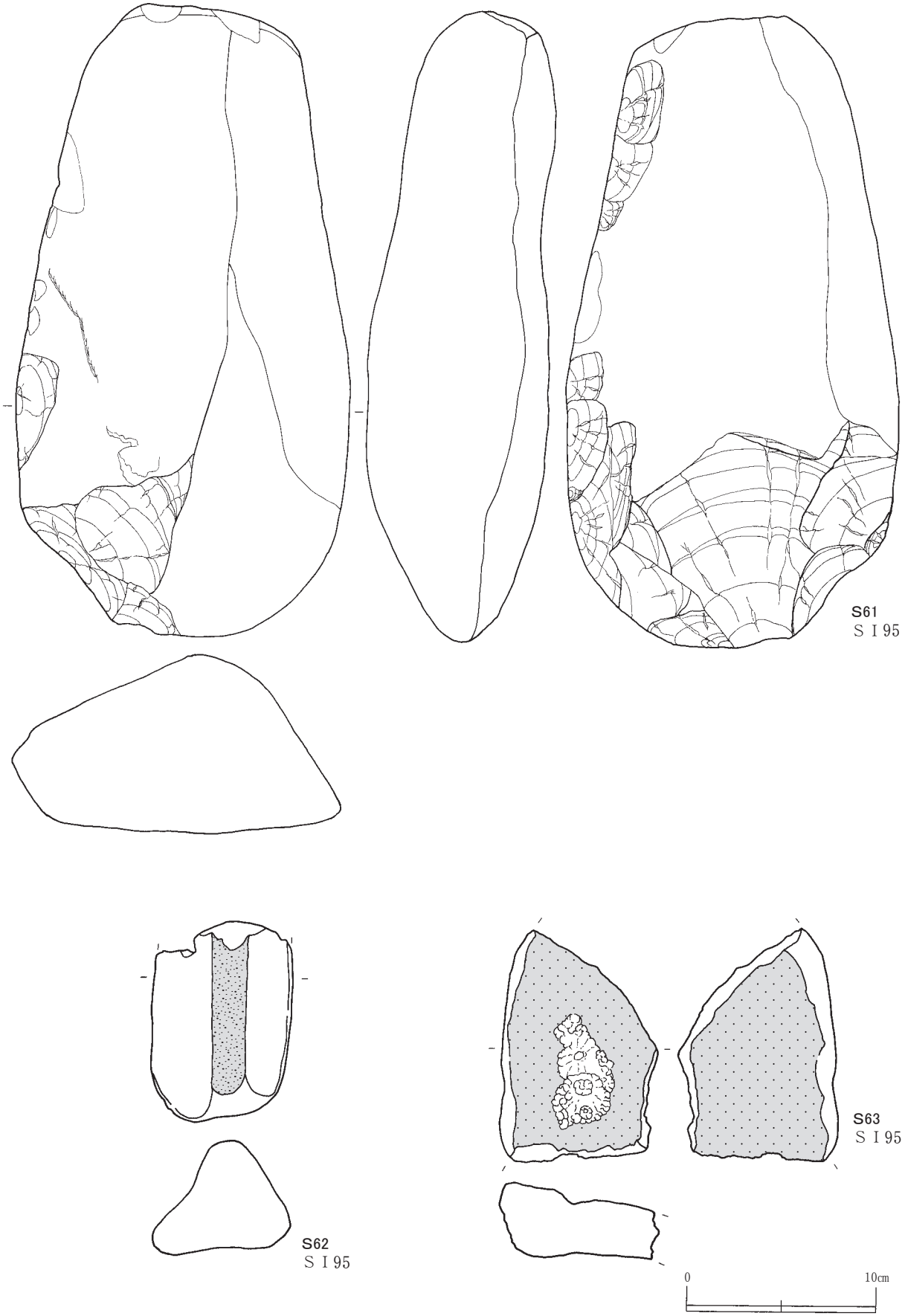
第57図　遺構内出土石器（28）接



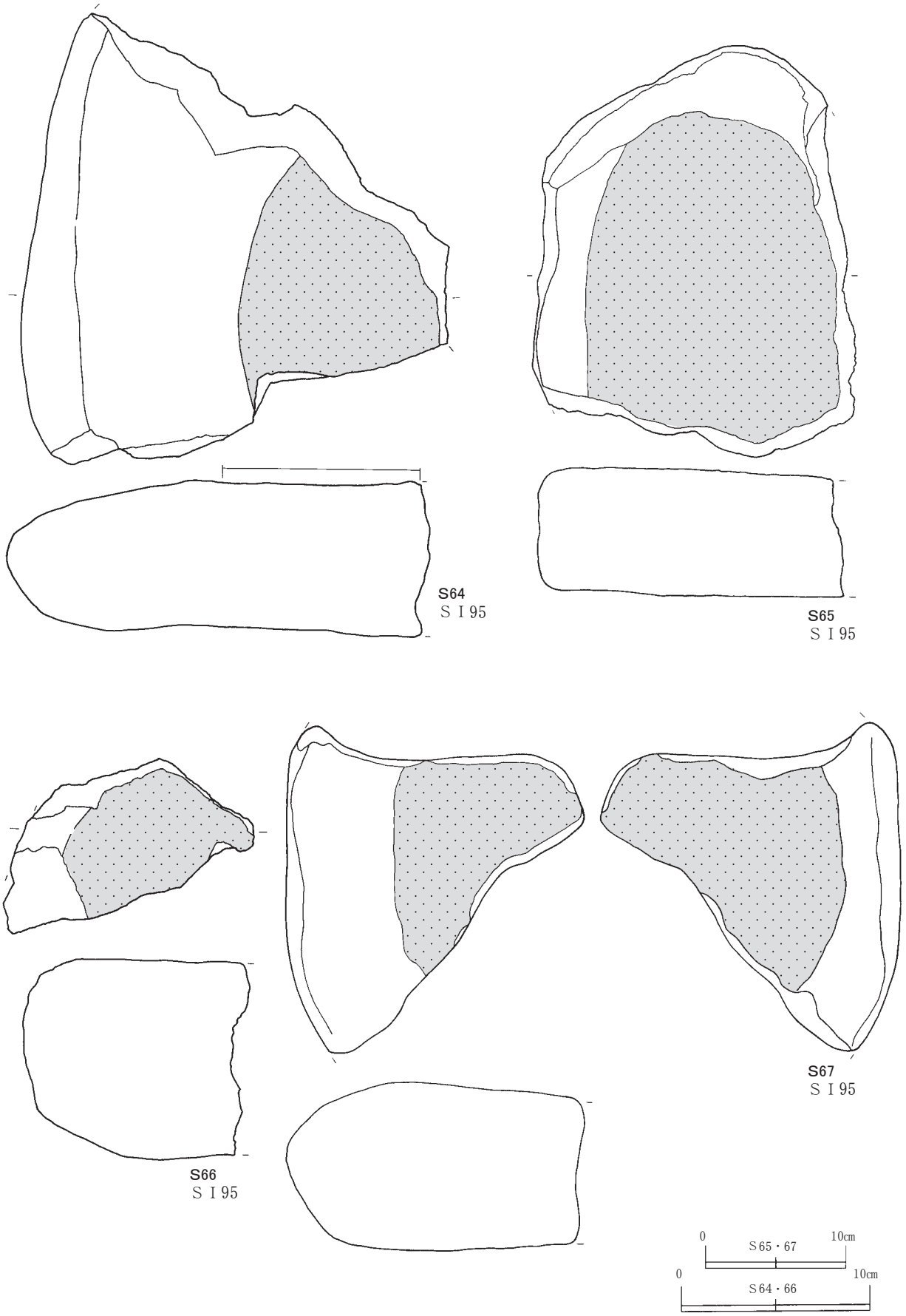
第58図　遺構内出土石器（29）核



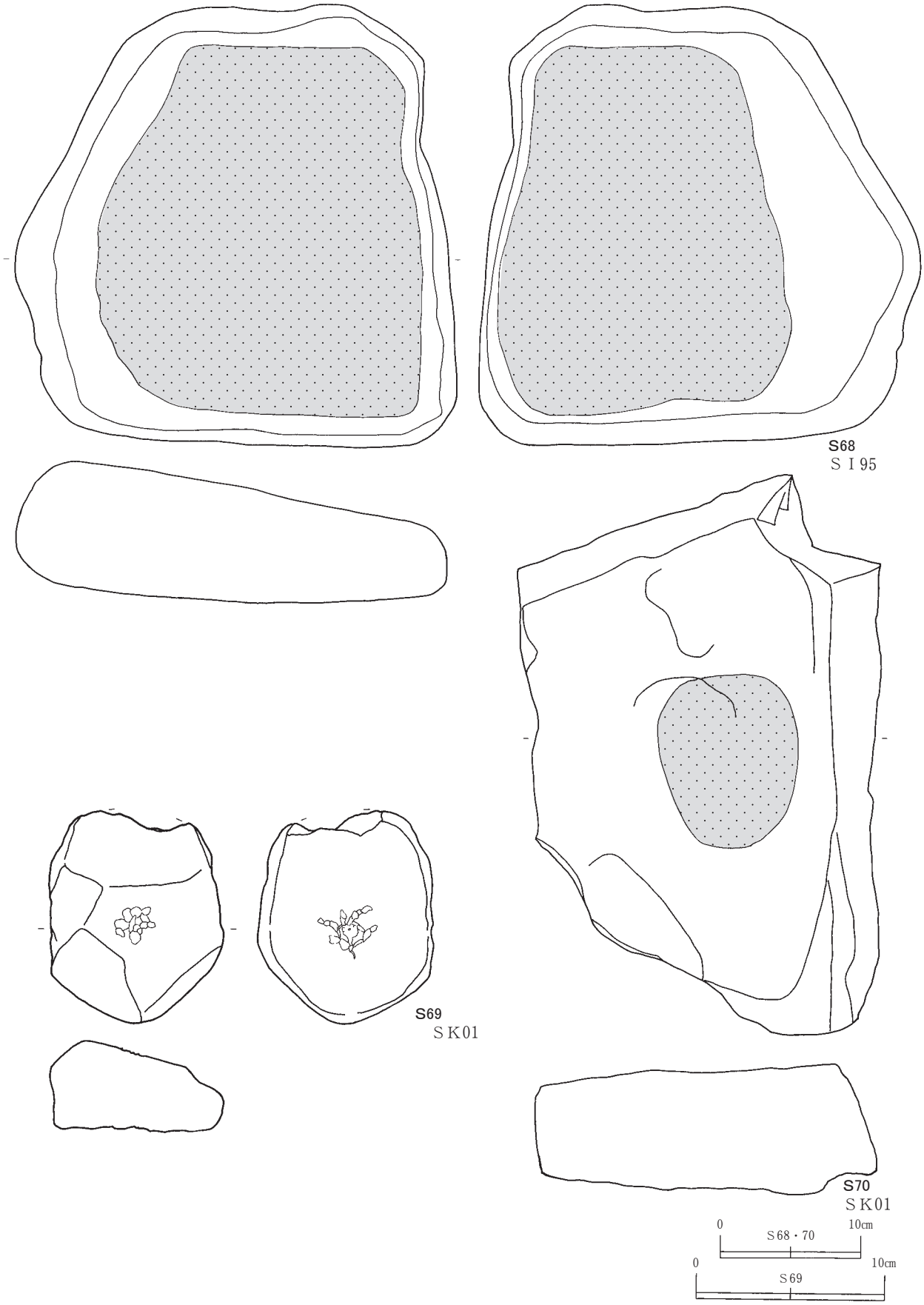
第59図　遺構内出土石器（30）核



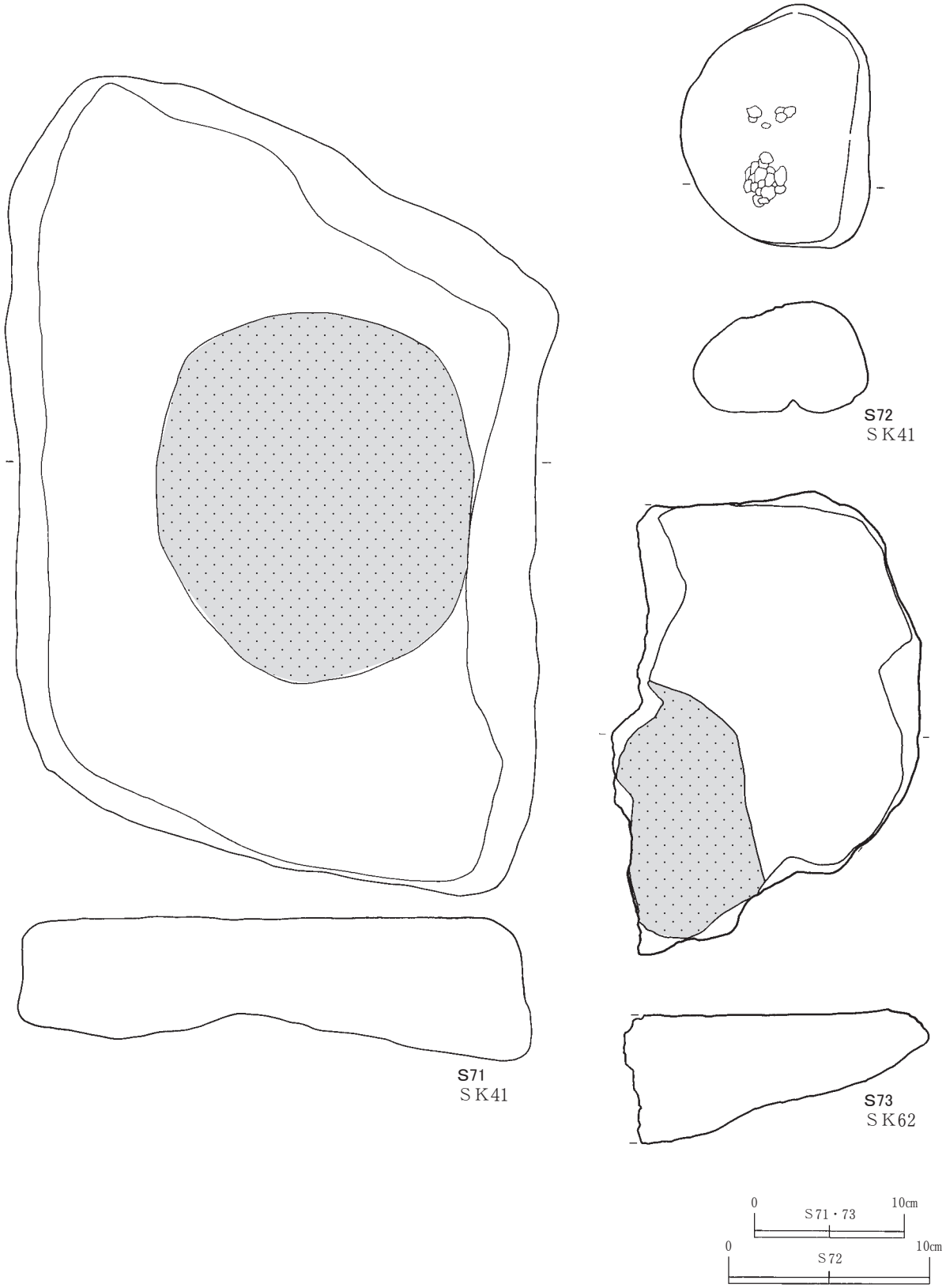
第60図　遺構内出土石器（31）礫



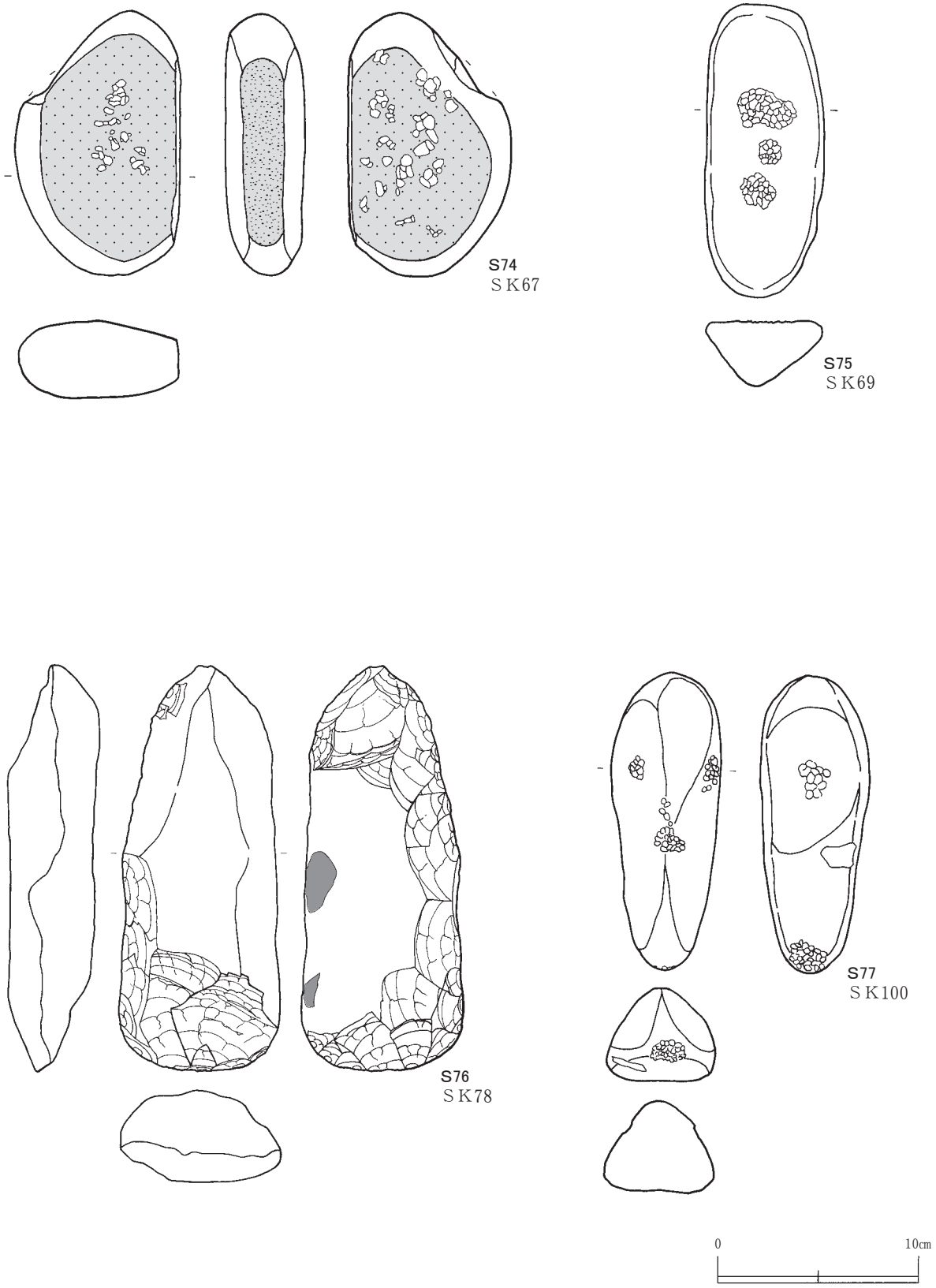
第61図　遺構内出土石器（32）礫



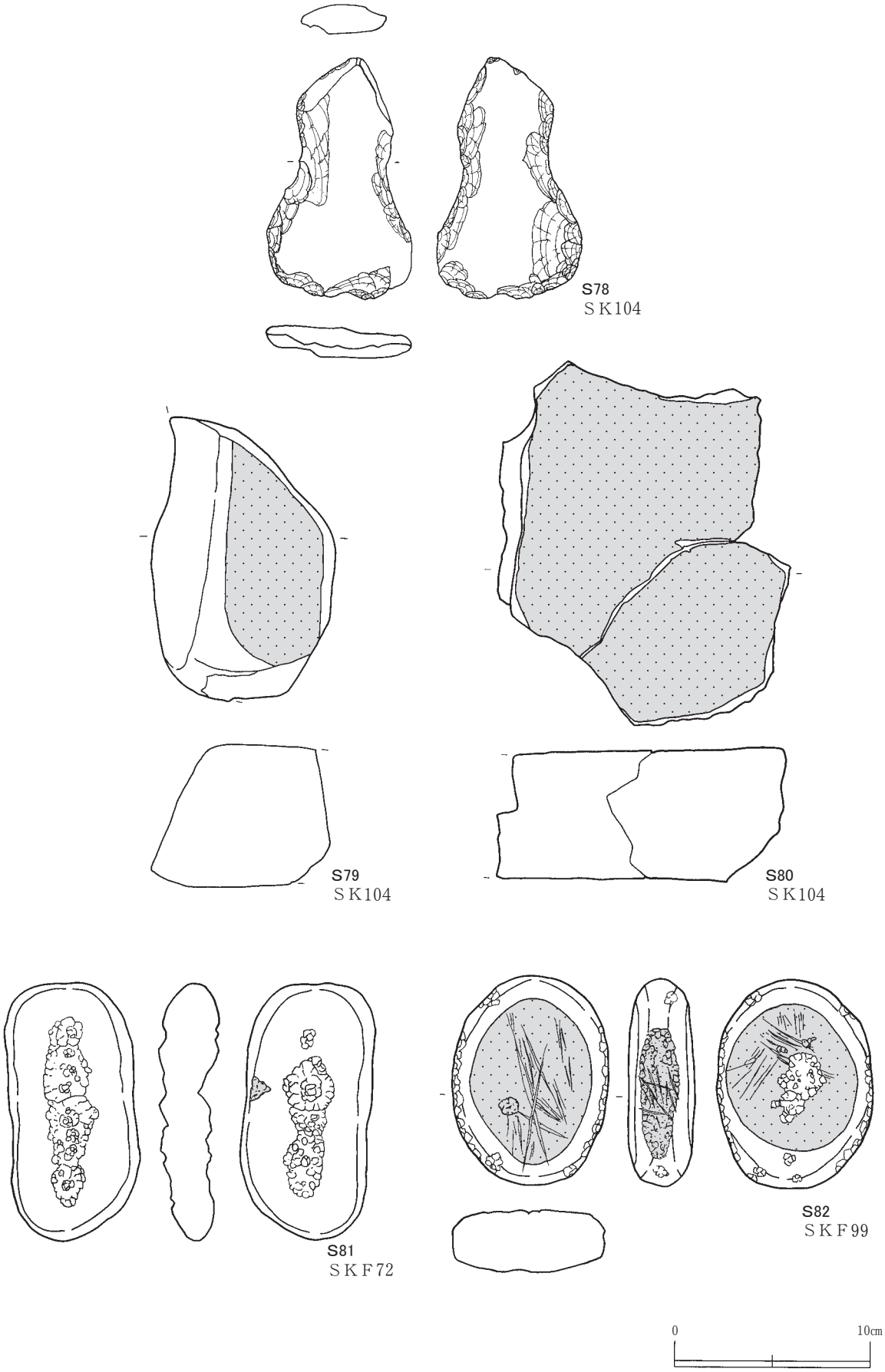
第62図　遺構内出土石器（33）礫



第63図　遺構内出土石器（34）礫



第64図　遺構内出土石器（35）礫



第65図　遺構内出土石器（36）礫

第５表　遺構内出土土器一覧

挿図番号	図版番号	実測番号	遺構名	出土層位	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	取上番号	備考（施文・付着物等）
24－ 1	21	51	SK01		23.6	7.7	28.6	RP6・7・8・9・21・28・29・34・37 49・50・51・54・56・60・66・67 68-a・68-b・68-d	色調は明黄褐色。※スス付着
24－ 2	21	52	SK01	ME45 I 層	27.5	9.2	31.2	RP4・14・15・18・22・24・33・36 38・40・46・47・48・55・60・64 65a・65b・65c・69・71・72・73	色調は橙色。※スス付着
24－ 3	21	53	SKF31	LS54 I 層	18.3	5.3	10.2	RP1	色調はにぶい黄橙色。※スス付着
25－ 4	21	38	SI95	2層					色調は灰黄褐色。※スス付着
25－ 5	21	39	SI95	2層					色調はにぶい黄褐色。
25－ 6	21	2	SK01					RP26・31・39・59	色調は黄褐色。※スス付着
25－ 7	21	1	SK01	2層				RP1・2・10・11・12	No.51・52もSK01（復元土器） 色調はにぶい黄橙色。※スス付着
25－ 8	21	3	SK12	1層					晩期大洞Ａ式 色調はにぶい黄橙色。※スス付着
25－ 9	21	5	SK12						色調はにぶい橙色。
25－10	21	6	SK12						色調はにぶい橙色。
25－11	21	7	SK12						色調はにぶい黄橙色。
25－12	21	8	SK22						色調は黒色。
25－13	21	9	SK33						色調は明黄褐色。
25－14	21	10	SK33	サブトレンチ					色調はにぶい黄橙色。
26－15	21	11	SK43	1層					色調はにぶい黄橙色。
26－16	21	14	SK61	確認面					色調はにぶい黄橙色。※スス付着
26－17	21	12	SK63					RP2	色調は明褐色。
26－18	21	13	SK61	1層				RP3・6	色調はにぶい黄橙色。
26－19	21	15	SK67	確認面				RP2	色調はにぶい黄橙色。※スス付着
27－20	21	111	SK63					RP3・6・8	色調は明赤褐色。※スス付着
27－21	21	16	SK69						色調はにぶい褐色。※スス付着
27－22	21	17	SK69						色調はにぶい黄褐色。
27－23	21	50	SK78					RP2	色調はにぶい黄橙色。※スス付着
27－24	22	18	SK69						色調はにぶい黄褐色。
27－25	22	19	SK96						色調はにぶい橙色。※スス付着
27－26	22	20	SK96						色調はにぶい黄橙色。
27－27	22	21	SK103					RP3・4・5	色調はにぶい黄橙色。※スス付着
27－28	22	22	SK104	2層				RP35-a・35-b・35-c	色調はにぶい黄橙色。※スス付着
28－29	21	23	SK104	2層				RP6	色調は灰黄褐色。※スス付着
28－30	21	24	SK104					RP53	色調は黒褐色。※スス付着
28－31	21	25	SKF31					RP2	色調は明褐色。
28－32	21	26	SKF31	下位					No.53もSKF31出土 色調はにぶい黄橙色。
28－33	21	27	SKF68					RP1	色調はにぶい黄橙色。
28－34	21	28	SKF68					RP2	色調はにぶい黄橙色。※スス付着
28－35	21	29	SKF68						色調はにぶい黄褐色。
28－36	21	30	SKF68					RP3	色調はにぶい黄褐色。※スス付着
28－37	21	31	SKF68	確認面					色調はにぶい黄橙色。
28－38	21	32	SKF72	8層					色調は橙色。
29－39	22	33	SKF72	8層					色調は黄灰色。
29－40	22	34	SKF72	8層					色調は灰黄褐色。※スス付着
29－41	22	35	SKF72	1層					色調はにぶい黄橙色。
29－42	22	36	SKF72	8層					色調は灰黄褐色。
29－43	22	37	SKF72						色調はにぶい黄橙色。
29－44	22	40	SN66						色調はにぶい黄橙色。
29－45	22	41	SN92						色調は橙色。
29－46	22	42	SN92						色調は浅黄橙色。
29－47	22	43	SN93						色調はにぶい黄橙色。※スス付着
29－48	22	44	SN93						色調はにぶい黄褐色。
29－49	22	45	SN93						色調はにぶい黄橙色。
29－50	22	48	SB91の SKP40	1層					色調はにぶい黄褐色。
29－51	22	49							色調は橙色。

第６表　遺構内剥片石器類・礫石器一覧

挿図番号	図版番号	実測№	遺構名	出土層位・取上番号	器種	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
30－S 1	22	38	SK62	1	残核		11.1	10.5	9.4	1238.7	
31－S 2	23	41	SK69	上位	石鏃	C	2.3	1.9	0.4	1.6	
31－S 3	23	44	SK104	2	石鏃	B	3.5	1.5	0.6	2.7	
31－S 4	23	45	SK104	2	石鏃	B	3.1	1.8	0.7	2.1	
31－S 5	23	46	SK104	2	石鏃	B	2.3	1.7	0.5	1.3	
31－S 6	23	39	SK63	1	削器	B1a	7.7	2.6	1.3	13.0	
32－S 7	23	40	SK64	底面	箆状石器	B	8.0	3.9	2.0	58.6	
32－S 8	23	42	SK69	RQ01	削器	C	7.1	4.7	1.5	48.4	
32－S 9	23	43	SK69	RQ03	大型両面加工石器		8.2	8.3	2.5	152.9	
32－S10	23	47	SK104	RQ59	石匙	A1c	10.7	2.3	1.4	19.5	
32－S11	23	48	SK104	RQ49	削器	A2a	5.1	7.7	2.2	73.1	
32－S12	23	49	SK104	RQ54	小型両面加工石器		6.6	5.1	1.8	45.3	
33－S13	23	50	SKF31	不明	小型両面加工石器		6.0	3.0	0.8	12.8	
33－S14	23	51	SKF68	不明	尖頭器		7.5	3.0	1.3	24.1	
33－S15	23	52	SKF68	RQ01	尖頭器		8.2	3.2	1.7	35.8	
33－S16	23	53	SKF68	不明	箆状石器	B	10.5	4.1	2.4	99.5	
33－S17	23	54	SKF68	不明	削器	C	8.5	4.3	1.7	59.2	
33－S18	23	55	SKF68	不明	小型両面加工石器		5.1	3.5	0.8	13.6	
33－S19	23	56	SKF68	不明	小型両面加工石器		4.3	2.9	0.9	12.7	
33－S20	23	57	SKF68	不明	異形石器		6.2	3.5	0.8	12.6	
33－S21	23	58	SN93	不明	削器	B2a	5.9	1.6	0.9	5.7	
34－S22		1	SK100	2	接合資料		9.9	13.6	11.1	1124.0	母1接1
35－S23		2	SK100	RQ216	残核		6.9	6.2	2.6	61.0	母1接1
35－S24		11	SK100	2	接合資料		5.3	7.4	3.9	139.0	母5接1
36－S25		3	SK100	2	接合資料		10.9	14.0	8.7	753.0	母2接1
37－S26		4	SK100	RQ204	削器	A2a	9.7	7.0	3.0	100.0	母2接1
37－S27		5	SK100	RQ425	残核		2.9	7.0	5.7	113.0	母2接1
37－S28		13	SK100	2	接合資料		6.8	8.8	4.5	277.0	母7接1
38－S29		6	SK100	2	接合資料		9.7	12.2	8.7	797.0	母3接1
39－S30		7	SK100	RQ169	残核		6.8	9.7	7.4	513.9	母3接1
39－S31		8	SK100	2	接合資料		5.4	10.2	3.7	160.0	母3接2
40－S32		10	SK100	2	接合資料		7.6	13.2	8.2	627.0	母4接1
41－S33		9	SK100	RQ14	残核		6.3	7.7	5.7	313.0	母4接1
41－S34		12	SK100	2	接合資料		5.3	5.7	3.1	102.0	母6接1
41－S35	22	19	SK100	2	接合資料		6.4	10.8	3.7	154.0	母11接1
42－S36		14	SK100	2	接合資料		6.3	12.6	5.7	366.0	母8接1
43－S37	22	15	SK100	2	接合資料		7.4	8.1	5.5	148.0	母8接2
43－S38	22	16	SK100	2	接合資料		8.1	5.0	3.6	81.0	母8接3
44－S39	22	17	SK100	2	接合資料		7.2	12.3	5.8	222.0	母9接1
45－S40	22	18	SK100	RQ250	残核		10.4	13.1	9.2	1332.0	母10
46－S41		20	SK100	2	接合資料		6.5	12.6	10.4	952.0	母12接1
47－S42		21	SK100	RQ213	残核		6.3	11.2	9.6	793.0	母12接1
48－S43		22	SK100	2	接合資料		13.9	12.3	5.1	747.0	母13接1
49－S44		23	SK100	RQ211	残核		6.0	10.1	4.4	305.0	母13接1
49－S45	22	36	SK100	2	接合資料		5.9	8.3	4.2	141.0	母20接1
49－S46	22	37	SK100	2	接合資料		8.1	8.8	2.2	91.0	母20接2
50－S47		24	SK100	2	接合資料		9.6	13.5	13.1	1035.0	母14接1
51－S48		25	SK100	2	尖頭器	B	8.8	5.0	1.8	61.0	母14接1
51－S49		26	SK100	RQ251	残核		9.3	9.6	7.3	518.0	母14接1
52－S50		27	SK100	2	接合資料		11.5	17.1	11.0	1190.0	母15接1
52－S51		28	SK100	RQ10	残核		7.8	7.7	6.9	391.0	母15接1
53－S52		29	SK100	2	接合資料		14.2	13.0	18.5	1740.9	母16接1-1.2 2個体に分割後それぞれの分割面も 実測した。
54－S53		29- 1	SK100	2	接合資料		13.0	7.8	15.3	720.3	母16接1-1
55－S54		29- 2	SK100	2	接合資料		12.0	7.2	17.8	1020.6	母16接1-2
56－S55		30	SK100	RQ431	残核		5.5	8.1	4.3	170.9	母16接1-1
56－S56		31	SK100	RQ349	残核		6.4	6.0	5.7	183.1	母16接1-2
56－S57	22	34	SK100	2	接合資料		3.7	6.6	3.9	80.0	母18接1
57－S58		32	SK100	2	接合資料		8.4	11.3	16.5	1444.0	母17接1
58－S59		33	SK100	RQ300	残核		8.4	13.2	11.4	1143.0	母17接1
59－S60	22	35	SK100	RQ252	残核		9.4	12.3	11.3	1479.0	母19
60－S61	24	1	SI95	S1	磨製石斧未製品	A1	33.2	17.6	9.5	6,100.0	
60－S62	24	8	SI95	1	敲磨器類	B4	(10.7)	7.4	5.6	608.3	
60－S63	24	7	SI95	2	敲磨器類	D1	(12.3)	(8.4)	(4.0)	338.5	石皿破片転用
61－S64		4	SI95	S4	石皿	A	(23.8)	(22.6)	8.2	5,500.0	
61－S65		2	SI95	S2	石皿	A	29.3	22.8	9.1	10,500.0	
61－S66		3	SI95	S3	石皿	A	(9.5)	(13.3)	10.6	1,387.0	
61－S67		5	SI95	S5	石皿	A	23.2	21.2	12.0	5,500.0	
62－S68		6	SI95	S6	石皿	A	31.4	31.6	10.1	14,500.0	
62－S69	24	10	SK01	S4	敲磨器類	D1	10.6	9.3	4.6	677.0	
62－S70		9	SK01	S1	石皿	A	39.8	25.7	9.3	14,600.0	
63－S71		12	SK41	S2	石皿	A	54.3	36.9	9.6	30,000.0	
63－S72	24	11	SK41	S1	敲磨器類	D1	12.1	9.4	5.4	733.5	
63－S73		13	SK62	I	石皿	A	(30.9)	(20.5)	9.0	6,200.0	
64－S74	24	14	SK67	S1	敲磨器類	C1	13.1	8.1	3.8	504.2	
64－S75	24	15	SK69	RQ2	敲磨器類	D1	14.6	5.9	3.2	393.1	
64－S76	24	17	SK78	S1	磨製石斧未製品	A1	20.4	7.9	4.3	941.4	
64－S77	24	18	SK100	RQ291	敲磨器類	D3	14.8	5.5	4.6	439.1	
65－S78	24	19	SK104	I　S27	打製石斧		12.3	7.4	1.5	166.5	
65－S79		21	SK104	2　S56	石皿	A	14.0	9.4	7.3	1,504.3	
65－S80		20	SK104	2　S32+S40	石皿	A	(171.5)	(148.5)	6.8	2,799.6	
65－S81	24	16	SKF72		敲磨器類	D1	13.2	6.9	3.1	372.3	
65－S82	24	22	SKF99	I	敲磨器類	A3	10.7	7.8	3.2	303.4	

※備考の「母１接１」は「母岩１接合１」の意味である。

第３節　遺構外出土遺物

遺構内外から出土した遺物は中コンテナ（容量18ℓ）150箱で、このうち縄文時代前期の深鉢形土器と石器がほとんどである。縄文時代では前期以外に中期・後期・晩期の土器が少量出土している。他に若干であるが中世・近世の磁器も出土している。

１　縄文土器

（１）Ⅰ群　前期の土器（第66図～第82図、第７・８表、図版24～28）

深鉢形土器で器形は大きく２種類ある。一つは底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる器形で、平口縁もしくは小波状口縁になるものである。もう一つは底部から胴部中半にかけて膨らみ、胴部上半ですぼみ外反気味に立ち上がり、口縁部が内湾する器形で、波状口縁となるものである。以下、これらの土器を口縁部の文様によって細分する。

Ａ類（第68図７～第70図26）

粘土紐を貼付した隆線で、文様を胴部上半～口縁部に施文する土器である。隆線上に付加される文様によって細分した。

Ａ－１類　刻目を施すもの（７～19）。

Ａ－２類　刺突文を施すもの（20～22）。

Ａ－３類　指頭圧痕文を施すもの（23～25）。

Ａ－４類　撚糸文や縄文を施すもの（26）。

Ｂ類（第66図１～第67図４、第71図27～第74図60）

沈線で文様を施文する土器である。

Ｂ－１類　口縁部と平行に１～３条巡らすもの（１・２・27～40）。

Ｂ－２類　口縁部付近に曲線文や垂下文を施すもの（41～47）。

Ｂ－３類　口縁部もしくは口縁部周辺に格子文やクランク文、直線文を施すもの（３・48～51）。

Ｂ－４類　口縁部に連続山形文や山形文を施すもの。山形文と連結した沈線を垂下させるものもある（４、52～58）。

Ｂ－５類　胴部付近に斜行もしくは縦に施すもの（59・60）。

Ｃ類（第67図６、第75図61～第75図71）

刺突列で文様を施文する土器である。口縁部付近に押し引き風の半截竹管文や竹管文風の文様を直線的に施文したものが多いが、クランク状のものもある。

Ｃ－１類　半截竹管文を２～３条施すもの。波頂部から垂下する指頭圧痕文を施すものや口縁部を無文帯としているものがあり、地文は「Ｓ」字状連鎖沈文や縄文を施すものもある（６・61～67）。

Ｃ－２類　棒状工具によって竹管文風の文様を施すもの。刺突列は２ないし３条が多い（68～71）。

Ｄ類（第76図72 ～ 77）

隆線と沈線で文様を施文する土器である。

Ｄ－１類　口縁に沿って１ないし２本の平行な隆線を、その下には平行な浅い沈線を施すもの。隆線には刻目を、小波状口縁の波頂部や口唇部にはやや深い刻目を施すものもある（72）。

Ｄ－２類　波状口縁に沿って２条の沈線と波頂部から垂下する隆線を施すもの。隆線上には指頭圧痕文や刺突文を施す。胴部には「Ｓ」字状連鎖沈文を施すものもある（73・74）。

Ｄ－３類　口縁部に隆線による曲線文と沈線による斜行文・垂下文を施すもの（75 ～ 77）。

Ｅ類（第77図78 ～ 90）

隆線と刺突列で文様を施文する土器である。

Ｅ－１類　平らな口縁部に沿って隆線を、その下に棒状工具による刺突文を施文し、さらに隆線から２本の垂下した隆線が連なるもの。胴部上半には環状の隆線が見られる。隆線には全て刻目が見られる（78 ～ 81）。

Ｅ－２類　隆線には刻目もしくは刻目状に、隆線の下もしくは脇には半截竹管状工具による連続刺突列を施すものが多い。隆線もしくは刺突列の下に棒状工具による刺突を施すものもある（82 ～ 84）。

Ｅ－３類　小波状口縁に沿った隆線には刻目を、隆線脇には棒状工具による刺突列を施すもの（85 ～ 87）。

Ｅ－４類　隆線に棒状工具による圧痕を施している。隆線脇には器面に沿わせて竹管を刺突して、短沈線様に文様を施すもの（88）。

Ｅ－５類　平らな口縁部に隆線と刺突列を２回、交互に施すもの（89）。

Ｅ－６類　口縁部に沿って棒状工具による刺突列をもつ隆線と、その下に棒状工具による刺突列を施すもの（90）。

Ｆ類（第78図91 ～ 95）

沈線と刺突で文様を施文する土器である。

Ｆ－１類　小波状口縁に沿って直線的もしくは斜めに垂下する浅い沈線を施し、沈線間に棒状工具による刺突文を施す。胴部には「Ｓ」字状連鎖沈文を施す（91）。

Ｆ－２類　口縁部にそって押し引き様の刺突文と、半截竹管による沈線を交互に施すもの。胴部には「Ｓ」字状連鎖沈文を施す（92）。

Ｆ－３類　小波状口縁に沿って半截竹管による２条の刺突文と楕円形様の沈線文を施すもの。胴部には「Ｓ」字状連鎖沈文を施す（93）。

Ｆ－４類　内湾する口縁部に細い粘土紐を貼付して折り返し口縁様とし、半截竹管による２重の沈線で連続山形文を施すもの（94）。

Ｆ－５類　口縁部に半截竹管による連続刺突文、半截竹管による２重の沈線で連続山形文を施すもの（95）。

Ｇ類（第79図96 ～第82図113）

粗製土器を一括して本類とした。

Ｇ－１類 「Ｓ」字状連鎖沈文を施すもの（96 ～ 101）。

Ｇ－２類　地文が斜縄文で、その上に「Ｓ」字状連鎖沈文を施すもの（102）。

Ｇ－３類　口縁部を無文帯とし、その下位に絡条体や斜縄文を施すもの（103）。

Ｇ－４類　斜縄文を施すもの（104 ～ 111）。

Ｇ－５類　条痕を施すもの（112）。

Ｇ－６類　無文のもの（113）。

（２）Ⅱ群　中期の土器（第83図114 ～ 119、第８表、図版28）

114・115は地文が撚糸文で、楕円形に区画した内側を磨り消して無文帯としている中期後葉の大木式系と考えられる。116 ～ 119は口縁部で、色調は黄橙色である。116・117は太い粘土紐を横と斜めに貼付して、その上にさらに細い粘土紐を貼付したり、刻目文を施文している。118・119は折り返し風の口縁部の高まりに縄文原体先端部の側面圧痕を刻目文風に施文している土器である。119は小波状となった口縁部に細い粘土紐を貼付している。116・117の時期は中期前葉の円筒上層系と考えられ、118・119もほぼこの頃と考えられる。

（３）Ⅲ群　後期の土器（第83図120 ～ 124、第８表、図版28）

120 ～ 123は地文が細かい縄文で、横に楕円形の沈線を巡らし、その内外を磨り消して、文様帯としている後期中葉の土器である。124は深鉢形土器の把手（橋状）部で、口縁部に沿って１条の沈線を巡らしている後期末葉の土器である。

（４）Ⅳ群　晩期の土器（第83図125 ～第84図130、第８表、図版28）

全て鉢形土器である。125 ～ 127は細かい斜縄文を地文として、口縁部に沿って数条の沈線を、その沈線間に刻目文や羊歯状文などを施文している土器である。129・130は口縁部に沿って数条の沈線を、口唇部に刻目文を施文している。130は口縁部内面にも沈線を巡らしており、同一個体がＳＫ12土坑から出土している。縄文晩期後半の大洞Ａ式土器である。

（５）Ｖ群　時期不明の土器（第84図131 ～ 134、第８表、図版28）

時期不明の底部を一括した。いずれも外底面に網代痕を残している。

２　石器

（１）　剥片石器類

剥片石器類は全体形状から石鏃・尖頭器・石錐・有撮石器・石匙・箆状石器の定形石器を抽出し、それ以外については刃部形状および二次加工の様相から削器・掻器・抉入石器・大型両面加工石器・小型両面加工石器・その他の両面加工石器・異形石器・二次加工のある剥片・微細剥離痕のある剥片・残核転用敲石に分類した。上記製品に加えて剥片・砕片・残核等の残滓を含めた総点数は22,909点で

ある。詳細な内訳は第13表に掲載した。

剥片石器の石材は頁岩が大部分を占め、他石材としては鉄石英が若干量認められる。

石鏃（第85図Ｓ１～第87図Ｓ20、第９表、図版28）

遺構内外から68点出土している。基部形状に加え、未製品と破損品も含めて以下のＡ～Ｄ類に分類した。

Ａ類：いわゆる凹基無茎鏃。基部の抉りが強いものと、基部の抉りが弱いものがある（Ｓ１～８）。

Ｂ類：いわゆる平基鏃（Ｓ９～12）。

Ｃ類：未製品・失敗品と考えられるもの（Ｓ13～20）。小型剥片を素材として石鏃状の平面形態に加工された石器のうち、大きさに比べて特に分厚いもの、左右もしくは表裏の対称性に乏しいものを本類とした。

Ｄ類：基部形状の判断不可能な破損品。

形状の特徴としては茎を持たない無茎鏃を基本とし、特に凹基鏃が多数を占めている。未製品・失敗品を含めても、明確な茎をもつ製品は認められない。

尖頭器（第88図Ｓ21～第89図Ｓ32、第９表）

細長い槍先形の製品を尖頭器とした。遺構内外から67点出土している。精緻な二次加工により均整のとれた形状に仕上げられたものを完成品（Ａ類）とし、二次加工の粗いものを未製品（Ｂ類）とした。なお基部の破損品については箆状石器との区別が困難であるが、両面加工で比較的薄手のもの、断面形が凸レンズ状に近いものは尖頭器とみなした。

完成品は出土点数が少なく、全体形状及びサイズの違いが少ないことから細分は行っていないが、基部は若干丸みを帯び、ほぼ中間の位置で最大幅をもつ形状を基本としている。

石錐（第89図Ｓ33～35、第９表）

遺構外から５点出土している。全体形状から以下のＡ・Ｂ類に分類した。

Ａ類：両面加工により全体形状を細長く仕上げ、一端に錐部を作出したもの（Ｓ33・34）。

Ｂ類：不定形剥片の一端に錘部のみ作出したもの（Ｓ35）。

有撮石器（第89図Ｓ36～38、第９表、図版29）

両面加工により全体を細長い形状に仕上げ、一端に摘みが作出された製品を有撮石器とした。遺構外から３点出土している。

石匙（第90図Ｓ39～第91図Ｓ60、第９表、図版29）

遺構内外から70点出土している。器体の軸線に対する摘みとの位置関係により、Ａ類:縦型、Ｂ類:斜型、Ｃ類：横型に大別し、さらに刃部形状と全体の平面形態から以下のように細分した。

Ａ１ａ類：一辺の刃部が直線をなし、端部が尖るもの（Ｓ39～42）。

Ａ１ｂ類：一辺の刃部が直線をなし、端部が平坦となるもの（Ｓ43～46）。

Ａ１ｃ類：二辺の刃部が直線をなし、かつ平行となるもの（Ｓ47・48）。

Ａ１ｄ類：二辺の刃部が直線をなし、先端に向かって「ハ」字状に開くもの（Ｓ49・50）。

Ａ２ａ類：二辺の刃部が曲線をなし、先端が尖るもの（Ｓ51・52）。

Ａ２ｂ類：二辺の刃部が曲線をなし、先端が丸みを帯びるもの（Ｓ53・54）。

Ａ３類：二辺の刃部が曲線をなし、全体形状が強く屈曲するもの（Ｓ55）。

Ｂ１類：下端の刃部が直線をなすもの（Ｓ56）。

Ｂ２類：下端の刃部が外湾するもの（Ｓ57）。

Ｃ１類：下端の刃部が直線をなすもの（Ｓ58）。

Ｃ２類：下端の刃部が外湾するもの（Ｓ59）。

Ｄ類：摘みを付けるための加工を除き、刃部を形成する調整加工が極端に少ないもの。未製品と考える（Ｓ60）。

大別ごとの数量を比較すると縦型が圧倒的に多く、また同じ縦型の中でも平面形態のバリエーションが豊富である点は特徴として挙げることができる。

箆状石器（第92図Ｓ61 ～第98図Ｓ100、第９・10表、図版30・31）

遺構内外から163点出土しており、剥片石器製品の主体をなしている。平面形態からＡ～Ｃ類に大別し、調整加工のあり方と刃部形状からさらに細分した。

Ａ類：撥形の平面形を呈するもの。全体の調整加工のあり方から１類：片面調整、２類：半両面調整、３類：両面調整に分類し、さらに刃部側面観によりａ類：片刃、ｂ類：両刃の項目を加え、これらを組み合わせて細分した（Ｓ61 ～ 91）。

Ｂ類：両側縁が直線的かつ平行するもの（Ｓ92 ～ 94）。

Ｃ類：両側縁が弧状をなすもの（Ｓ95・98・100）。

Ｄ類：両側縁の中心部に抉りをもつもの（Ｓ99）。

Ｅ類：全体形状の判断不可能な破損品（Ｓ96・97）。

大別ごとの数量を比較すると、撥形を呈するＡ類が大半を占めており、これを基本的な平面形態とする。中には折面から再調整を行った個体（Ｓ96・97）もみられることから、折損後の刃部再生が行われた可能性も指摘することができる。

削器（第98図Ｓ101 ～第100図Ｓ117、第10表、図版31）

上記の定形的な石器のほかに、縁辺の一部あるいは全周にわたって連続的な調整加工により刃部が形成された製品を削器とした。遺構内外から296点出土している。加工範囲により大別し、さらに刃部平面形態とその組み合わせによって以下のように細分した。

Ａ類：縁辺の一部に刃部が形成されたもの。

Ａ１ａ類：一側縁に直線的な刃部が形成されたもの（Ｓ101）。

Ａ１ｂ類：平行する二側縁に直線的な刃部が形成されたもの（Ｓ102）。

Ａ１ｃ類：直線的な刃部と、外湾する刃部を併せ持つもの（Ｓ104）。

Ａ２ａ類：一側縁に外湾する刃部が形成されたもの（Ｓ103・106）。

Ａ２ｂ類：一側縁に内湾する刃部が形成されたもの（Ｓ105）。

Ａ２ｃ類：外湾する刃部と内湾する刃部を併せ持つもの（Ｓ107）。

Ｂ類：ほぼ全周に刃部が形成されたもの。

Ｂ１ａ類：両側縁に平行する直線的な刃部が形成されたもの（Ｓ108・109）。

Ｂ１ｂ類：直線的な刃部と外湾する刃部を併せ持つもの（Ｓ110・111）。

Ｂ２ａ類：両側縁に外湾する刃部が形成され、先端が尖るもの（Ｓ112・113）。

Ｂ２ｂ類：両側縁に外湾する刃部が形成され、先端が丸みを帯びるもの（Ｓ114・115）。

Ｂ２ｃ類：外湾する刃部と内湾する刃部を併せ持つもの（Ｓ116・117）。

Ｃ類：全体形状の判断不可能な破損品。

掻器（第100図Ｓ118・119、第10表、図版31）

素材剥片の端部に急斜度の刃部が形成されたもので、遺構外から４点出土している。

抉入石器（第100図Ｓ120・121、第10表、図版32）

素材剥片の一部に片面加工による急斜度の抉りが付けられたもので、遺構外から７点出土している。

大型両面加工石器（第101図Ｓ122 ～第102図Ｓ127、第10表、図版32）

比較的大型の両面加工石器を一括して抽出した。尖頭器や箆状石器等の未製品である可能性もある。遺構外から51点出土している。

小型両面加工石器（第103図Ｓ128 ～ 137、第10表、図版32・33）

両面加工により楕円形もしくは木葉形に仕上げられた比較的小型の製品を一括した。石鏃より一回り大きく、尖頭器よりも扁平で幅広く寸詰まりな形態をなしており、両者とは異なる定形的な製品と考えられる。遺構外から96点出土している。

その他の両面加工石器（第104図Ｓ138 ～ 140、第10表、図版33）

上記の他イレギュラーな両面加工の施された石器を一括した。遺構内外から12点出土している。Ｓ138は素材剥片の一端に両面調整による丸みを帯びた尖部が作出されている。Ｓ140は全周に両面調整が施されたごく小型の製品で、一端に摘み状の突起が、もう一端に尖部が作出されている。

異形石器（第33図Ｓ20、第６表、図版23）

ＳＫＦ68から１点のみ出土している。丁寧な両面加工により、全体形状は下端が抉られた三角形をなし、上部に摘みをつけた特殊な形状に仕上げられている。

二次加工のある剥片

縁辺の一部に不連続な二次加工を伴う剥片を一括した。遺構内外から375点出土している。

微細剥離痕のある剥片

縁辺の一部に連続した微細剥離を伴う剥片を一括した。遺構内外から264点出土している。

残核転用敲石（第104図Ｓ141・142、第10表、図版33）

剥片石器類の残核を転用した敲石が遺構外から２点出土している。後述する磨製石斧製作時の敲打調整に使用された可能性もあろう。

（２）　礫石器類

礫石器類には、磨製石斧・磨製石斧未製品・打製石斧・礫器・石皿・敲磨器類・砥石がある。総点数は1,660点である。第13表に詳細な内訳を掲載した。なお、礫石器類の石材については委託による肉眼鑑定を実施しており、第５章第２節を参照されたい。

磨製石斧（第105図Ｓ143 ～ 151、第11表、図版33）

全て定角式磨製石斧である。遺構外から13点出土した。完形の個体が非常に少ないため、サイズの直接的な比較は困難であるが、長さ15㎝ほどの大型品と、10㎝以下の小型品が認められる。長さと幅は厚さと相関関係があるものと推測し、おおよそのサイズを比較する目安として、最大厚から以下のように大別した。

Ａ類：最大厚1.5㎝以上の大型品（Ｓ143 ～ 149）。

Ｂ類：最大厚1.5㎝以下の小型品（Ｓ150・151）。

刃部形状は残存例が少ないため特に分類しないが、基部形状に特徴があり、以下のように細分した。

ａ類：基端部の境界が不明瞭で尖るもの（Ｓ143 ～ 146・150）。

ｂ類：基端部の境界が明瞭で丸いもの（Ｓ147）。

ｃ類：基端部の境界が明瞭で平坦なもの（Ｓ151）。

大別ごとに比較すると大型品のＡ類が大半を占める。Ａ類の破損品の中には折面から調整を行った例が認められ、刃部再生が行われていたものと推測される（Ｓ143・145・147）。なお小型品のＢ類には基端部に穿孔をもつ非常に小さな個体（Ｓ151）があり、これについては非実用品と考える。

磨製石斧未製品（第106図Ｓ152 ～第112図Ｓ180、第11表、図版34）

磨製石斧の製品と同様の石材を用いているが、研磨が部分的もしくは全く施されていない石斧状の石器が一定量認められる。素材礫の一部に剥離調整が施されただけのものから、磨製石斧に近い形状まで仕上げたものもあり、これらを製作途中の失敗品、すなわち磨製石斧未製品として一括した。遺構内外から44点出土している。磨製石斧未製品には剥離痕・敲打痕・研磨痕という製作に関わる痕跡を観察することができる。明らかに擦切技法を示す痕跡は認められず、磨製石斧の製作は大きく剥離→敲打→研磨の各工程をたどる敲打技法によるものと考えられる。推定される製作工程を踏まえ、以下のように分類した。

Ａ類：剥離痕のみ認められるもの。加工の進捗状況によりさらに細分する。

Ａ１類：剥離加工が表裏両面に全周しないもの。平面形が斧状を呈していないものも含む

（Ｓ152 ～ 169・171 ～ 174）。

Ａ２類：剥離加工が表裏両面に全周するもの。平面形は概ね斧状を呈する（Ｓ170・175・176）。

Ｂ類：敲打痕が認められるのもの。表面の一部あるいは大部分にアバタ状の細かい敲打痕を観察することができる（Ｓ177・178・180）。

Ｃ類：研磨痕が認められるもの。１点のみであるが、Ｓ179はほぼ全面が敲打痕に覆われ、一部に研磨痕が観察される。

調整剥片

磨製石斧未製品と同じ石材の剥片が一定量出土している。これらは磨製石斧製作時の剥離工程段階で生成された可能性が高く、ここでは調整剥片として分類した。遺構内外から1,174点出土している。

打製石斧（第113図Ｓ181 ～ 185、第11表、図版35）

磨製石斧未製品との区別が困難な場合もあるが、磨製石斧未製品と違い硬質な石材を使用し、比較的薄手で両側縁に抉り調整を施したものを打製石斧とした。遺構内外から13点出土している。平面形は基本的に刃部が丸みを帯びた撥状を呈する。サイズ及び製作技法上の相違点は殆ど無いため、特に細分しない。

礫器（第121図Ｓ229・230、第12表、図版36）

細長い棒状礫を素材とし、礫縁辺に両面加工による刃部を付けたものである。遺構外から７点出土した。刃部の付く位置により以下のように分類した。

Ａ類：素材礫の長辺に刃部を形成したもの（Ｓ229）。

Ｂ類：素材礫の短辺に刃部を形成したもの（Ｓ230）。

出土点数が少なく一つの器種として認定可能であるか判断の難しい側面もあるが、特にＡ類については縄文時代前期に多く認められる半円状扁平打製石器との関連性も視野に入れ、ここでは独立した器種として取り扱うことにした。

石皿（第119図Ｓ221 ～第121図Ｓ228、第12表、図版35・36）

摩滅面の観察できる大型礫を石皿とした。いわゆる有縁石皿・有脚石皿は認められない。遺構内外から63点出土している。破損品が大多数を占めるため、使用面の断面形状から以下のように分類した。

Ａ類：使用面が平坦なもの。

Ｂ類：使用面が窪むもの。

分類ごとの比較では使用面の平坦なＡ類が大多数を占めている。集落規模に対する石皿の数の多さと磨製石斧未製品の存在を併せて考えると、使用方法として堅果類の磨り潰しという一般的な解釈とは別に、磨製石斧の研磨を視野に入れておく必要があろう。ただし石皿の摩滅面と磨製石斧の研磨痕の対応関係については未検討であるため、ここでは可能性の指摘に留めておく。

敲磨器類（第114図Ｓ186 ～第118図Ｓ220、第11・12表、図版34・36）

片手で持つことのできる比較的小型で軽量の礫に、摩滅痕や敲打痕を伴う石器が一定量存在する。通常磨石・敲石・凹石等の用語で呼称されることが多いが、これらの使用痕は一個体の中で単独とは限らず重複する場合もあるため、一括して敲磨器類として取り扱うこととした。遺構内外から338点出土している。ここでは使用痕を大きく摩滅痕と敲打痕とに分け、それぞれの素材礫に対する位置関係により、以下のように分類し組み合わせて呼称することとした。

Ａ類：素材礫の表裏面に摩滅痕が付くもの。

Ｂ類：素材礫の側縁に摩滅痕が付くもの。

Ｃ類：素材礫の表裏面及び側縁に摩滅痕が付くもの。

Ｄ類：摩滅痕の付かないもの。

１類：素材礫の表裏面に敲打痕が付くもの。

２類：素材礫の側縁に敲打痕が付くもの。

３類：素材礫の表裏面及び側縁に敲打痕が付くもの。

４類：敲打痕の付かないもの。

特徴的なものとして、断面三角形をなす棒状礫を素材とし、その稜線上を研磨使用する例（115図Ｓ197など）を挙げることができる。また、素材の礫形状を殆ど残さないほどに研磨・整形が及ぶ例（117図Ｓ210など）も認められ、これについては磨製石斧製作に供された手持ち砥石の可能性も考えられる。

砥石（第122図Ｓ231、第12表、図版36）

遺構外から８点出土している。全て破損品である。研磨面に認められる線状擦痕から金属製品の研磨作業に使用されたとみられる。帰属時期は明確ではないが、中世以降のものと推測される。

（３）石製品

石製品には石棒・玦状耳飾り・円盤状石製品・変形礫がある。総点数は16点である。第13表に詳細な内訳を掲載した。

石棒（第122図Ｓ234・235、第12表、図版36）

遺構外から破片２点が出土した。Ｓ234・235は全体形状が不明であるが、両側縁にわずかな稜をもつ。同一個体の可能性が高いものと考えられる。

玦状耳飾り（第122図Ｓ243、第12表、図版36）

遺構外から１点のみ出土している。隅丸方形平面を呈し、両面の長軸方向に切れ込みが入っている。未製品と考えられる。

円盤状石製品（第122図Ｓ236 ～ 242、第12表、図版36）

礫の表裏面および側縁を研磨整形して円盤状に仕上げたものである。遺構外から7点出土している。

平面形態から以下のように大きく二つに分類した。

Ａ類：平面形が円形を呈するもの。

Ｂ類：平面形が楕円形もしくは隅丸方形を呈するもの。

Ｂ類については玦状耳飾り未製品の可能性も考慮する必要があろう。

変形礫（第122図Ｓ232・233、第12表、図版36）

自然礫のうち、特に加工の痕跡は認められないが一部に窪みをもつものや、穴の空いている奇形のものを、変形礫として分類した。遺構外から６点出土している。全て軟質の石材であり、自然の作用で部分的に脱落もしくは溶解したものと考えられる。

３　その他

（１）中世の磁器

中国製の染付皿の小破片が１点出土している。外面の畳付けは砂粒が付着し、器厚は薄い。中世末の所産と思われる。

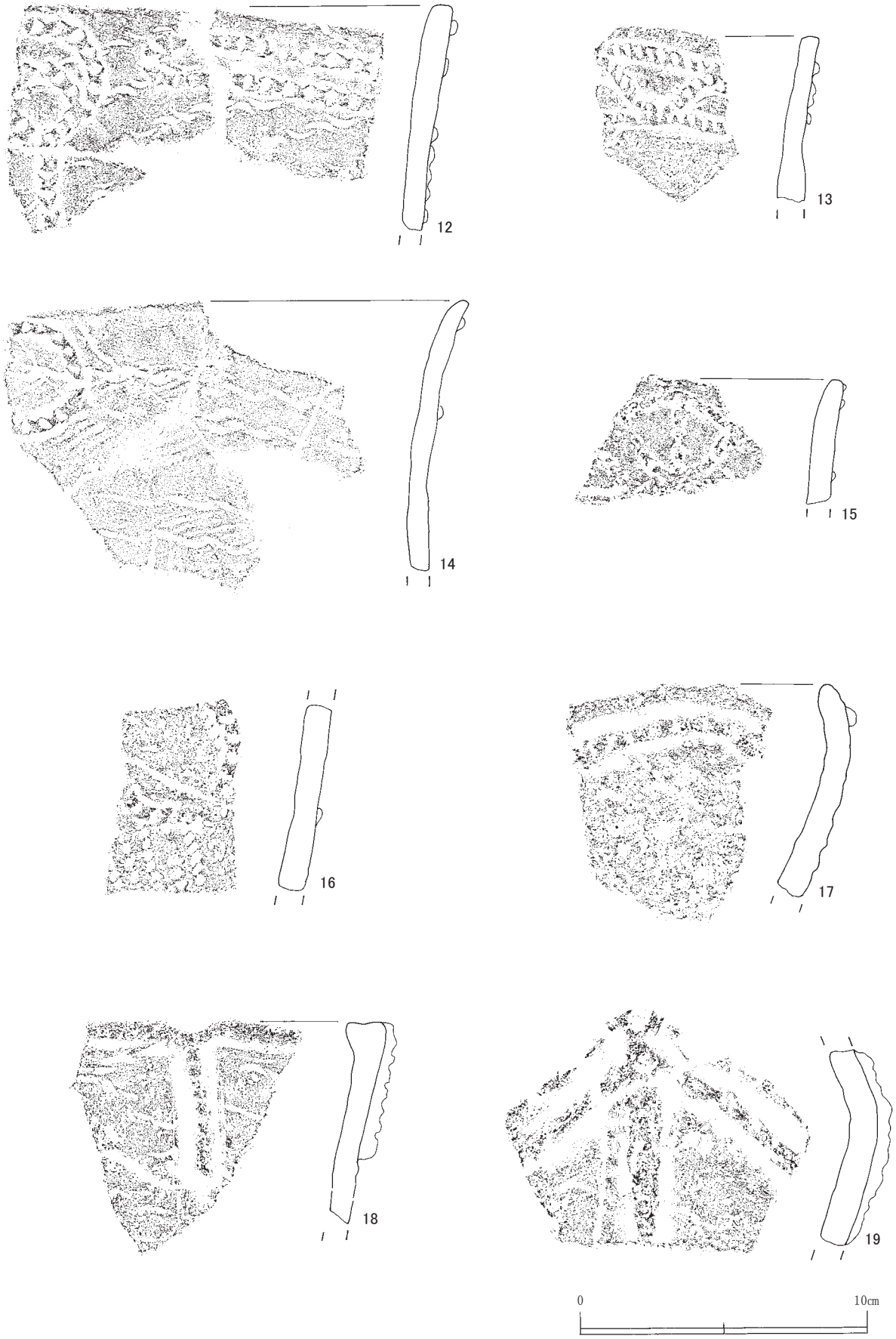
（２）近世の磁器（図版36）

折縁の口縁部をもつ皿の破片１点を提示した。内外面に灰釉を施している。江戸時代の所産と思われる。

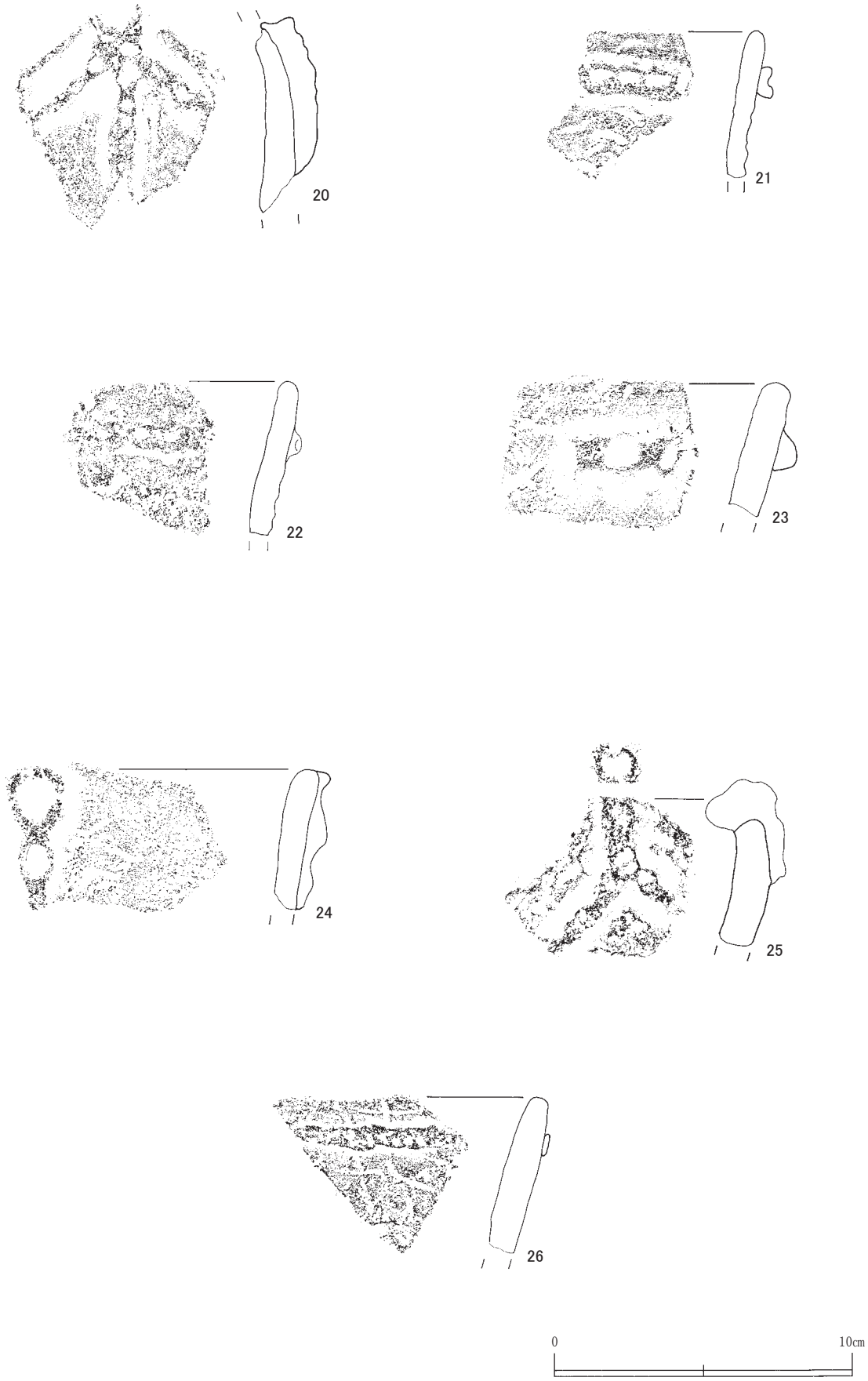
第66図　遺構外出土土器（１）

第67図　遺構外出土土器（２）

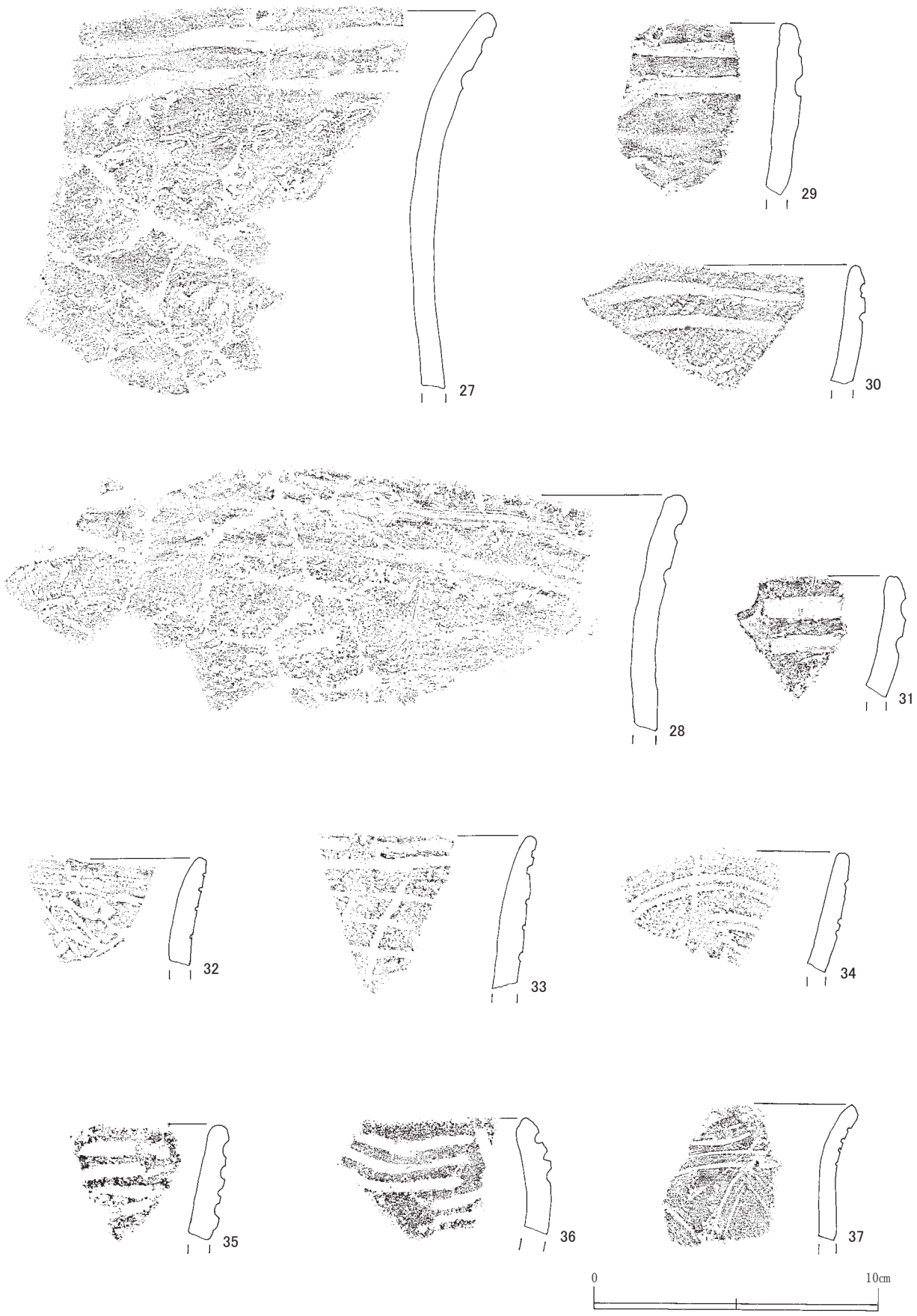
第68図　遺構外出土土器（３）



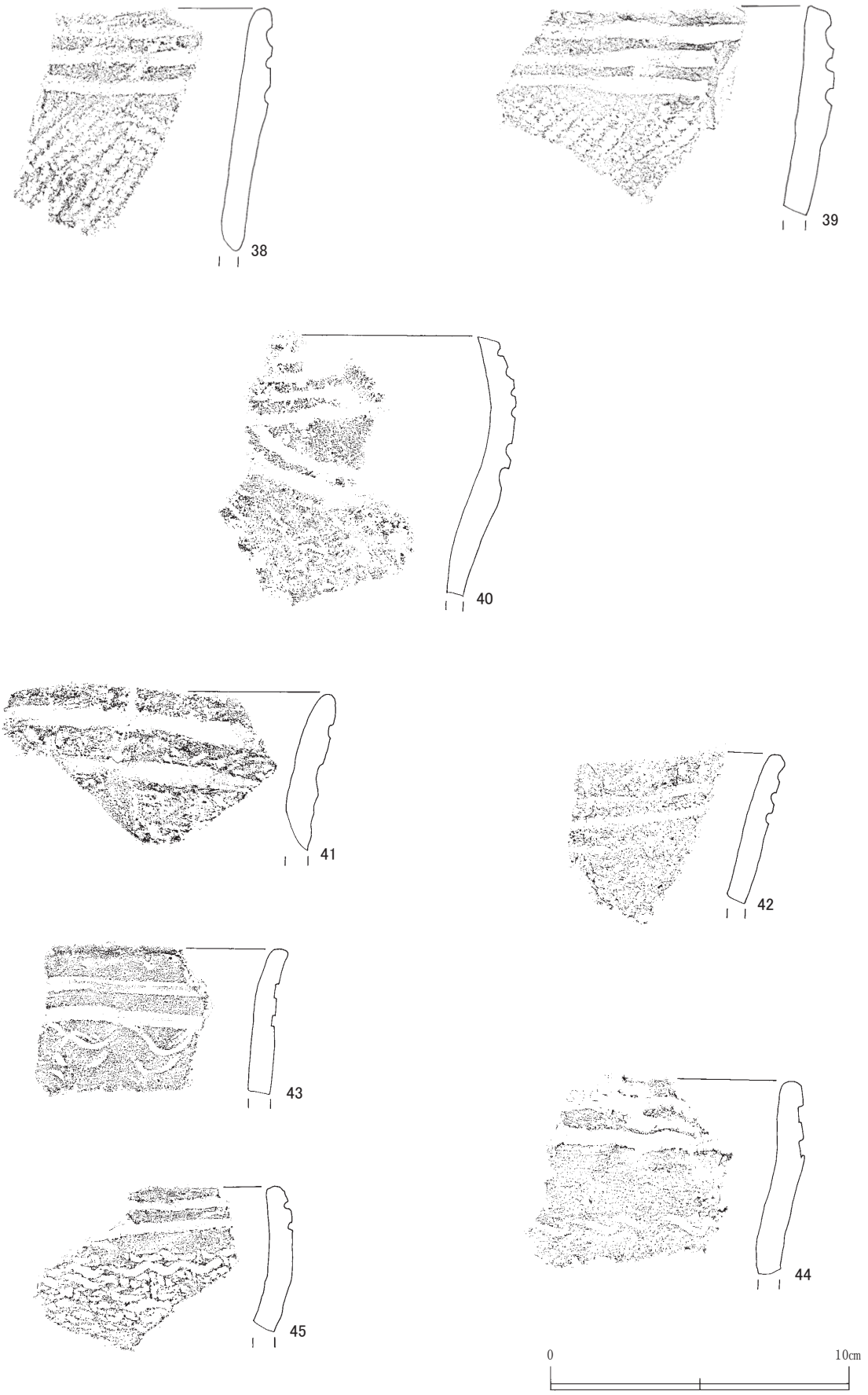
第69図　遺構外出土土器（４）



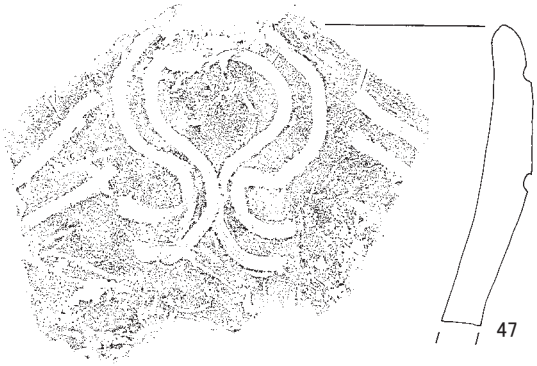
第70図　遺構外出土土器（５）

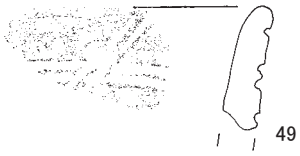


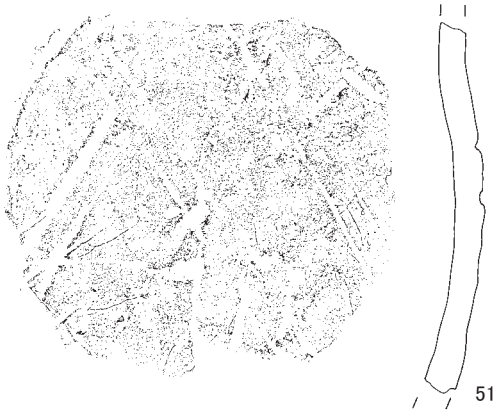
第71図　遺構外出土土器（６）



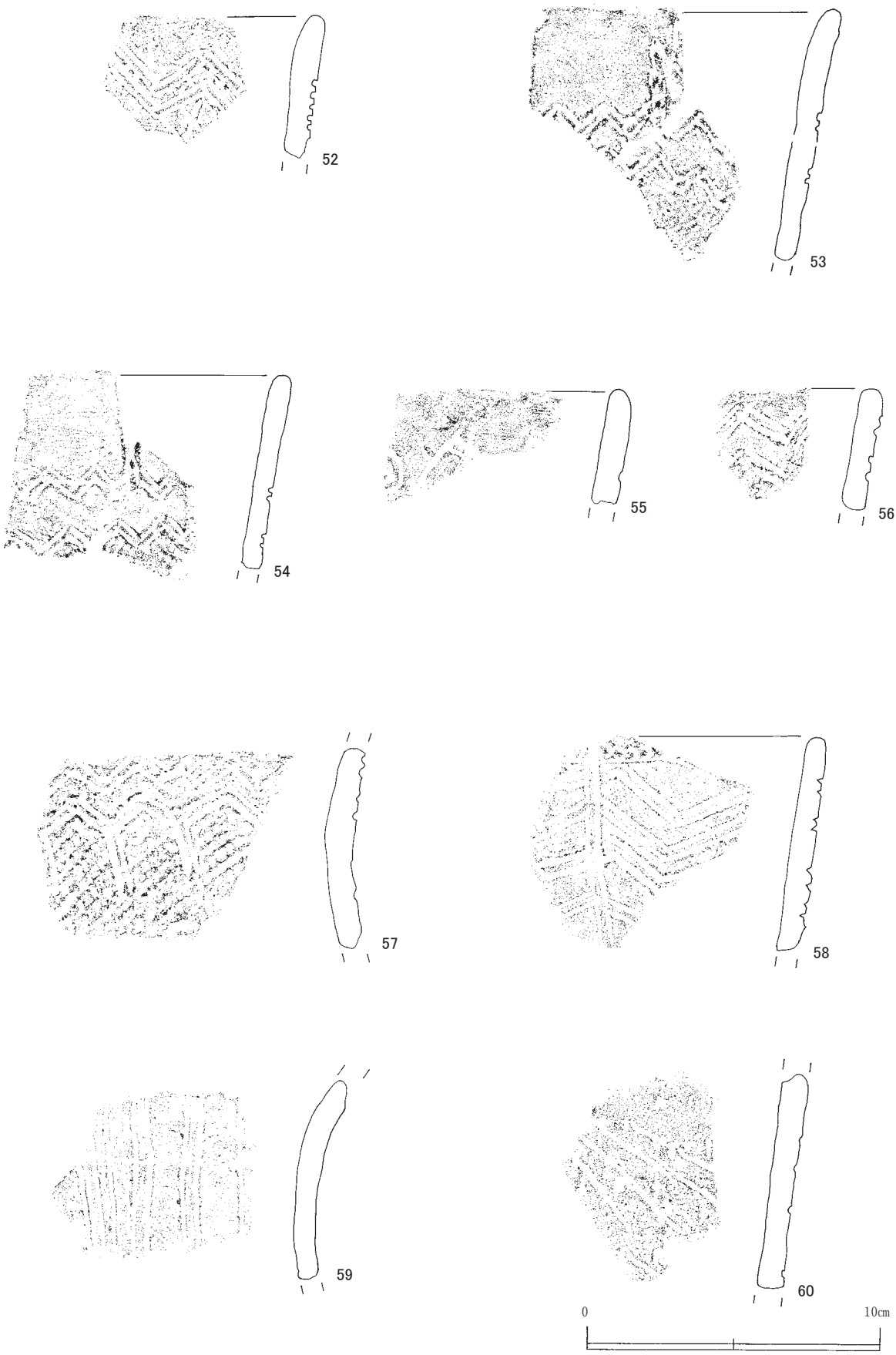
第72図　遺構外出土土器（７）



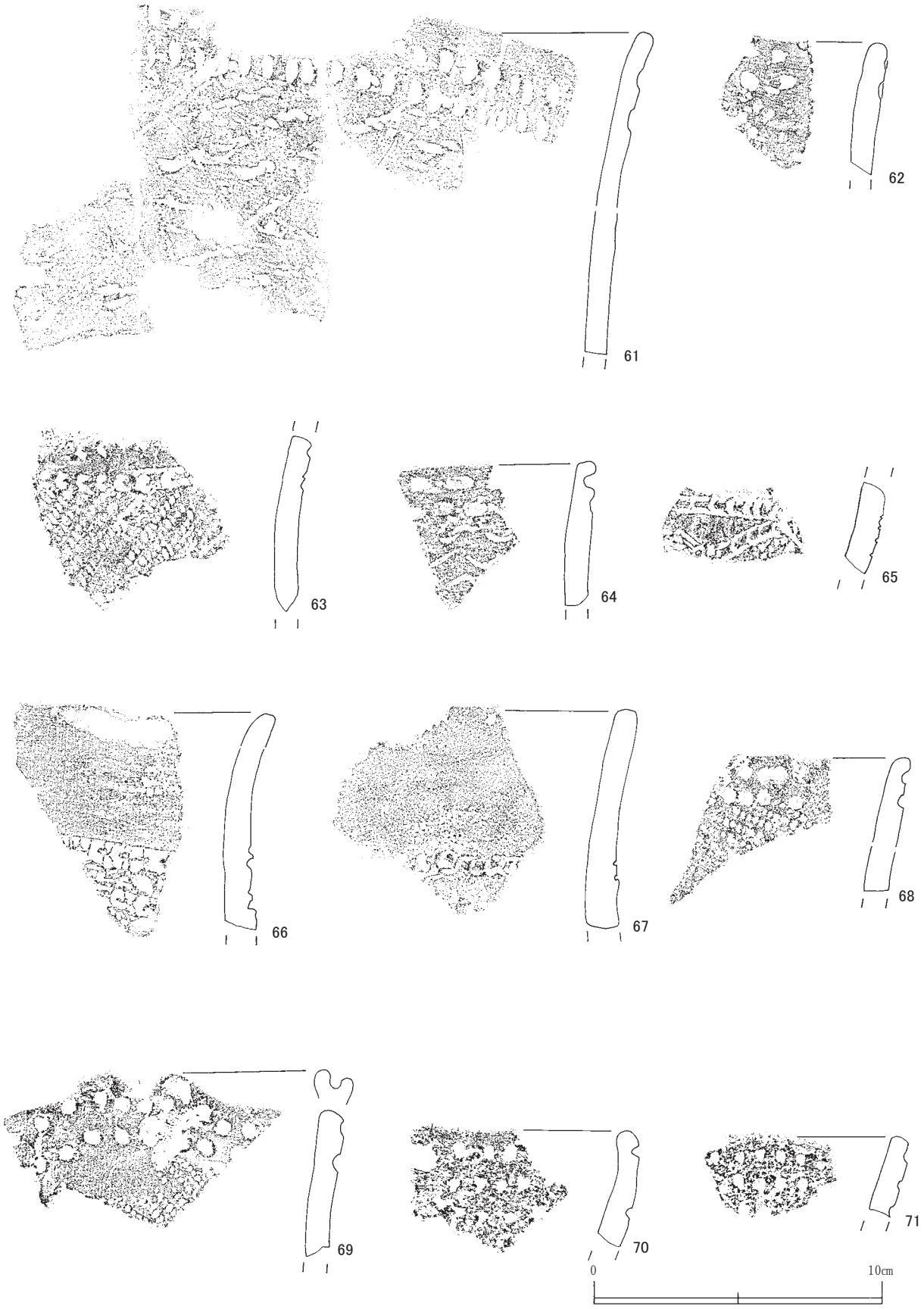




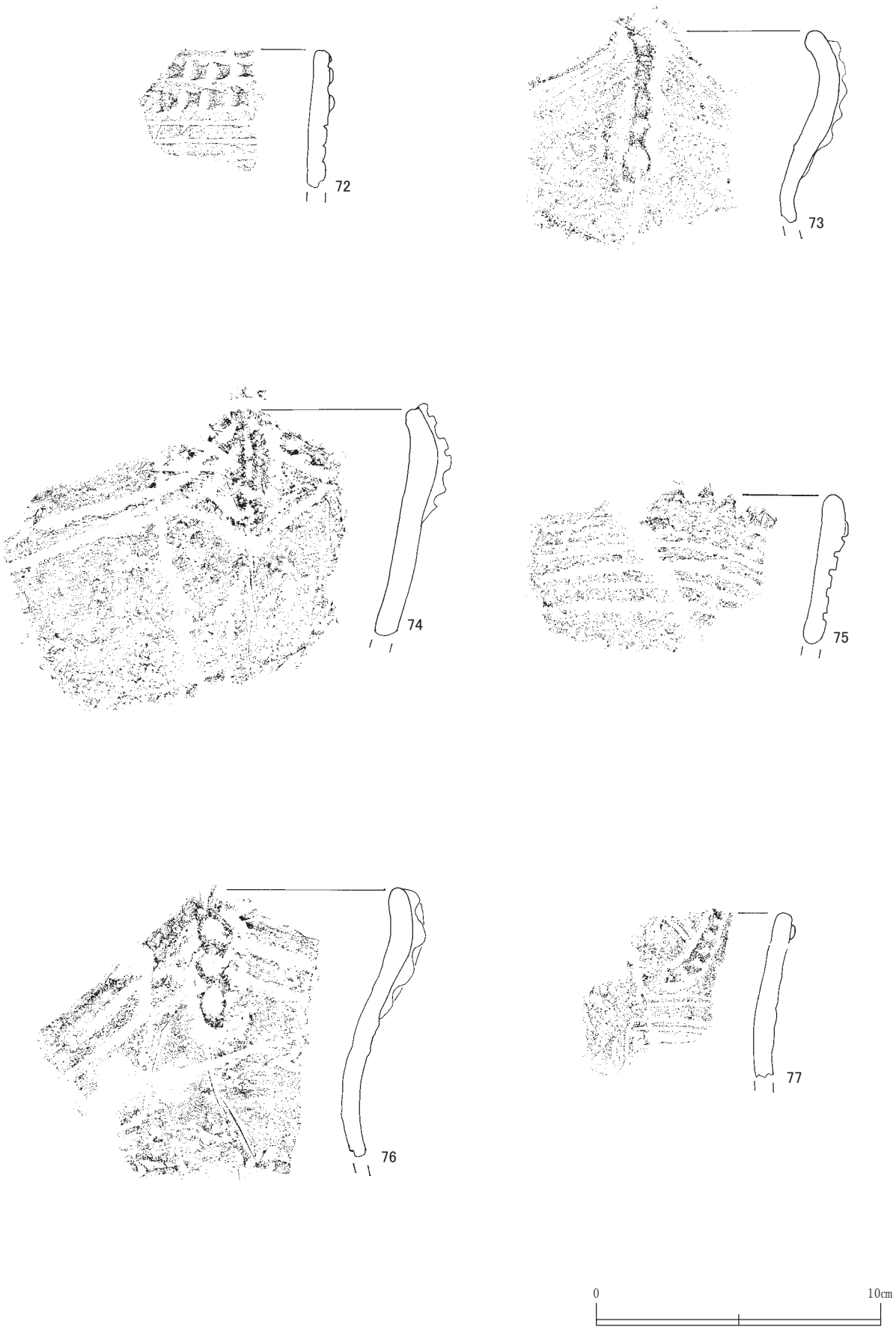
第73図　遺構外出土土器（８）



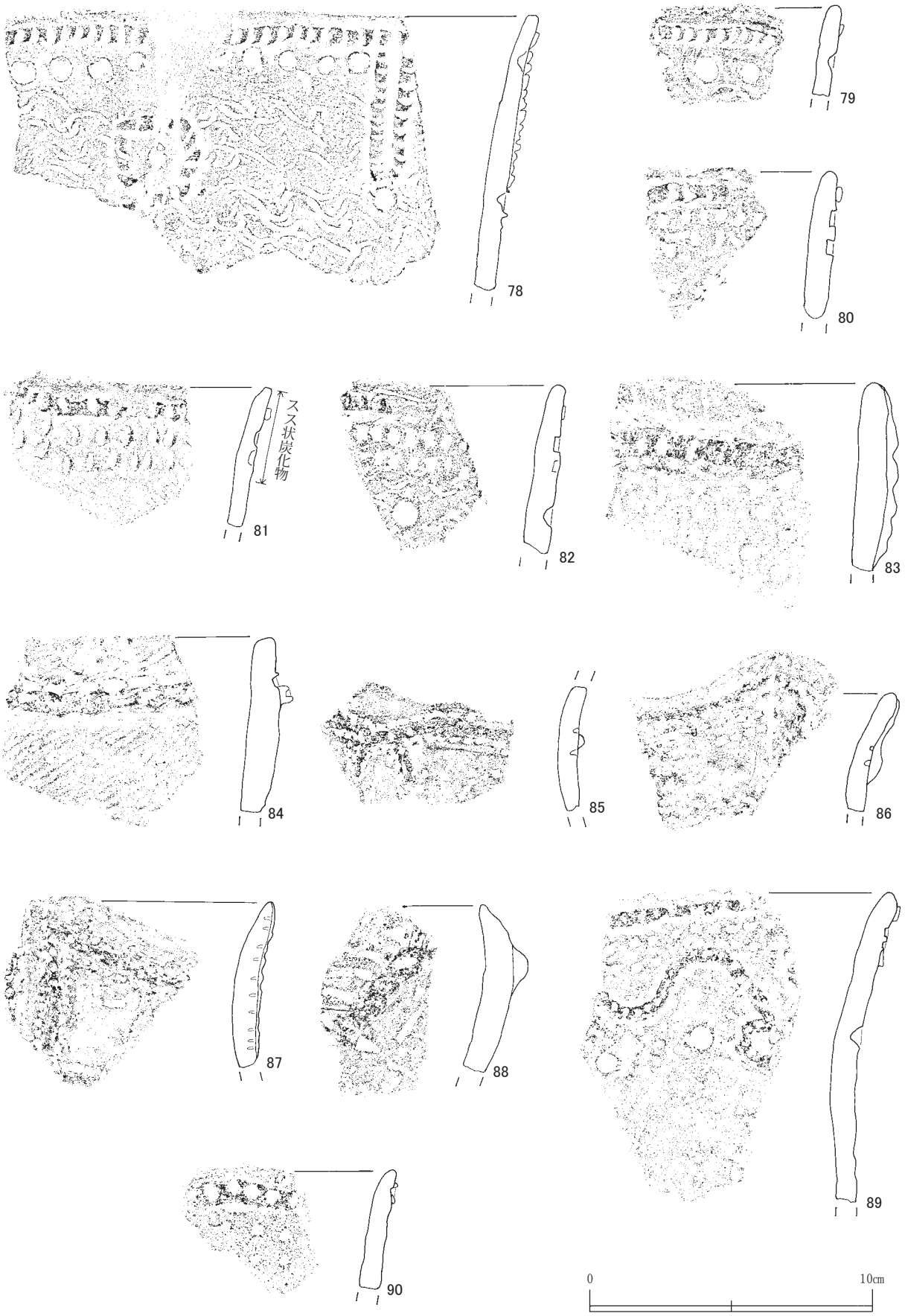
第74図　遺構外出土土器（９）



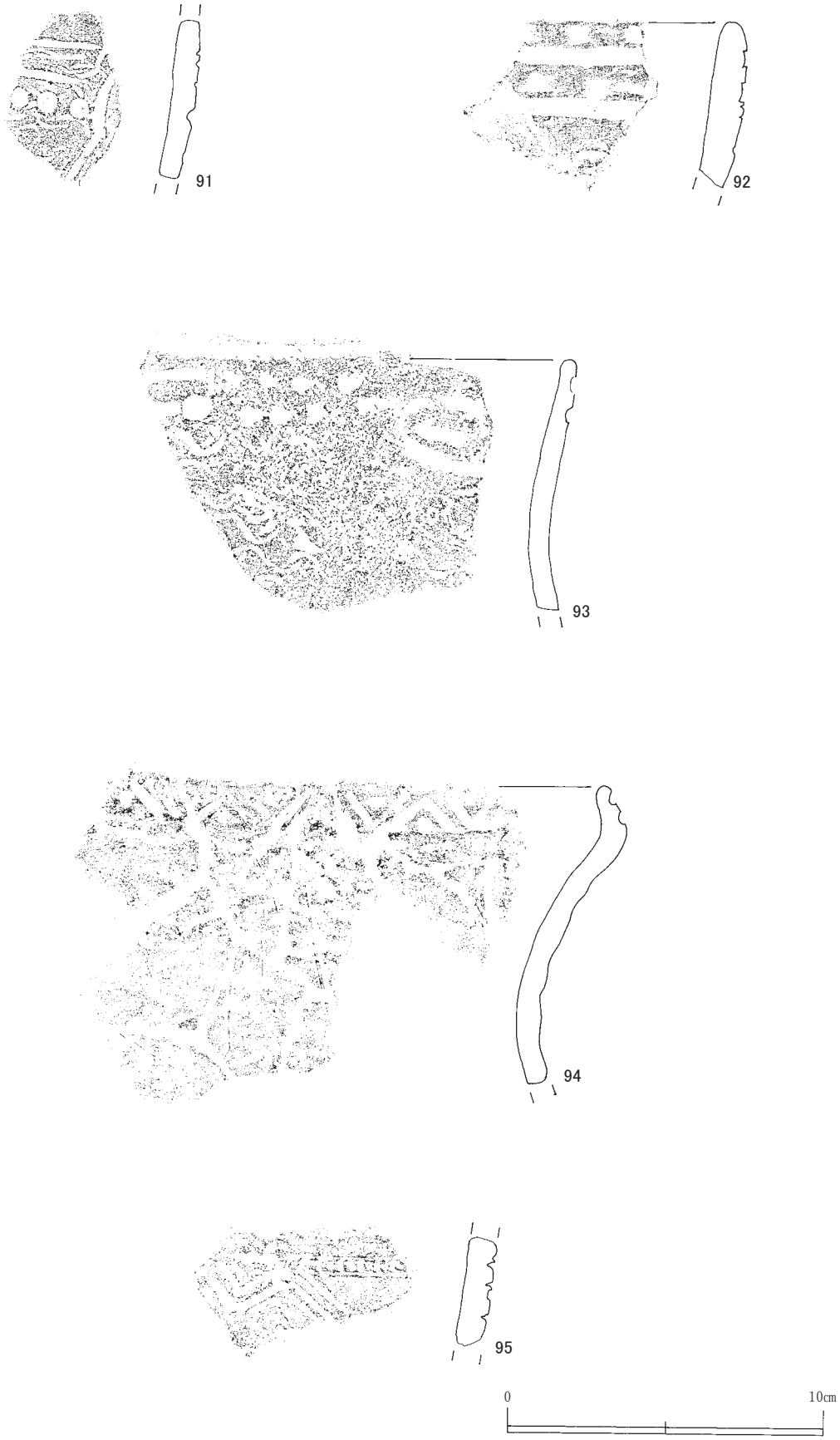
第75図　遺構外出土土器（10）



第76図　遺構外出土土器（11）

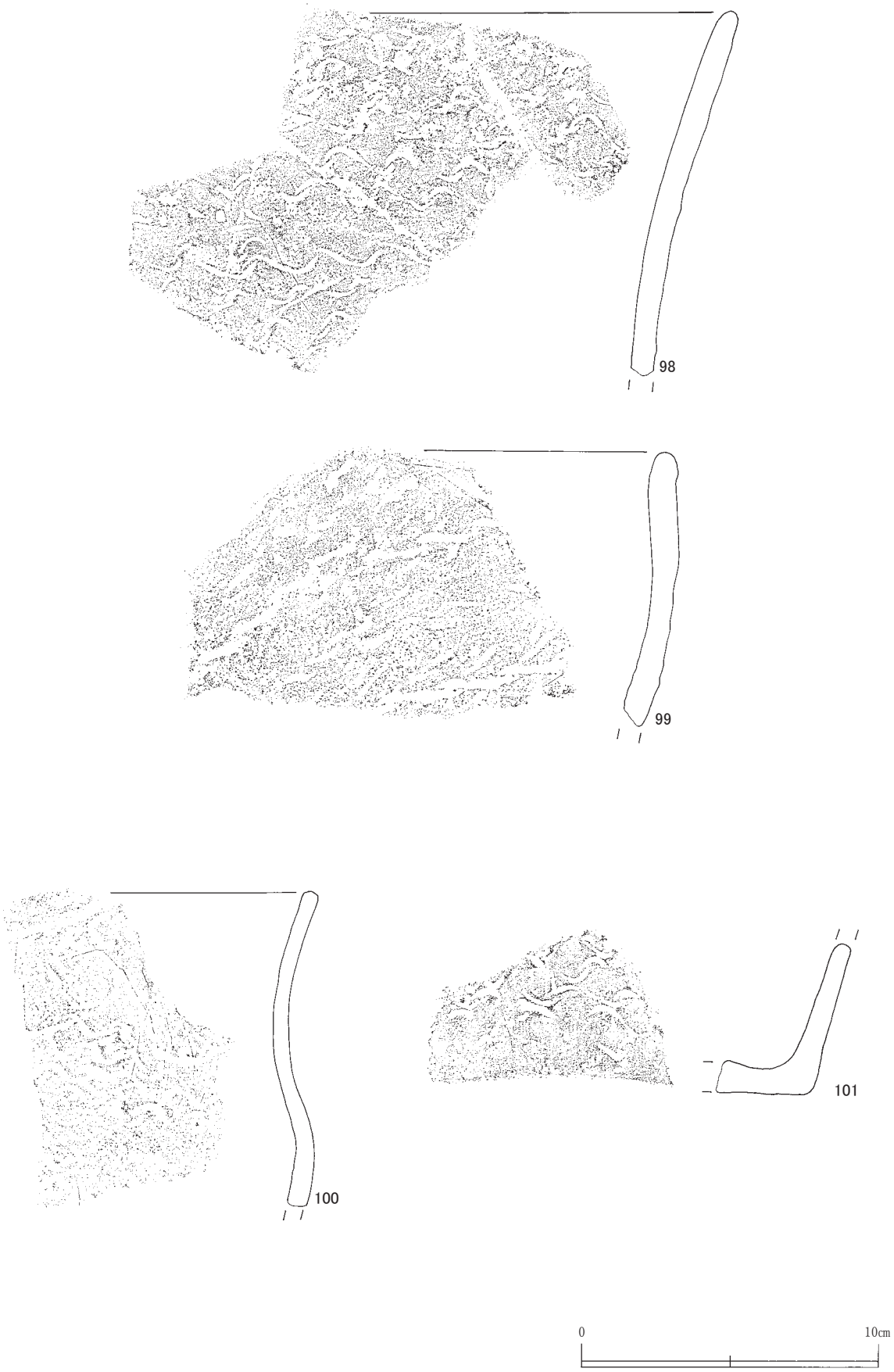


第77図　遺構外出土土器（12）

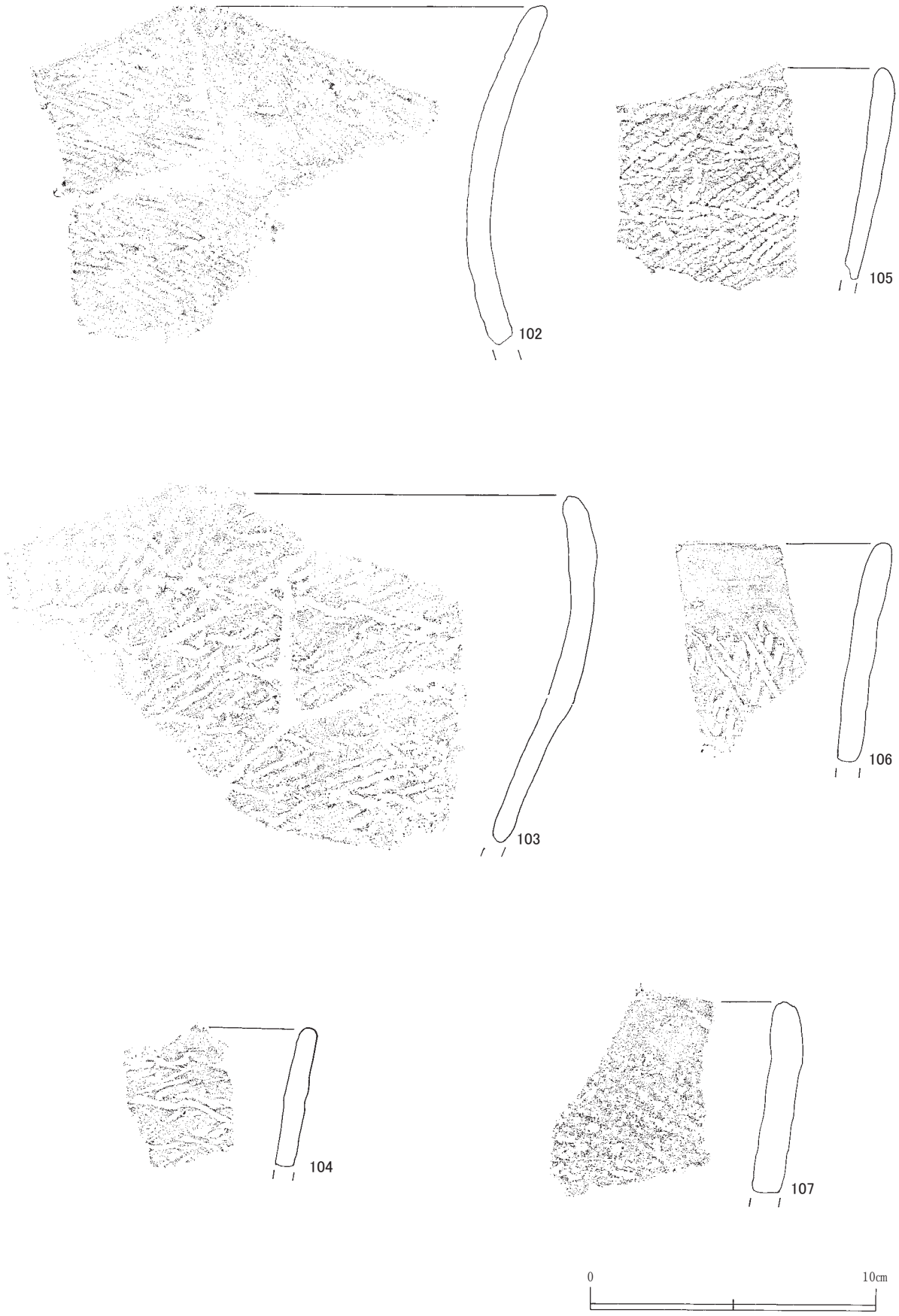


第78図　遺構外出土土器（13）

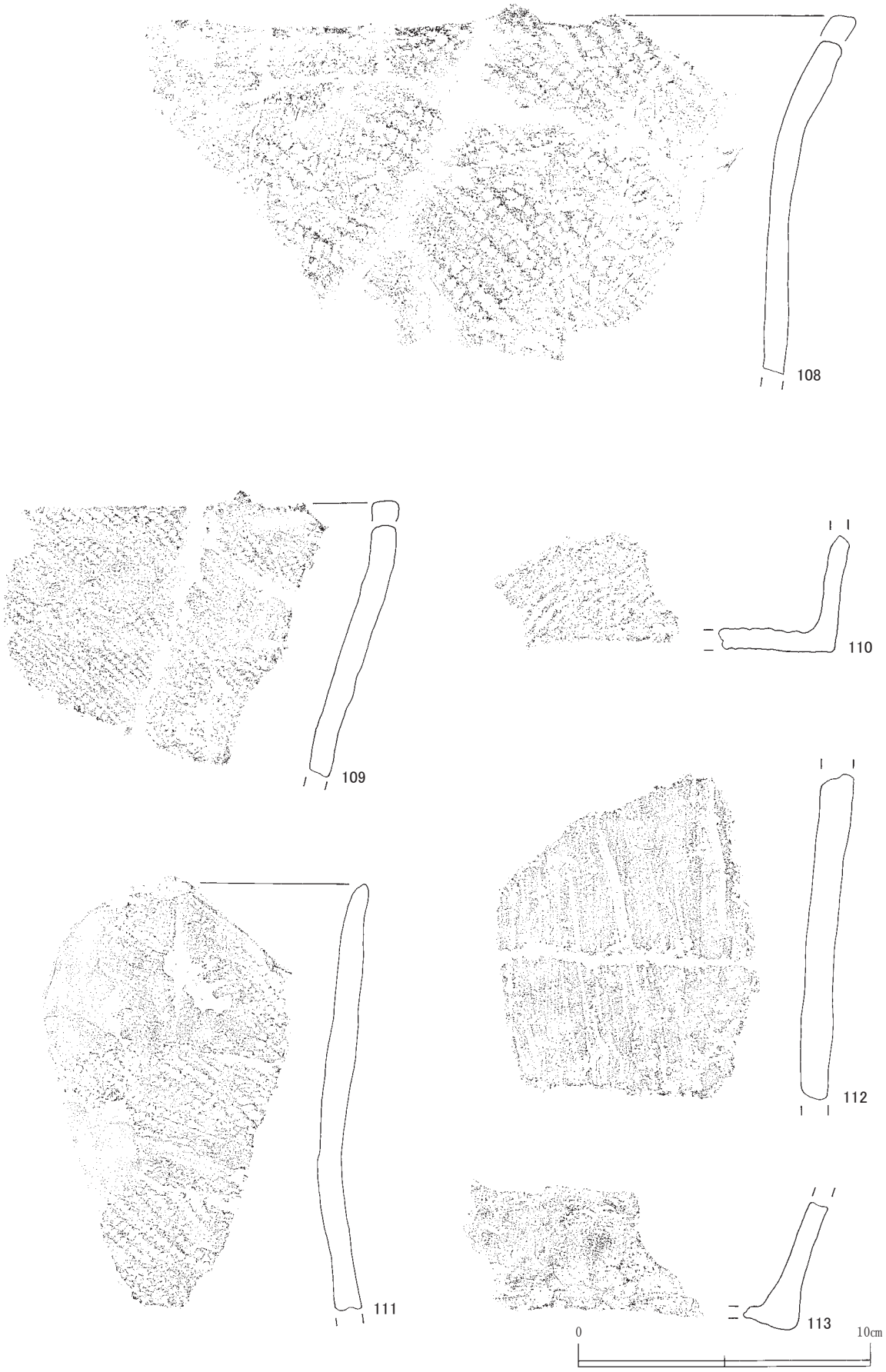
第79図　遺構外出土土器（14）



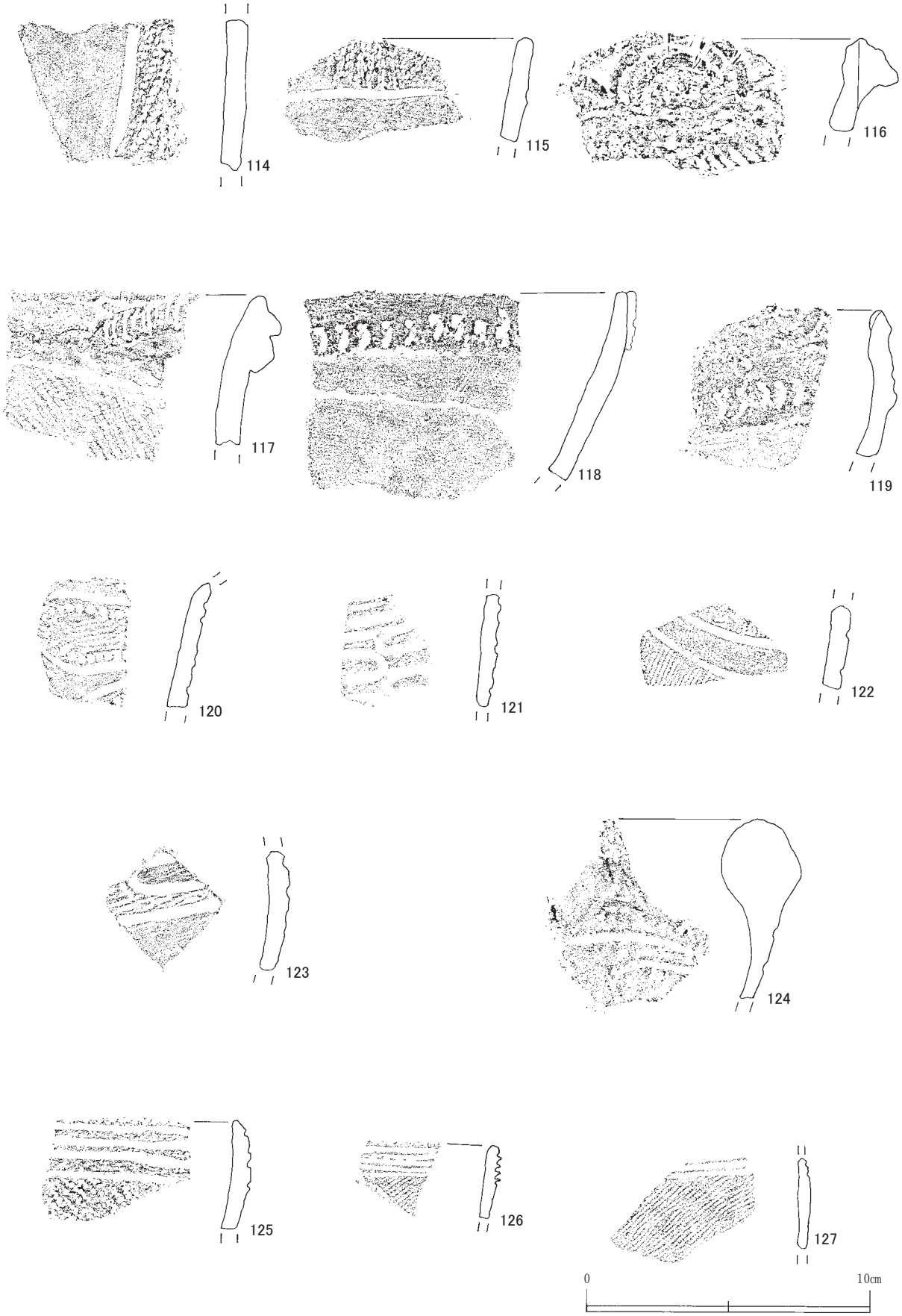
第80図　遺構外出土土器（15）



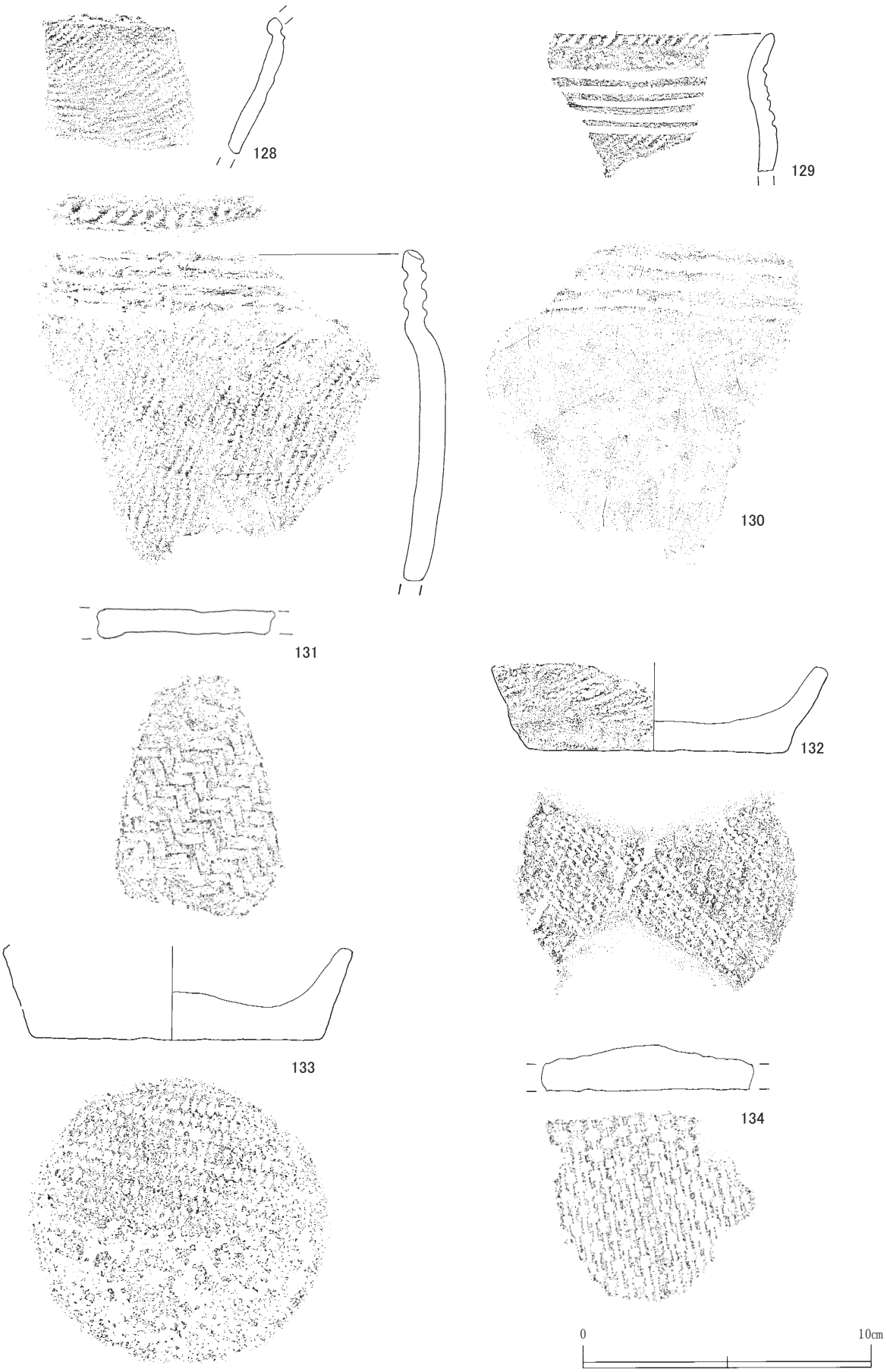
第81図　遺構外出土土器（16）



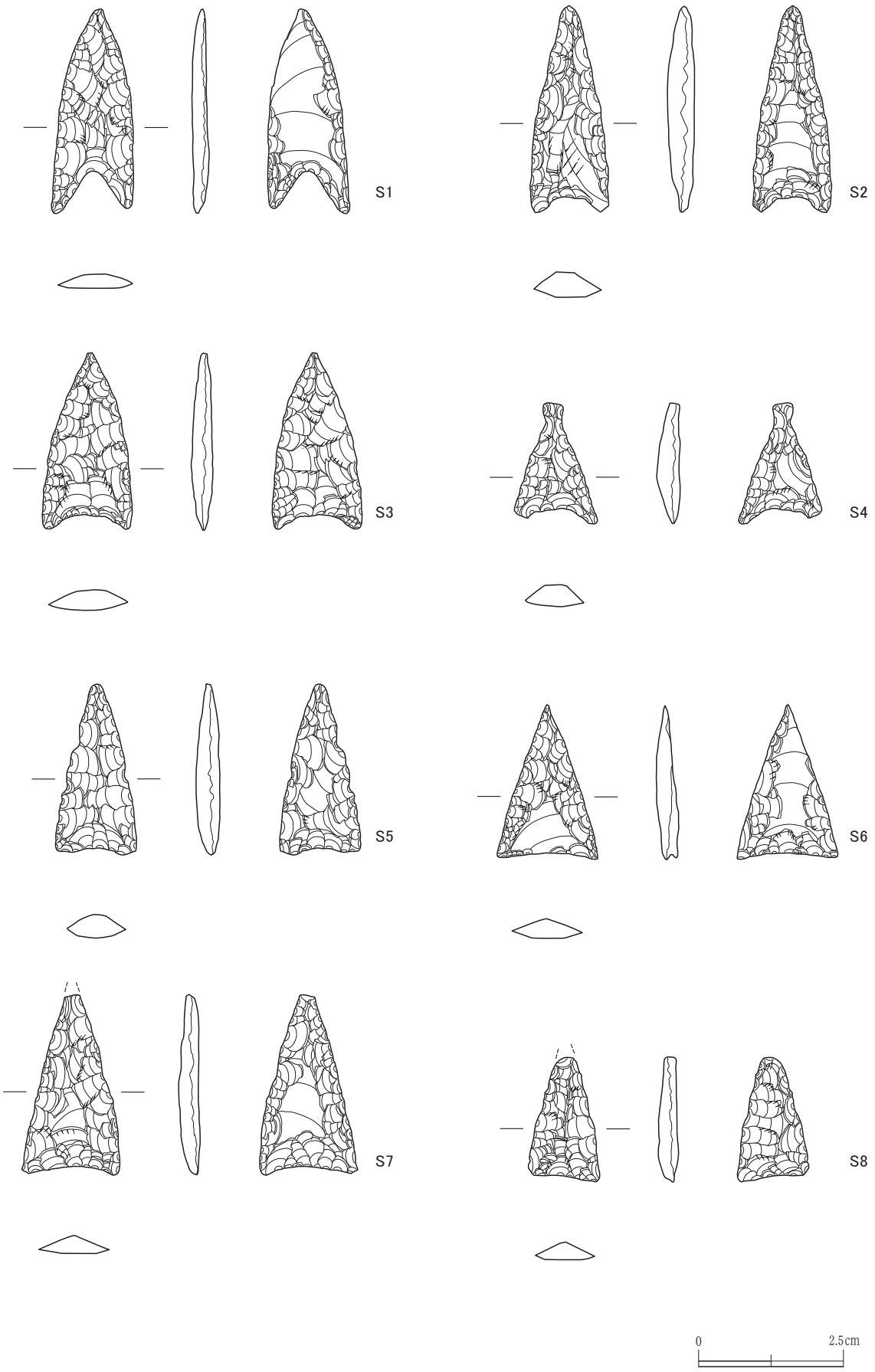
第82図　遺構外出土土器（17）



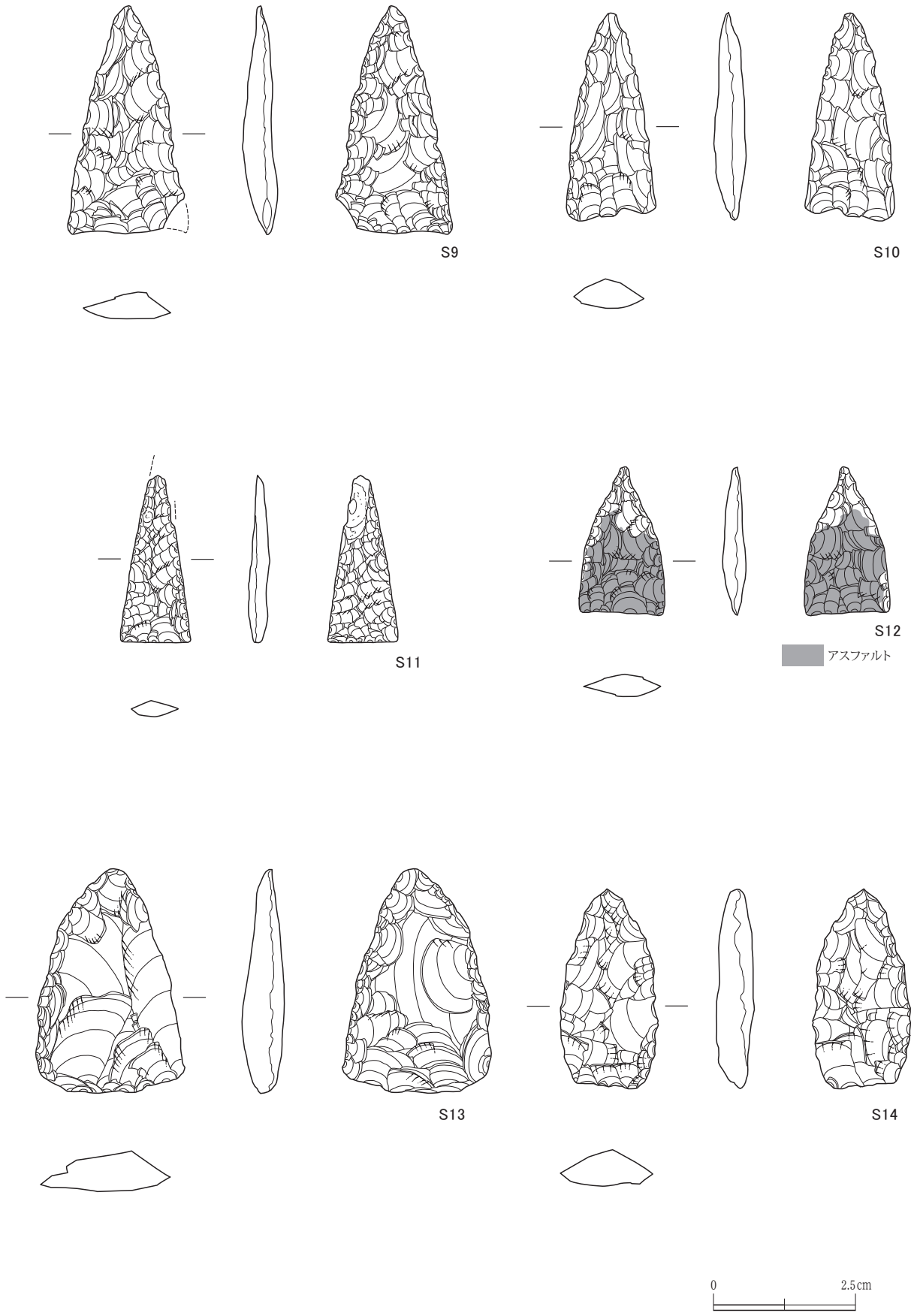
第83図　遺構外出土土器（18）



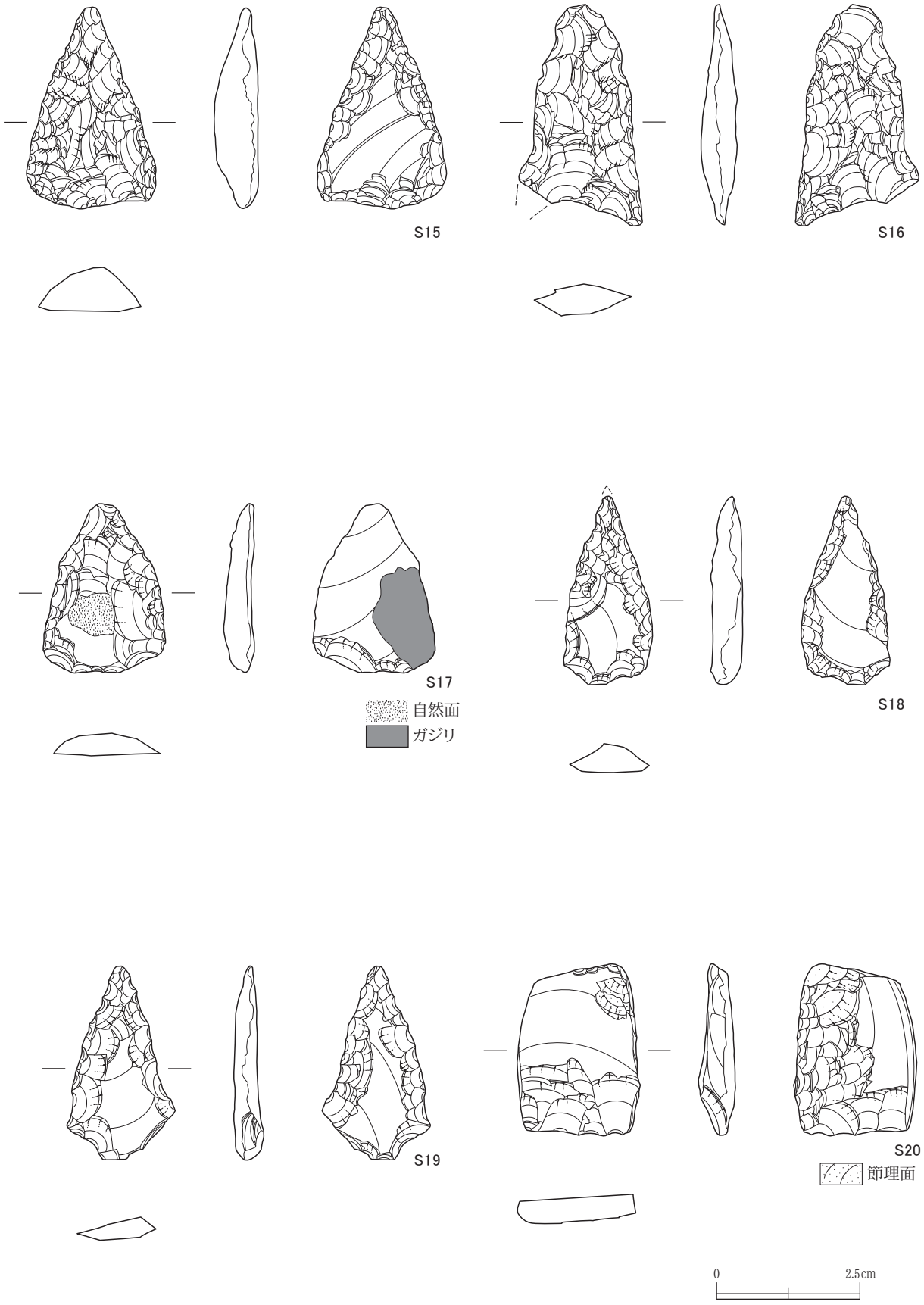
第84図　遺構外出土土器（19）



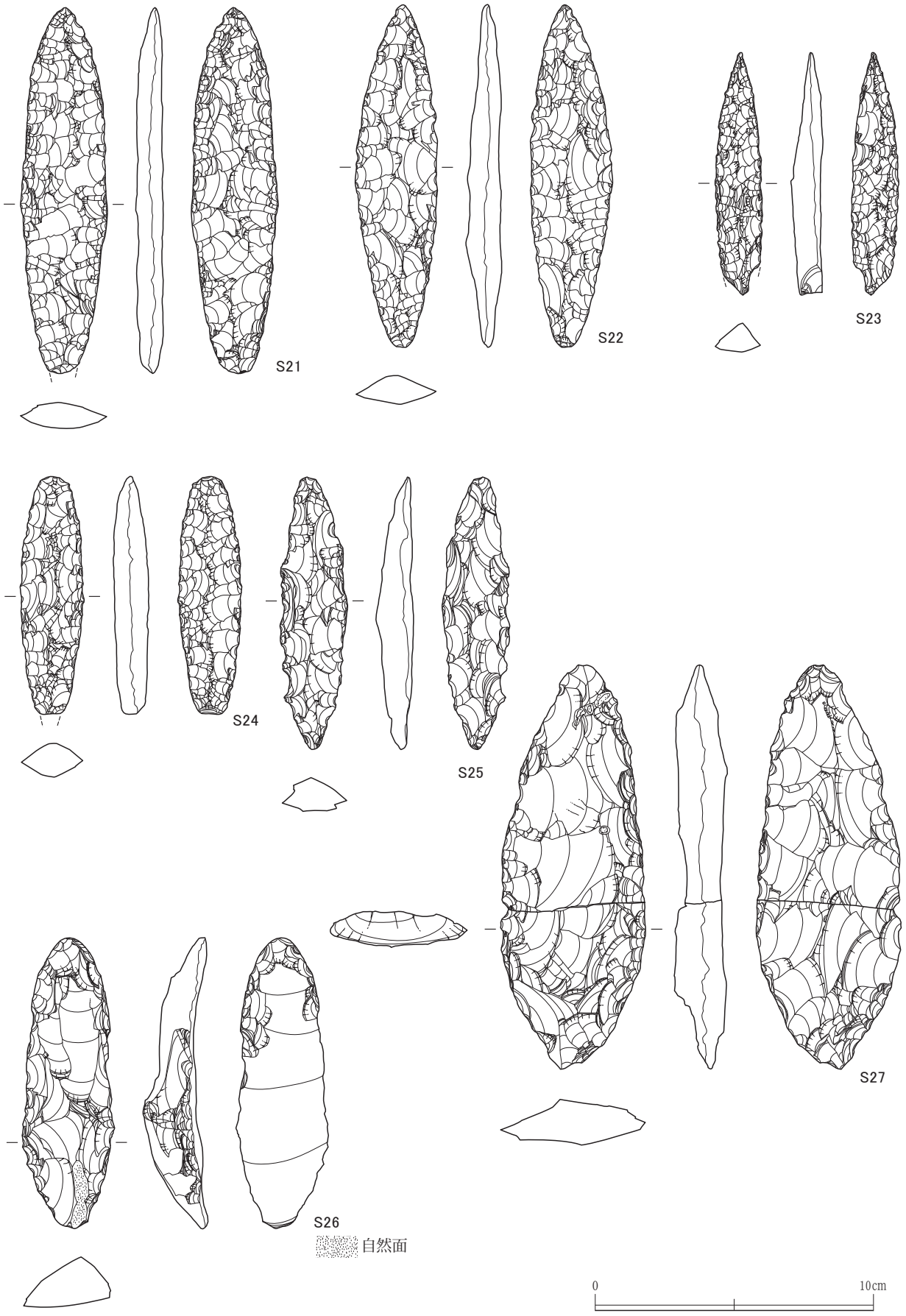
第85図　遺構外出土石器（１）剥



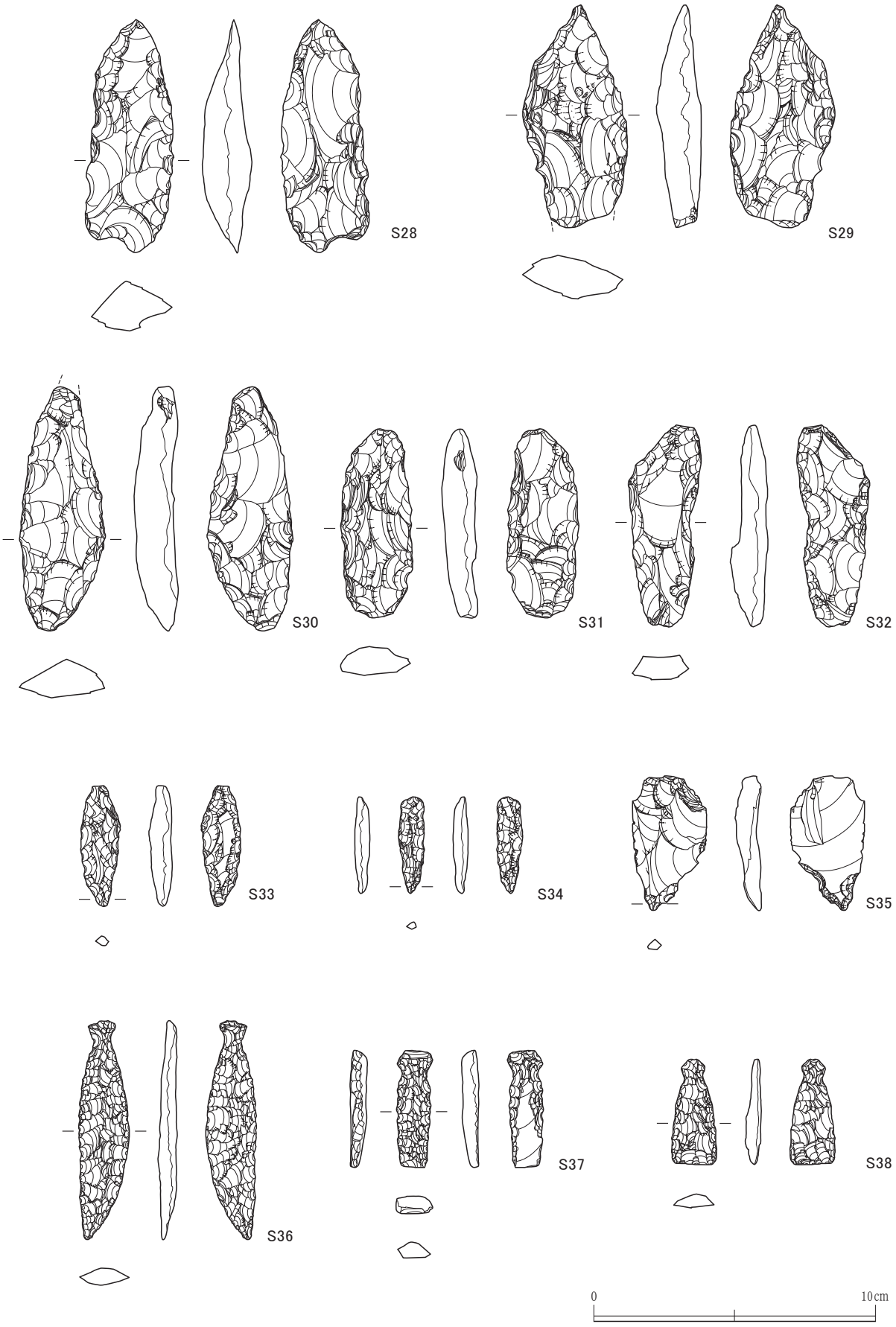
第86図　遺構外出土石器（２）剥



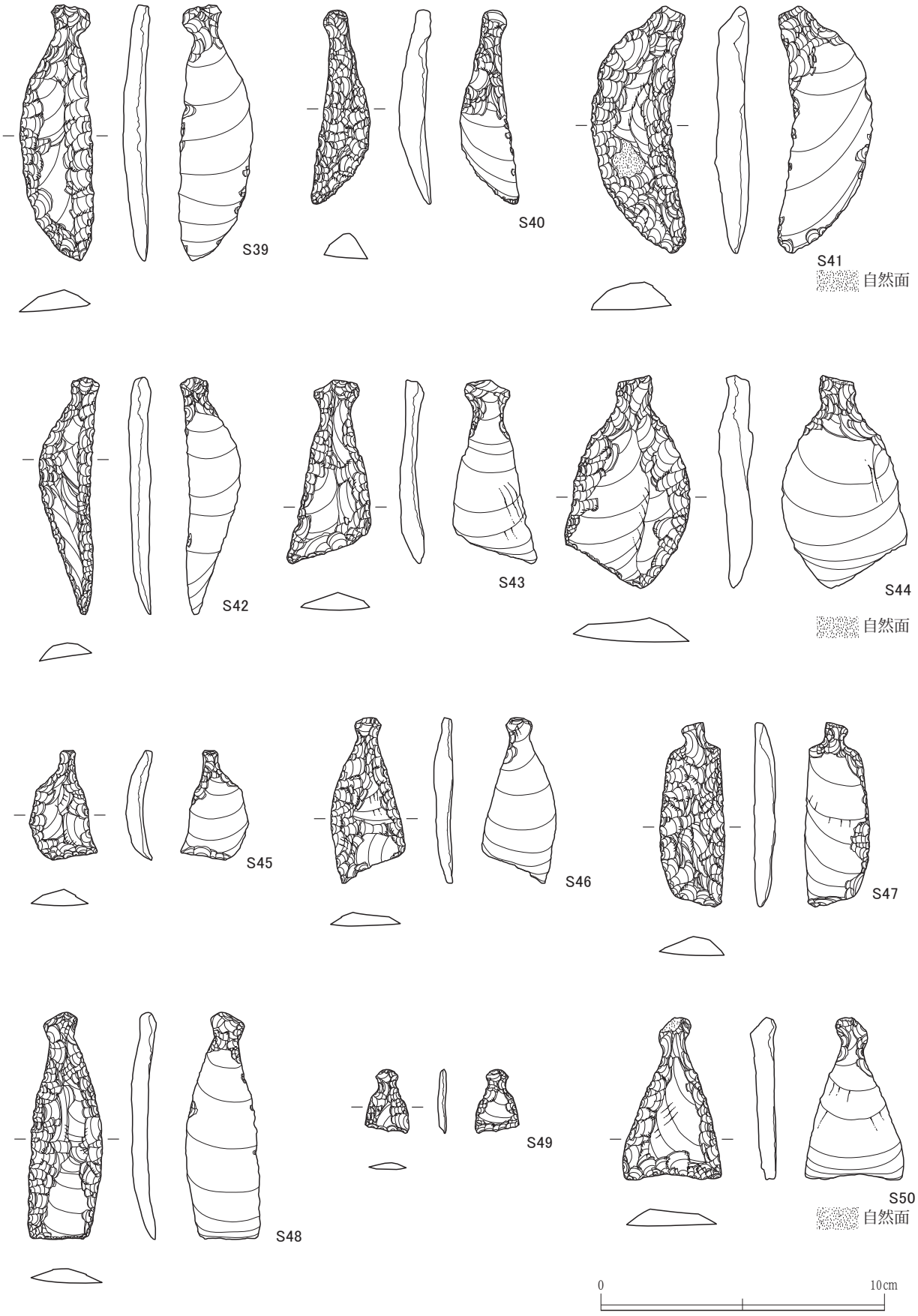
第87図　遺構外出土石器（３）剥



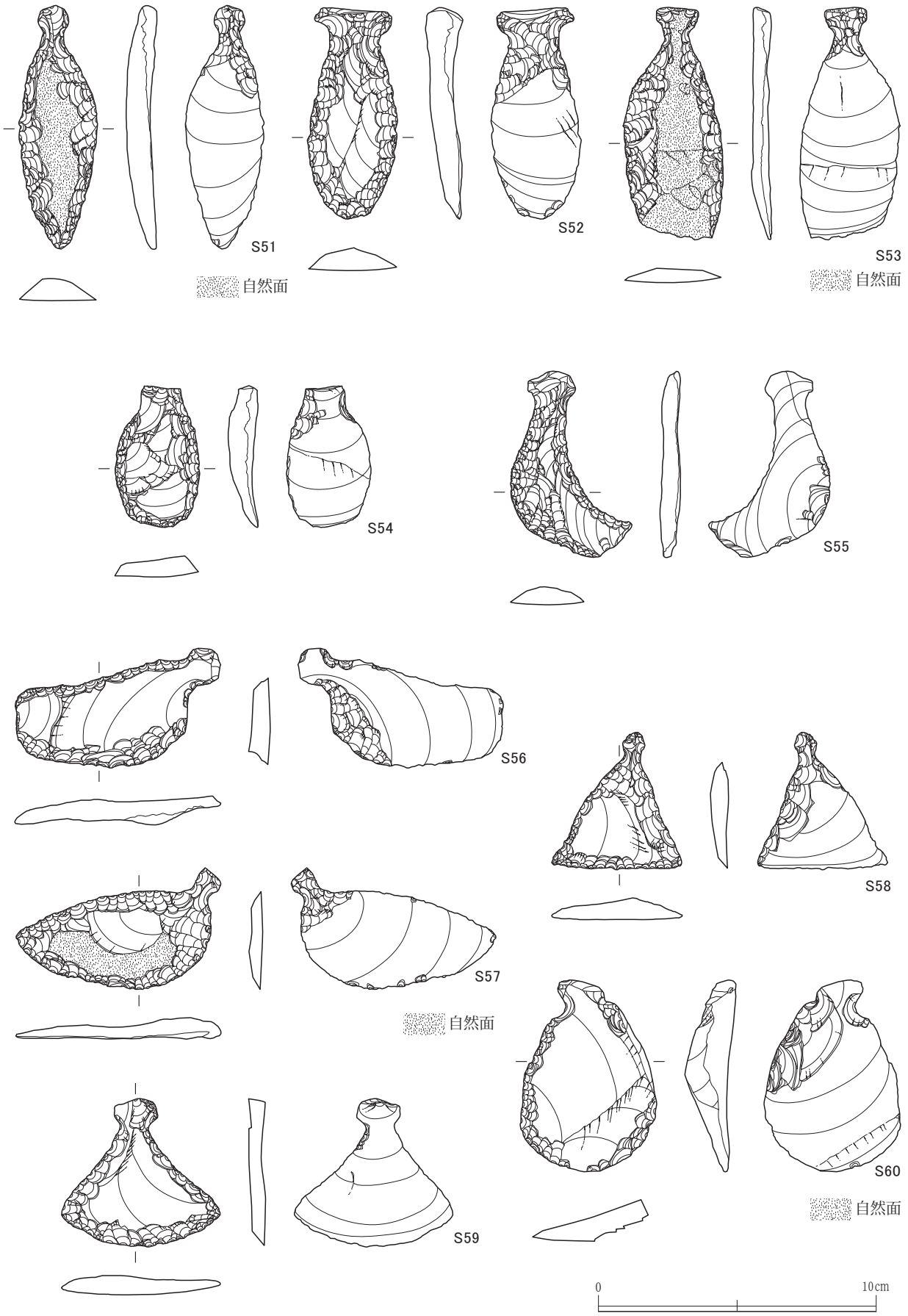
第88図　遺構外出土石器（４）剥・他



第89図　遺構外出土石器（５）剥・他



第90図　遺構外出土石器（６）剥



第91図　遺構外出土石器（７）剥